

——激しい吐き気で、目が覚めた。

「っ……………」

暗闇の中、灰光る青銀の剣を横に少年は。  
もう何度目かわからない、同じ夢を持って余す。

——あなたのせいよ……………」

近くで眠る少女達を起こさないよう堪える少年を。  
その夢はただ共に何度も苛み続け。

最近は更に、新たな憎悪の夢までが加わる。

——あいつだけは——絶対に殺す——

「っ、あ……………」

永く、境界の曖昧な自らの実意よりも。

誰かの夢を我が事と観てしまうその目は。

「なんて……………」——ヤツ……………」

その二つの、血塗られた夢よりも赤い——

呪われた剣の青白い光に、ただ嘔吐き続ける。

C r y      p e r      B / D R .

—dead relative—

C 2 ・ 中 盤

その小さな世界は——『天上人』の宝箱だった。

「天界と、魔界と……地、界？」

自身が今在る、現世を知るため。その、全身をケープで覆う  
占い師を訪ねた、金色の髪の少年——袖の無い黒衣に袴という  
変わった姿の者に、占い師は長い話を始める。

「そう。この『宝界』は、それら『力』の世界の中心地なのじゃ」

そこには、互いに干渉不可能な数多の世界がある。

最古にして最高次の世界が『天界』であり、『神』に似せて

『神』から創られた『天上人』が、原初には存在し。

その直下で絡み合うある三つの世界は、神の軸から強い力を  
得られるものなら、世界間の移動が可能だった。

「『天上人』の末裔が『天界人』……今お主の周囲にいる者じゃ」

『天上人』は三つの世界で、軸から近く最も強く力を受ける、

密度が濃過ぎて光を失った世界をゴミ捨て場にしたといい。

やがてそこは『魔界』と呼ばれ、天上人だったものがしかし  
原形を留めない『魔族』となり、増殖し台頭していく。

「どうやら、『地界』と関わりある身内もいるようじゃが……」

神の軸から最遠の世界は『地界』と呼ばれ、『力』の流れは  
在りながら軸に触れず、宝界や魔界と時の流れも違い。

やがて『地球』という『力』なき場所が、後に注目を浴びる。

「それはいいから。この世界の事を詳しく教えてほしい」

自身が異端者だと感じていた少年は、ただその続きを尋ねる。

占い師も少年の違和感を視ながら、『宝界』の話を始める。

この宝界——魔界と地界の間にあり、神の軸から適度に力を  
受けられる世界は、天界よりもずっと小さく。

神から自由度が高い世界は、天上人に好まれ。

宝界を発見した天上人は、彼らに似せて創った『地上人』を、  
空っぽな世界へ放流していた。

「ただし『地上人』は、天上の鳥たる『天上人』とは違ってな

——神の力を受ける『翼』を持たされていなかった。『力』の  
『意味』に縛られる、『神』の制約を逃れるためにな」

そのため力を持たない地上人は、後の世の地界の地球と同じ  
ように、原理が中心の営みを築き上げたという。

「しかし地界とは、この宝界は似ても似つかない」

天界、魔界、地界と、多様な世界へ行き来が可能なのは、  
様々な、力を流用出来る『化け物』が存在していた。

力なき地上人がその化け物に対抗出来るように、天上人は、  
五つの『聖地』を宝界に置き、その地を通して宝界へ降り立ち

——彼らの秘宝を地上人に与え、文明の発達を促したといわれ。  
「それが……『宝珠』ってこと？」

少年が知る者達を守る『宝』。その正体も少年は興味があった。

「あくまでこの時代——『宝曆』においてはな。『古代』……原初の世では、もつと生活に則した道具や叡智の事だつたらう」  
『宝珠』はあくまで、世界の『力』を司る秘宝であるからと。そんな数多な宝の存在に、この世界は『天上人』の宝箱——『宝界』と呼ばれるようになり。長い時間が過ぎていった。

「しかしこの世界最古の人間は、完全な滅びを一度迎える」  
地上人はやがて、神に依存せず力を流用出来るまでになり。『意味』を無視し神の禁忌に触れ。

そこに至って神もついに、その戒めを宝界に放流する。  
「そうして、宝界に現れたのが——お主のような『精霊』と、自然の脅威をその身に宿す、『竜』という存在なのじゃ」  
「……………」

神はそれを、神に縛られない脅威と知りながら解き放つ。  
それまではただの静物でしかなかった、世界のある部分——『自然』をそのまま、化け物とした『精霊』と『竜』であり。強過ぎる『力』を地上人は制御出来ず、やがて滅びを迎え。それに呼応してか、天上人と神にも断絶が起こる。

『宝珠』が宝界の『地』に降りたのも、丁度同じ時期じゃ」  
天上人は天界に残る『天使』と『地』に降りた『天界人』へ分かれ、『宝珠』を狙う『魔族』との長く根強い戦いが始まり。そのように、天上人と地上人が消えるまでが『古代』。  
その後、神と天使が最有力となった時代が『神曆』であり。そして長く時の流れた今この時代は——『宝曆』と呼ばれた。

「お主からは『神曆』の匂いがするが、どういう事じゃろうな？」  
「……………さあ。それは、オレにもわからない」

その、これまでの記憶が無い少年は、精霊にしては強い自我を持つ事が特徴の『妖精』であると周囲からみなされていたが。見た目はいかにも妖精といった、金色の短い髪と尖った耳に、紫の目の少年は、ここに来た目的の問いを投げかけ始める。

「それじゃあ今、オレが世話になつてる御所は、『天界人』がたまたま住んでる所？」

そこにいる者が普通ではないと、少年は初見から感じていた。  
「天界人は『地』という天空の島にいたが……三十年以上前に、魔族の大きな攻撃の後、五つの宝珠の『守護者』の内の三人が地上に逃げのびてな。『花の御所』はその内の一つじゃよ」

「……………あんたは何で、そんな事知ってるんだ？」  
目前のカードで、占う様子すら見せずに流暢に答えた彼女にも、何か違うと、同じ感想を持った少年に彼女は笑う。

「お主は相当、勘が良いのじゃな」  
「……………」

「わしは遠い昔、『地』の無力な住人だったのじゃ。『宝珠』の守り手達が、地上に降り立つよりもずっと前のな」  
ただしと彼女は、その頃の記憶は、この現在の身体となる前に他の媒介に封じたという秘密も無遠慮に伝える。

「魂魄が初期化される転生とは違った形で……自らの連続性を何とか繋ぐために、『天界人』から『妖』になったのじゃよ」  
それはおそらく——彼女と似た境遇である少年にだからこそ。

「そんな事……出来るの？」

「出来るとも。宝界の力ある化け物、『雑種』——『千族』は、

そもそも、魔界の者や神など『純血』から造られたのだから」

個体は無力でありながら力を制す超原理文明の『地上人』は。

その存在を全て絶やす前に、最後の抵抗を試みていた。

「宝界において、神や魔族は鬼や妖として存在した。地上人は

その化け物と自らを合成し、千種を超える化け物を創った——

それが『雑種』。いわゆる『千族』なのさ」

「……それが、オレを拾ってくれた今のオヤジって事か」

「その通り。そして『花の御所』にいる者達は、正確には——」

占い師曰く、化け物と人間の間に生まれた者を『混血』といい、

一代限りの事が多いが、より強い『力』を持つ者もいるという。

「それじゃアイツらは……天界人とかと人間の『混血』なのか」

知人達の正体を知り、かなりの部分納得したような少年だった。

「ところでお主は、一見は、明らかに妖精の類じゃが」

そして彼女は、少年が初めから口を閉ざしてきた事に踏み込む。

「最早、精霊族であるが妖精ではあるまい。お主は何者じゃ？」

少年はそこでようやく——この占い師の元に来た真の目的。

他の誰にも打ち明けなかった、最後の問いを口にした。

「……遅かったわね、ユーオン」

「——ツグミ？」

その占い小屋を出て、『花の御所』へと帰路についた少年を、

占い師曰く『混血』らしい少女が、道の先で待っていてくれた。

「梅にちゃんと、聞きたい事は聞けたの？」

「ああ。聞く事は出来たけど、答えはあまりわからなかった」

……と。気の強そうな黒い目で、肩につくすれすれの穏やかな

赤い髪の少女は顔を顰め——この『ジパング』という島国では、

定番の着物という服の長めの袖も構わず、腕を組んだ。

少年は少女の難しい顔付きに、微笑みながら首を傾げる。

「何でツグミが怒ってるんだ？」

「バカ。アンタがまた変な所で笑うからじゃない」

目的は果たせなかったというが、それでも納得しているような

少年の顔付きに、少女は何故かイラつとしたらしい。

そんなお人好しな少女の姿に、何かを思い出した少年は、

「——ツグミは、いい奴だな」

一瞬の温かさで軽い懼れ——それを誤魔化すようにまた笑った。

そうして、その赤い髪の少女の近くで過ごした数か月——

優し過ぎた時の夢も、呪われた夢と共に抱く少年は。

そのどれをも自らは語らず……ただ運命を探し始める。

\*

そして。毎夜の如く少年を襲うようになった、昏く赤い夢達。

「——あれ？ ユーオン、寝不足？」

「……………」

少年が『花の御所』を出た後、久しぶりに帰った我が家で。

嬉しそうに寛いで、朝食を口にする妹分——瑠璃色の髪の毛、袖の無い功夫服といった恰好の少女の向かい。サンドイッチを眺めながら難しい顔の少年に、妹分は不思議そうにした。

「鶉ちゃんの所のお布団に慣れちゃったら、こっちのベッド、寝にくかった？」

「いや……そうじゃないとは思うけど……」

妹分も少年も、出ていた先は違うが、どちらも昨日にようやくこの家に帰ったばかりで。数か月前までは元々そこで寝ていた、同じ部屋で夜を過ごしたわりには、

「何か、空気が違うっていうか……ここって、こんなに元々、殺伐だったっけ？ ラピス……」

「そうなんだあ。私はやっぱり、我が家が一番って感じでよく眠れたけどな？」

にこにこ青い目を緩め、機嫌の良い妹分に比べて調子悪げな少年は、しかし「殺伐」を否定しない妹分に苦笑う。

「ふーん。空気が違うと眠れないって、相変わらずヒョワな奴」

ひよいっと、食の進まない少年の朝食を、隣に座った誰か——短い下衣の水夫服のような恰好の少女がぱくりと口にする。

「こら、水華ってば！ 朝ご飯足りなかったら、向こうの缶詰開けてねって言ったでしょ」

「だってコイツ、すぐに食べそうにないし。それならコイツが缶詰でいいじゃない」

「それでも普通はね、女のコがヒトのご飯、取ったりしないの」もう、と肩までの瑠璃色の髪を揺らす妹分に、朝食を奪われた金色の髪の少年は軽く笑った。

「ミズカは相変わらず、遅しいな」

「アンタね。それ、褒め言葉のつもり？」

少年のサンドイッチを容赦なく片付け切った、茜色の長い髪の少女——毛先をくるくると丸め、二つに分けたポニーテールをまとめる黒いリボンがひらりと揺れる、水華と呼ばれた少女は。

少年からは二つ年下であるが、お兄ちゃん然とした目で笑う少年が気に喰わないのか、不服気に水色の虹彩と紅い瞳孔——この多彩なヒトの住む世界でも、あまり見ない色の目で睨む。

その少女達と金色の髪の少年が初めて出会ったのは。

妹分とは、少年が現在の養父母に拾われた約一年前で。

養父母が里帰りをした時、養母の両親の元にいた茜色の髪の少女の姿に、何故か少年は、初見で強い衝撃を受けていた。

「……………何だ……あれ……？」

本来はどちらも魔性の紅だっただろう、少女の長い髪と目が。

その背に刻み込まれた何かの影響で、茜色の髪と水色の虹彩の目になっているように少年には観えた。

紅い瞳にたたえられる赤い光は、少女が赤と紅を一つの身に複合して持っている事を——勘の良さは非凡だと、行く先々で何故か太鼓判を押される少年へと知らしめる。

その、有り得ない出で立ちもさることながら、

「……会ったことなんて、ないのに——……」

ただ純粹に、とても鋭く整った顔立ちの少女に——何故か強く、懐かしさを感じた少年は、しばらく呆然と少女を見ていた。

現在、大体の世界地図では中央にある島国『ジパング』の、更に中心である『京都』という町の少し南で。

一見何の変哲もない、ジパング式の一般家屋内にいる三人の少年少女は。しかし内装は商業の発達している『西の大陸』で好まれる、道具が充実した『西洋風』と言う台所の机に集まり、ここの生活が一番長い妹分が用意してくれた、朝食と飲み物でまったりしつつ、今後の事を誰からともなく話題に出した。

「あたしはとにかく、『地』まで行く方法を探す。レイアスとアフィが帰ってくれば、何か知ってるかもしれないし」

茜色の髪の少女は、何故かそんな事を目的とし、妹分についてこの家に来た次第だが。元々少女には知った家でもあった。

というのも、

「でも水華。おとーさんとおかーさんの事、ここで一緒に待つのはいいんだけど。本当のご両親を探すのは、もういいの？」  
瑠璃色の髪の妹分と茜色の髪の少女は、年は妹分が一つ上だが、形の上だけなら、妹分は少女の姪となる。

何故なら少女は妹分の養母の義妹で——つまり、妹分からは義理の祖父母の養女だった。

「レイアスとアフィも、いつ帰るかわかったもんじゃないしな」  
一応その二人の義理の妹にあたる少女はともかく、不遜にも、拾ってくれた化け物達を呼び捨てにする少年に、

「あ。ユーオンやっぱりここに置いてった事、根に持ってる」  
妹分はさらりと、悪意なく笑いながら言う。

少年も同じくらい、さらりと笑って返す。

「そりゃな。ある日突然、目が覚めたら家には誰もいなくて、『しばらく出かけてきます。留守をよろしくね』って書置きが一つだけでき」

「うわー。そりゃ鬼ね。いくらコイツが新入りで引きこもりの養子だからって、その放置ぶりはやるわね、あいつらもラブピも」  
「やだなあ？ 私はちゃんと、急いでるんだし、書置きは別にいるかなあ。って言ったよ？」

「……」

鬼。と妹分を見る少年にも構わず、

「大体こないだの、水華のご両親探しの旅が、突発過ぎなの。付き合う身にもなってよね」

その急な出発の原因とも言える、妹分が同伴をする事になった旅に出た少女は、

「誰が付き合えて言ったのよ」

どちらかと言うと、本当の両親を探すというのは口実に近く、一人で養家を飛び出し、自由気ままに世界を放浪する……はずが、思わぬ目付け役がついた結果にひたすら不服気だ。

「しかもあんた、完全に足手まといじゃない」

「うん。私ちゃんと、水華の足を引っ張って無茶させないようにつて、おば様の言い付けしつかり守ってるでしょ？」

あくまでニコニコ、そんな事を言つてのける妹分は。

この、魔物や千種の種族といった危険物が横行する世界での一人旅を許されるような、人間ならぬ力を持った少女と違い、護身術の心得がある程度の、基本はただの人間だった。

首元の小さな笛と、常に連れ歩く妙なペットの存在を除けば。

そんな妹分と少女のにぎやかなやり取りを、何処かずつと、上の空で笑つて見守る少年に、

「……しっかし何か、調子狂うわね」

「ユーオン……何か本当、今日は元気ない？」

「——？」

この春に拾われた少年よりも、ずっと早くから親戚関係だった少女と妹分は、同じようなタイミングで少年に目を向ける。

「生粋のジパング文化『花の御所』にホームステイして、何か心境の変化でもあったわけ？」

家が無人と化した後、拾われてから初めて一人で遠出した時、揉め事に巻き込まれた少年を保護し、引き受けてくれたのが、『花の御所』で——そこに住む人間ならぬ者達だったのだが。「……オレ、そんなに何か変わった？」

実際、少年とこの少女は、少年が昨春に拾われてから数回、養父母の里帰りの時に会った程度であり。

それでも少年は、少女の私の強さに、何故か感じる懐かしさ——理由なき連帯感のような思いに。不思議な程に気を許せる、数少ない相手の一人がこの少女だった。

「前にもつと、ヒトを見るなり、剣の相手をしろつて煩かつたじゃない。全くてんで弱つちいくせにさ——」

「それは水華やおば様が強過ぎるだけだと思っただけな。それで魔法も使えるんだから、何ていうか反則だよ、水華達つて」同意。と強く頷く少年に、育ての母から幼少時よりみっちり剣を仕込まれている少女は、

「そもそもあたし、剣士じゃないし。別にコイツが強かつて、相手しないけどさ」

ふいつと、両手に着けた腕輪の一つを指の間で弄ぶように回す。「……………」

その少女が剣を持たされず、魔法具であるその一對の腕輪を、武器として使うよう方針を変えられた理由……——

五感の及ぶ範囲の現状把握に優れる、直観を持つと言われた少年は。それが少女の育ての親が、才能の有り過ぎる少女への歯止めとした——救命処置だとうつすらわかっていた。

茜色の髪の少女が、初対面の少年の視線に気が付いた時は。少女は空のような青い髪と目を持つ、厳しげな顔付きの女性に剣の指南を受けているところだった。

「——何アイツ。初めて見る顔だけど」

「こら水華。真剣使つてる時に、気を散らすな」

少年からは義理の祖母になる、しかし見た目は養母と同じで非常に若く見える青い女性に、剣を教わっていた少女は。最早達人の域の剣の腕を持つと、少年には観えていたのだが、

「もうこっちはいーでしょ、魔法使わせてよ。どうせあたし、剣じゃなくてクレセントを使えって言うんだからさあ」

手の甲と手首を覆うタイプの手袋の、中心に留まる両の腕輪を指に引つ掛け、少女は不服そうにする。

「バカ。もつと強くなれば、剣を使っていーと言ってるでしょ」少女も、少女に剣を教えている女性も、剣士の特性か基本的に柔和さがなく。しかしどちらにも、鋭く整った顔立ちで、表情の端に漂う不敵さも似ており、赤系と青系という全体像の違いがなければ、実の母娘と少年も認識しかけた程だった。

最もこの頃、少女は自らが養子である事を知らなかったが。

青い髪と目の女性は、まっすぐな長い髪をサラリとかきあげ、「誰相手でも殺さず勝てる程強くなれば。いつでも好きなだけ剣を使いなさい」

当り前とばかりそれを言う女性は、確かに剣自体の類稀な腕と、剣に纏わせる事が出来る大きな力と……それらを生かせる鋭い感覚の持ち主である事が少年にはわかったが。

「……どっちもバケモノ過ぎるだろ」

目前の相手の戦闘力を観ることが、何故か染みついた性質の少年は、ただ茫然と——二人の剣士を観続けた。

剣を使う条件を決して変えようとしなない青い女性に、少女はむすつとした顔を見せる。

「またそんな無茶言う。何か矛盾してない？ それ」

「何であつてもうちの家訓。うちのコでいる内は守りなさい」

その青い女性曰く。うちのファミリーの一員になりたいなら、弱い者イジメをしない、勝手に死なない、無駄な力を使わない

——新参者の少年にもその三つの戒めが告げられたのだが。

それは難しいと、心から少年は悩ましく思ったものだった。

「結局……殺すな、でも殺されるなって事だろ？」

ヒトを殺すための剣を持つていいのは、相手を殺さず勝てる時。

それは矛盾と言う敏い少女に、少年も全く同感なのだった。

しかし弱小な人間の妹分は、冷静な見解をもって笑う。

「大丈夫。ユーオンはそもそも弱々だから、誰相手でも弱い者イジメじゃないって♪」

更には、無駄遣い出来る力も無いとまで妹分は追撃する。

「精霊の使えない精霊族さんだもんね、ユーオンって」

「……いつもの確過ぎてヒドイよな、ラピスって」



『宝珠』などのように、世界の強力な外付けの『力』の中で、三つ目に強大だと言われる『精霊』は種々の自然の力の化身と  
言うが、その時の少年はそれすらも知らない状態であり。

そうした弱小な少年に比べて、茜色の髪の少女が持った力は強過ぎるのだと——妹分は少女の事情も冷静に説明する。

「水華はね、剣も使っちゃうと、殺人鬼なレベルらしいよ？」

その意味でもそれは救命処置であると、なるほどと何故か、納得していた少年だった。

そうした事を少年が、ぼけっと思いついていた時に。

「でも、鶴ちゃん達の所の方がユーオンは良かったんじゃない？」  
「え？」

突然、わりと真面目な目つきをして、少年を見て言った妹分に、少年と少女は揃って振り返る。

妹分は深い青の両目に僅かな苦笑を浮かべ——一見肩までの長さの瑠璃色の髪から、部分的に長く伸びた、そこだけを丸い髪飾りで括った髪を弄りながら呟く。

「まさか鶴ちゃんのお家でお世話になるなんて。本当に、私も羨ましいくらいだもん」

少年が世話になっていた御所には、少なくとも三人子供がおり。その子供達と後一人、仲の良い近親の子供は、この妹分の方が以前から友達関係だったらしく。特に近親の子供とは、PHSという伝波道具で連絡を取り合う間柄なのだが。

「本当は、保護者としておとーさん達が謝罪と迎えに行かなきゃダメだったんだし。やっぱりもう少し御所にお世話になったら？」

「まさか」

妹分の心配をあっさり否定する少年は、妹分が帰ったと知るや否や、無理やりその御所を後にこの家に戻ってきていた。

「ゲンジ達も、いいって言ってくれたし。剣もまた、訪ねれば教えてくれるしき。わざわざ、それ以上面倒かける事ないだろ」

剣の師で、赤い髪の少女の父の名を穏やかに笑って言う少年に、妹分は無言で、少女の方は何処か呆れたような目をする。

「それならちゃんと、妹の事守ってやれよって言われたしな。オレの仕事は、ラピスのいるこの家の番人だろ」

「……ユーオン。自宅警備って言えば要は、引きこもりさんの代名詞なだけだね」

「？」

「そもそも、アンタの弱っちさでよく言うわ。精霊族なのに、精霊も使えないくせに」

「相変わらず容赦ないな、ミズカ……」

何故か全身傷だらけの、瀕死の状態で今の養父母に拾われ、それまでの記憶を全て失っていたこの少年は。かなり典型的な金色の髪や紫の目に尖った耳という容姿から、精霊族の一種の妖精だろうと、それだけ周囲は把握していた。

基本的にあまり、外に出たがらない少年は、養父母と妹分、少女とその養父母の関係者以外に関わりを持たず、今回、少年と関わる者が増えた事に妹分は喜んでいたようだが。

「何かなあ……」

その間の少年の様子をいくらか、友達から情報を得たらしく、溜息をつく妹分は、

「私も普通じゃない気はするけど……私よりひよっとしたら、重症じゃないかなあ……」

「??？」

少年を一人この家に置いていくと、育ての両親が判断した理由……それを思い、妹分は今の状況に危機感もあるようだった。「にしても、『花の御所』って実際どんな所なの？ あたしももてなしてもらえないかなー」

「凶々しい奴。漢字の名前持つてるからって」

「アンタに言われたくないわよ」

それでもこの茜色の髪の少女がいるなら、大丈夫だろうと。

養父母が帰るまで、ひとまず始まる事になった三人暮らしに、

「良かったら水華も、みんなに紹介するよ」

本当に嬉しそうな妹分に、少年もようやく安堵したように笑い。

「あなたのせいよ……」

「あいつだけは——絶対に殺す——」

昏く赤い夢達を、意識から追い払っていた。

その、以前から何度となく少年を襲う二つの凄惨な夢が。

少女達がそばにいる時に現れるものと——一人気付きながら。

「あ、もしもし、くーちゃん？ 今伝話大丈夫？」

PHSという、世界を飛び回る伝波とやらを利用するらしい、通信具を片手に、妹分はそうしてよく、友達や養父母と遠くに在っても連絡を取り合っていた。

「ユーオンの事、うちまで送ってくれてありがとー。南の島の事とかいっぱいお土産話あるから、また遊ぼーね♪」

ラピス・シルフアリー。瀕死の少年を拾った養父母が、元々連れていた瑠璃色の髪の養女は、今はそう名乗っている。

昨秋に茜色の髪の少女と旅立ち、『東の大陸』に行った後、年末から何故か『南の島』に滞在し、更に『北の島』も遊びに行ったという妹分は、元は『西の大陸』出身であり。

ただの人間にも関わらず、そうした感じで世界を回る妹分は、少年からは非常に危なっかしく観え。それを守ろうと、必死になり過ぎる少年を逆に養父母が心配し、妹分の旅立ちの際には少年は一人でこの家に残された経緯があった。

「大丈夫だよー。ちよつと嫌な事あったけど、私は元気だよー」

六歳の時に父が死に、母は後を追って自殺したという悲愴な過去を持つ妹分は——常に笑顔を絶やさず、危うげに明るく。

それでもこうしてPHSを手話している時は、一番素直に楽しそうであり……それにもいつも、安堵する少年なのだった。

\*

内装は西洋風、外装はジパング風の民家に若い住人が帰り、まだその日は経たない中……ジパング式の瓦の屋根の上で。

その想定範囲内の異変は、思ったよりも早い到来を見せた。

「こりゃー……聞きしに勝る、魔境っぷりだねエ」

雲一つない澄んだ夜空の、青白い月の下。少年とも青年ともつかない、軽いながら儂げな声色がぼつりと発された。

「こんな禍々しい家、早々ないよ。よく平気だね、『剣の精霊』」

屋根の上から家の内を窺うように、座り込んでいた声の主は。

いち早く闖入者を感じして屋根まで上がってきた、その家に住む者の姿を確認してか、すらりと楽しげに立ち上がった。

「……せっかく、丈夫な結界が張ってある家なのに」

青銀の短い髪と、黒く光る鋭い蒼の目を月明かりに晒す青年は、

「わざわざ自分から——オレの前まで来るなんてね」

その青年から青と鋭さを緩め、代りに無機質さを加えたような銀色の髪の青い目の少年に……憐れむように軽く笑いかける。

この家の現在の住人、金色の髪の少年や妹分、その養父母が、自宅にいる時くらいは安心して過ごせるようにと——

義理の祖母、青い女性の伴侶が施したという結界のある家を  
出て、一人屋根に姿を現した少年は何故か、金色の髪が銀色に、  
紫の目が青へと変わり、普段の穏やかな表情は面影もなく。

目前の、軽装ながら首元の輪など装具の多い、長めの上着を  
羽織る青年に、銀色の髪の少年は無表情に対峙する。

「オレに攫われに来たの？ 『剣の精霊』……『銀色』君」

その、時により髪が銀色に変わる少年が花の御所にいた頃。  
御所に少年を引き受けた公家の友人だったその青年は、少年を  
ある者達の元へ連れて行くと宣言しており。その来訪は少年が  
御所を出た後だろうと、公家からは悩ましげに伝えられた。

「金髪の時と違って、オマエはほとんど喋らないんだね」

「……………」

首を覆う黒の上衣を基本着とするなど、雰囲気は何処か似通う  
青年と少年は、屋根の上で視線をぶつけ合う。

「花の御所で、今のオレの上司を殺そうとしたって聞いたけど」

この少年は、銀色の髪となる時はそうした流血を全く厭わず、  
金色の髪の時より遥かに強いとは青年も聞いていた。

「あんな、ただの偵察者で何も出来ないような弱っちい女——  
容赦なくブチ刺すっていうのは、どうかと思うけど？」

御所にいる者に仇なす相手を上司と呼ぶ青年……命に関わる  
戦いになると知りながら、本来の仲間の公家に背を向けた者が、  
それでも悪びれなく尋ねる姿に、少年はただ押し黙る。

「金髪君はそんな暴走や、弱い者イジメはしないんじゃない？  
それともそれも……『銀色』君の思い通りなのかな？」

銀色の髪の少年は、そうした自身の事は全て覚えており。  
金色の髪の少年は、銀色の髪の時に何を考えたのかを覚えて  
いる事が出来ないが。何があったのか、自身が何をしたのかは  
覚えているという中途半端な状態だった。

青年は、あくまで冷静な『銀色』を感じてか、不敵に笑う。  
「面白いなあ。何でオレが、オマエを攫っていかうとするのか  
……フツ―それくらい尋ねるもんじゃない？」  
「……………」

「残念ながら、ついこないだ鶴ちゃんにやられて修理中だから、  
今日はあの人形……オマエを気に入ったららしい天使ちゃんを、  
連れてこれなかったけどさ」

青年が少年を連れて行く口にした理由。

それは少年が、花の御所に引受けられた理由と似ており――  
天使のような姿の人形達が、まるで生きているように動き回り、  
御所の者を襲った所に、通りすがりの少年は加勢したのだが。  
「オマエが人形を壊した力が、あいつは気になるんだってさ」  
その時から人形使いに目をつけられたと、とっくに事情は、  
この青年に初めて会った時に聞いていた。

それは青年の背後の者の狙いを考えれば、小さな事だったが。

「……俺の事より、アンタに訊きたい事がある」  
「――？」

不思議そうにする青年の前で、少年はようやく重い口を開いた。

「……何で、アンタは……頼也達を裏切った？」  
「……………」

少年には、そちらの方が余程捨て置けない事と言うように。  
少年を御所に引き受け、かばい続けてくれた一人の公家……  
この世界の『宝』である『宝珠』の守り手、『守護者』の名を  
そこで引き合いにだし。同じく『守護者』で、しかし『魔族』  
でもあり、だから裏切る事になった青年を、まっすぐ見貫いた。

なるほどね――と。

青銀の髪の青年は、銀色の髪の少年が、安全な結界の中から  
出てまで、青年の前に現れた理由をそこで悟った。

「それでオレに連れて行かれたとしても、オマエはそんな事を、  
わざわざ訊きにここに来たんだ」  
「……………」

「だから一人で出て来たのかな。少なくとも、ここには一人は  
……オレに対抗出来そうな力の持ち主がいるのにな」

たとえ銀色の髪の少年では、この青年に勝ち目はなくても。  
茜色の髪の少女に助力を頼めば、二人がかりでなら、勝算も  
観える弱味を――強大な力を持つ宝珠を扱う守護者と言えど、  
青年も持っていた。

しかしその選択は最初から、少年の中では全く考慮にはなく。

「オレ側の目的を知って……全部一人で背負うつもり？」

少女達を巻き込む気は無かった少年に——しかし青年は、

「残念だけどき。後一人、標的がいるって、最初に会った時にオレは言ったよね」

「……………」

現状把握に優れ過ぎている少年が、何故一人で青年と対峙しているのか、苦笑いながら明るみに出した。

「オマエは水華を——……オレと戦わせたくないわけ？」

ぎり、と。銀色の髪の少年は顔を歪めて奥歯を噛みしめる。

青年は少年のその勘の良さに、素直な賞賛を贈る。

「よくそこまで気が付いたなあ。オレは全然、オマエが水華やラピちゃんを知り合いだって、夢にも思ってたのにな」

昨年の秋に、『東の大陸』で青年はその少女達と知り合い。

そこで巻き込まれた事変で大きな怪我を負い、その時に現在青年を縛る者に絡め取られた事までは少年は知らなかったが。

その背後の勢力は、この平和な世界にそぐわない流血を好み。

「水華もオレも、あいつらにとって『資格者』らしいんだよ。オレには何が何やらさっぱりだけど」

その少女と、青年を絡め取った側のある誰かに、強い因縁が存在することを——銀色の髪の少年は以前から気が付いていた。

「まあでも、仕方ないっちゃ仕方ないや」

「……………」

「オレと水華と、後一人がいれば——少なくともあいつらは、他の奴には手を出さないうで済むって言うし。それなら犠牲は、最小限に抑えるしかないだろ？」

そして既に、後の一人を害し、残る標的は少女のみとなっていた青年は。そこに不意に加わった、この少年という標的にも、容赦するつもりはないようだった。

それが何より——それ以外の者を巻き込まずに済む道だと。

青年のその意思に、一瞬声を呑み込んだ少年に……しかし、

「——って言うのが、オレの主人格の意図に近いわけだけど」

「……………!？」

今までの話が戯言とばかりに、にこりと青年は魔性の微笑みをそこで浮かべた。

「ホントはね。犠牲になるのは一人で充分なんだよ」

「——」

「それならオレは、自分の事は守ってやりたいわけで。だから悪いけど……水華の事も、連れていかせてもらおうよ」

「……………!」

その魔の者は——決して偽りを述べてはいないと。

そこまで聴いてようやく青年の目的の一端が観えた少年は。

青年がそこに、縛り付けられた因はわからなくても、

「水華にまで手を出すなら——……アンタは俺の敵だ」

最早目前の相手は、確実に敵であると。それがわかっただけで、この少年が常に袴に下げる剣を抜くには、充分な理由だった。

—お主がそのような顔を、する事はないのじゃよ？—

少年の脳裏には、青年の古い仲間である公家の声——少年が花の御所にいた頃に、平穩な御所の一角を血で染めた少年に、温かい眼差しを向け続けてくれた公家が浮かぶ。

「アンタがたとえ……頼也達には、大事な仲間でも」

それは銀色の髪の少年だけではなく。金色の髪の時にすら、少年が公家達に向けたひたむきな思いだった。

—ソイツがもしも敵になったら——……オレが戦うよ—

そつかと青銀の髪の青年は、剣を取った少年の姿を見て笑う。

「オマエは……オレを殺したい？」

—ユーオン殿。ヒトを殺すのは、いけない事じゃよ—

あまりにも当たり前のこと過ぎて。今まで誰もその戒めを、銀色の髪の少年に与えてくれた事はなかった。

—俺は……きつとこれから、ヒトを殺す—

それを希めない己を知る少年は、当たり前の答えを青年に返す。

「アンタが殺すべき相手なら——何をしてでもアンタを殺す」

何の感傷も浮かべず、そうして青年を無機質に見る少年が、ヒト殺しの才能を持ち、多くの命を奪った過去を持つ事を……

誰一人、少年自身すら覚えていなかったとしても。

その定めは変わらないと示すように、ただ断言する。

—お主が何者であっても——今はそういうご時世なのじゃ—

少年が生きるこの場所が、最早——天性の死神だった少年を必要としない事も、とつくに感じていた銀色の髪の少年は。

「それで俺が消えるなら……それが多分、ちようどいいんだろ」  
透明な玉と蝶型のペンダントを、黒い柄に設えた青銀の剣を片手に、自らを守る制限を解放する事を少年は決めていた。

銀色の髪の少年の決意に気が付いた青年は、不自由だらけの目の前の生き物に、再び憐れむような微笑みを向ける。

「いいのかな？　せつかく普段は省エネモードの金髪君で……少ない命をオマエは必死に、やりくりしてるんじゃない？」  
「……………」

「オレはよく知らないけど、頼也兄ちゃんは心配してたよ？」  
自らの切り札である力を纏わせ、その剣を少年が振るう時は、少年は大きく体力を消耗し、その後で長い眠りに落ちる事……それが意味する少年の窮状を偶然聞いた青年は、冷静に尋ねた。

—あんた達の前では……俺は死にたくない—  
いつかその御所の何処かで。短く優しい時間を近くで過ごした、赤い髪の少女にだけ伝えた心を、少年は思い出す。

「下手に動けば……オマエはあっさり、死ぬんじゃないのかな」  
全く同じ注意を、少年はある占い師にも初めから言われていた。

古い師は初見で、記憶喪失の少年の名前を引き出し。また、少年が常に死に近いと——その異常な命の拙さを指摘していた。

「お主は無駄な力を使つてはならん。力がお主の命だと思え」

ある宝の剣と、一つになった誰かである少年の命は。

『力』を蓄え、斬撃と化する事が出来る特性を持った剣が、元々蓄えられる分量の『力』だけが——命の源だった。

「精霊っていうのは、オレも使うからわかるけどさ。自然界の何からも現れる、魂が無い生き物なんだよね、あいつらって」その宝の剣が冠する力と同じ、『水』を司る守護者の青年は、剣を持った躯体の方を指して不思議そうに笑う。

「だから本来は、魂を持つ生き物を宿主にして力を貸すのが、純然たる精霊なわけだけど。妖精はそれを、魂の役割を果たす羽を持つ事で、精霊単体で動ける種族って言うね」

「……………」

広義には命そのものを。狭義には精神——自我を司るものが、魂という一つの『力』だと青年は口にする。

「オマエの場合、魂がその剣で、身体は元妖精の精霊って所か。頼也兄ちゃんからきいてなければ、オレもわからなかったけど」

公家がそれに気が付いたのも、元はと言えば、少年が剣から遠ざけられた時の異変を目にしていたからだだった。

「だからオマエは、剣が近くにないと、無力化するんだってね？ 要は剣だけ奪えば、オマエを連れていく事は凄く簡単なワケだ」

つまり青年は、少年を無傷で連れて行きたいようだった。

「ほんつと。天使属性持った奴の願いは、弱いんだよねオレ」

青年がすつと、首元に着けていた三日月型の金属製の装具を外して手に取ると。淡い光を放ったそれは……次の瞬間、弓のような形の武器となり、青年の手元に現れていた。

「——！」

それは、茜色の髪の少女が持つ腕輪と同じ、普段は携帯用の姿をとるよう造られた高度な武器であり。しかもその製作者も同じと、少年は一目で看破する。

「まあ、力で戦っちゃうと、水華にも気付かれるだろーしね。水華に加勢に入られたら、オレも少しは苦戦しそうだし」

中央に填まる、黒い石に近い取っ手ではなく、刃のつく反りの峰側に設置された取っ手を持った青年は。曲刀を構えるように、剣を持つ少年に向き直った。

「……………」

力で戦えば、それだけ命の消耗が早い少年は………それを知って武器戦を誘う相手の甘さに、知らず青い目を歪める。

そしてそんな、長い武器を持っている二つの人影をよそに。

「……悪いけど。とつくに気が付いてんだけど、アンタらの事」見事に気配を殺した、茜色の髪の少女が場に降り立っていた。

あれま、と。間の抜けた声色で、青銀の髪青年は、現れた顔見知りの少女を意外そうな目で見つめる。

「内界を隠して、外界の事も遮断される結界の中にいるのに。よくオレ達に気が付けたなあ、水華ってば」

「気配がどうかかって問題じゃないし。ソイツが長い事帰って来ないから、何かあったと思って当たり前じゃない」

「気配などの探知によらない、現状把握に優れる少年とは違い、敏感ではあるが、化け物としては一般的な気配探知能力を持つ少女は、一般的でない彼らに呆れたような溜息をついた。

「……………」

銀色の髪の少年は黙って、無表情に少女を見つめ。

少女はその冷たい視線をもともせず、少年に背を向け、青銀の髪青年を睨みつける。

「……………ザイから聞いてるわよ。アンタ、魔王とかいう奴の方に寝返ったんだって？」

少女と少し前から顔見知りの青年が、魔の者としての道に傾き。

旧い知り合いである南の島に居を構える男に刃を向け……………男の旧知の女性を害していたことを。ここ最近、男が住む南の城に滞在していた少女は、全て聞いたわけではなかったのだが。

「クラルさんもクアンも、信じられないって言ってたけど……………アンタには実のお姉さんも同然な相手を、魔王の手の奴らに、差出したんだってね」

まだ十三歳に過ぎない少女が、何処か大人びた顔で。

少女と束の間、南の地で共に時を過ごした者達——青年にも

旧い仲間である、南に住む『守護者』の一人と、その力を継ぐ子を思い出しながら、心から呆れるように口にしていた。

「実のお姉さん？ そりゃ無茶な事言うね、クラル兄ちゃんも」  
対する青年は軽く笑い、楽しげに少女を見返す。

「ま、水華相手には、そう言って説明するしかなかったのかな。ザイ兄ちゃんもクラル兄ちゃんも、レイ姉ちゃんとオレが実際に——という関係か、知ってるわけもないしね」

元は天の民たる守護者と敵対する、魔の海に不定期に現れる『魔王』という存在は——本来は十五年前、目前の青年を含む四人の守護者が各々の宝珠を使い、打倒したはずだったのだが。

「生憎だけどさ？ ザイ兄ちゃん、クラル兄ちゃん達と同じ、四天王と守護者とはいえ……………オレとレイ姉ちゃんは兄ちゃん達みたく和解してないから。そこそこヨロシク」

「よく言うわよ。結局殺さずに引き渡したらしくせに」

『魔王』が直属の配下として使役する、四人の魔の血をひく者——かつての『四天王』とは、守護者に匹敵する力を持った、宝珠を狙う化け物だった。

元々四天王は、この世界の四方にかなり旧くから城を構え、監獄を司り、魔王が現れた時だけその命に従う存在であり。

普段は世界の治安維持に貢献する彼らは、魔王が消え、その呪縛から解放された後は、静かな生活に戻っていたのだが。



しかし先日、そうして大人しくしていた北の四天王たる女を、青年は今の上司——魔王の残党を名乗る勢力に捕らえさせたと、少女が聞いたのはそうした事の顛末だった。今後、この青年が現れるなら……その時は警戒するようにと。

「そりゃ、オレが殺す事もなく、もう死んでたしね。体が無事だからって生きてるとみなすのは、どうかと思うけどな」

「まだ死んでないってザイは言ってたけど？ 医者なんだから、その見立てはアンタより確かでしょ」

少女は実際、その女に面識はなく。女の元同僚——南の四天王だった男が、その時に青年と刃を交わしていた。

「ジョーダン。それこそザイ兄ちゃんの希望的観測だってば。まず間違いなく、レイ姉ちゃんは寿命だったよ」

この先、女が目覚ます見込みが無い事を知っていた青年は、それでも抵抗した南の四天王と本気で交戦し。

花の御所の公家に裏切りを告げる前に、既に南の旧い仲間、背を向けていたのだった。

「その『銀色』君と一緒に。命がなくなれば、体が無事でも死んじゃうんだよ。普通は確かに、早々な事だけどね」

「……………」

一通り、少女の気が済むまで様子を窺っていた少年に、青年は改めて視線を戻すと、少女と少年を両方視界に収める。

「それで——何でアンタは、ここに来たわけ？」

冷静に少女は、少年と青年の間で青年に対峙する。

「コイツが銀ギンになつててことは……どーせロクな事情じゃないんでしょーけど」

またも呆れるように息をついた少女も、普段は弱小で穏やかな金色の髪の少年が、銀色の髪へ変貌する時がある事——

何かで戦う力が必要な時に、血も涙も無い死神となる事を、数少ない顔合わせの中でも目にしてきた。

青年はあつさりど、少女達の前に現れた理由を明かす。

「うん。オレは今度は、水華とユーオン君に来てほしいのさ」

「——は？ あたしとコイツ？」

少女はそこで、心から意外そうに目を丸くした。

「水華もソール君、覚えてるだろ？ あの時の水華みたいに、今やオレも、ソール君の人形状態ってわけ」

「……………」

その青年と少女が、東の大陸で初めて出会った事変に纏わる、ある固有名詞——それはどうやら、少女には黒歴史らしいと、瞬時に苦い目つきをした少女から少年は悟る。

「何、あいつ——……またあたしの事、お姉ちゃん人形にでもしようとしてるわけ？」

少年は全く与り知る事のない、その事変では。

本来、瑠璃色の髪の妹分と旅を始めたはずの少女が、妹分を足手まといとジパング近海に置き去りにしてまで、一人で足を踏み入れた東の大陸で、気ままに立ち寄ったある村で——

天使のような人形が大量に飾られている教会へ、偶然に足を踏み入れた後から、少女の受難は始まっていた。

「近いけど、ちょっと違うかな？ とにかくソール君の意向もあつて、水華とユーオン君を連れてくるよう、可哀相な人形のオレは命令されちゃったのでした」

そうした本当に作り物の人形を、呪われた方法で動かすだけではなく。その人形使いは、生きた者をも人形とし操るのだと、事も無げに青年は口にする。

「どう？ オレと一緒にくる？ 水華」

「誰が。コイツも嫌だからこーなってるんでしょ？」

ひたすら黙り、場を窺う銀色の髪の少年に納得したような目を、頭の回転の速い少女は向けるのだった。

「そー言うと思つたけどね。それならやつぱり、力づくかな？」

「あのねえ。仮にもこの家——あたし達のホームで、アンタが守護者だろーが、二対一で勝てると思つてんの？」

きらりと少女は、両手の腕輪を一瞬で両手の平に引つ掛ける。

「コイツは銀の時は文句なく強いし……ラピの事ほっぽって、アンタと行くはずもないし」

「……そうかな？ 事情を知れば、案外そうでもないかもよ」

少女の手元で、腕輪が一瞬強い光を発した後に、二つの腕輪が細い魔法杖——先端にそれぞれ白と黒の、真円にも近い小さな三日月型の刃を詠えるメイスへと変化していた。

「……………」

両手に一つずつ、クレストと呼ぶ魔法杖を構える、少女のそうした戦闘態勢に、少年も無言で少女の隣で剣を構える。

「確かに水華が魔法で、『銀色』君に剣で来られたら、オレも一人じゃきついけどね」

その二人の少年と少女——あまりに自然に前へ出る少年と、少年の斜め後ろで白三日月の方の杖をブンと掲げる少女に。

戦闘センスが似通っているのか、そうした連携を言葉も無くとれてしまう者達に、何故か青年は、

「お前達つて……何か、息の合った兄弟みたいだね」

妙に微笑まじげな顔で、そんな事を呟いていた。

「でも……………」

そこで青年は。青白い月明かりの中で、確かにニヤリと——

青年が本来属する魔性の牙を、口元に鋭くたたえて微笑み。

「それならオレも、血は全然繋がってないけど……オレと同じ吸血鬼の姉ちゃんに助けに来てもらおーかな？」

次の瞬間には、その暗い瓦の屋根の上に。

守護者たる青銀の髪の吸血鬼に比べ、弱小な吸血姫のため、

少年も少女もその気配を脅威と捉えず——

敵として認めていなかった相手が、唐突に降り立っていた。

「……………え……………？」

「つて、へっ？」

そして少年と少女は同時に、その相手の意外過ぎる驚異に、茫然とした声を漏らす事となる。

「つて——何、あんた……!?!」

完全に一瞬で動揺した少女の前で、無言で佇む吸血姫——

一見十五歳程の、銀色の長いまつすぐな髪と、鋭い切れ長の赤い目の美少女の横で、青年は驚く少女にくくくと笑う。

「何でそいつ——あたしにそっくりなのよ!?!」

「……………!?!」

少女の隣では、少年も愕然とした顔で息と声を呑み。

耳が尖り、髪や目の色は違うものの、少女が言う通り少女とほぼ同じ顔立ちをした吸血姫は。肩を大きく出す短いケープの下から、二枚のコウモリのような羽を大きく広げ。

袖が無くて体にぴったりした、上下の繋がる末広がりの服で、無表情に青年の傍らに佇んでいた。

何故か少年は、そこに降り立った、銀色の髪と赤い目の——

世にも稀な、美しい顔立ちをした吸血姫の姿に。

「……………ウソ、だ——……………」

自身が何故、絶望に似た声色でそう呻いたかもわからず、

「……………何で……………、……………?」

消えゆくような声と目で、剣まで取り落としかけながら呟いた。

そうした少年の変化までは、その吸血鬼は気付く事もなく、

「一応、名前紹介しとく? 元レイ姉ちゃん」

「……………」

黙りこくる傍らの吸血姫に、青年は楽しげに目配せして笑う。

「レイってまさか——アンタ、その女って……………!」

大きく動揺しながらも、青年のその声を聞き逃さなかった鋭い少女は、傍らの少年の動揺に気付かず食ってかかる。

「ザイが言ってた北の四天王……………!?! でも……………!」

その捕われた四天王は、外見は大人の女性だと話を聞いていた少女は、どう見ても少女と大きく変わらない年恰好の吸血姫に、それも驚いているらしい少女に青年は笑う。

「吸血鬼は化けられるんだよ。オレが今この姿であるようにね」  
ぼんぼんと、傍らの吸血姫の頭を撫で叩き、現状が本来の姿である相手に、皮肉気にも見える顔で笑いかけていた。

「さすがに、喋れる程には相性は合っていないみたいだけどさ。  
せつかくこんな上からだ等なからだ命が無いただけなら、放つとくのは勿体無いでしょ?」

「……………は?」

そして青年は、間違う事なき悪魔の微笑みをそこで浮かべた。

「ちよっと前からね……………ザイ兄ちゃんに一目惚れしちゃった、それはそれは純情で、可愛い吸血姫がいたんだけどね」

その冷たい微笑みには、これまでの甘さは欠片も見られず。  
何処か憎悪すらたたえる歪んだ目で、青年は無表情の吸血姫を横目に見ていた。

「ちよほどレイ姉ちゃんが死ぬ直前、そいつもいきなり人間に理不尽に殺されてさ? 不憫だったからね……………ザイ兄ちゃんの大切なヒトだって、そいつが羨ましがってた、レイ姉ちゃんの躰をあげる事にしたのさ」

「……ザイの——大切なヒト？」

少女はぴくりと、そこで眉をひそめる。

「ね、ミカラン。同じ使うなら、ザイ兄ちゃんに近付きやすい、レイ姉ちゃんの躰で良かったよね？」

「……………」

虚ろながらも、まっすぐな赤い目で青年を見つめる吸血姫は、まるで自身の体を抱くように両腕を絡ませ、心許なげに青年の傍らで立ち続けていたのだった。

そんな、自身と同じ顔をした吸血姫の様子に、少女は心から不快といった風に顔を歪ませていた。

「外道ね。相性も縁もない体に、他人の魂をくつつけるなんて」

「おー。さすが魔法使い、それくらいの知識はあるわけだ」

「同じ吸血鬼だから、何とか符号してるんだろーけど。そいつ、吸血鬼より全然弱い魔物になってるじゃないの？ その程度でアンタの加勢になるわけじゃないでしょーが」

喋る事も表情を変える事も出来ない相手は、たとえその躯体が北の四天王でも、その力を生かせない弱小魔物だと——

少女はあっさりと、その脅威を否定し。手に掲げた魔法杖に力を込めて、今まさに戦闘開始の狼煙を上げんとしたのだが。

「…………——ダメだ、ミズカ」

そこで、少女も青年も思っても見ない、少女への邪魔立てが……よりによって隣の少年から入る事態となっていた。

「——へ？ ……ってアンタ？」

そこには、いつの間にか金色の髪に戻っていた少年が、視線は吸血姫に固定して少女を遮るように片腕をあげていた。

「何で元に戻ってるのよ！？ 状況わかってんの！？」  
目の前の吸血姫より更に弱小な、青年曰く省エネモードである金色の髪の少年に、容赦なく少女は罵声を浴びせる。

「オレもわからないけど——……とにかくダメだ。ミズカは、あの女とは戦わない方がいい」

自らよりも鋭い現状把握の直観を持つ『銀色』が、何に気付き、何を考えたのか。それは覚えていられない金色の髪の少年は、ただ戸惑うようにそれだけ口にした。

「言われなくても、あたしはあのバカ相手するしかないし！」  
ブンと、魔法杖の先端を青銀の髪の吸血鬼に向け、少女は顔に緊迫感を漂わせる。

「アンタは責任持つて、あの女の相手すんのよ！」  
「——」

己が対峙すべきは青年とすぐに切り替えた、俊敏な少女の横で……何故か少年は未だに戸惑いに捕われており、

「……オレが——あの女を……？」

最初に青年が現れた時にも、覆面ですぐ近くにいた吸血姫に、その時には何も感じなかったはずが——

「あいつをオレが……殺す、べきなのか——…………」

銀色の髪で赤い目の、少女とほぼ同じ素顔を目にしただけで。何故こんなに強い吐き気がするのかわからず、戸惑い続ける。

にわかになんか変わっていた状況に、青年は不思議そうに冷たい目付きで、両腕を組んで佇んでいた。

「変だな。水華が動揺してくれるとは思ったけど——」

少女とその吸血姫の顔が酷似する理由を知る青年は、しかし明らかに少女以上に動揺した少年に怪訝な目を向ける。

「有り得ない程、隙だらけになっちゃったな。アイツだけなら今日でも十分連れていけるけど……」

元々この戦力不足の訪問は、様子見程度のつもりだった青年は、どうしたものかと思案を巡らせる。

「こつちにもしも思い入れされると——ちよこつと困るな」

青年の出方を窺いつつ、魔法を使う集中力は維持して動かない少女の前に——ふうと軽く溜息をついた、その時だった。

場に突然、間延びした鳥の鳴き声のような妙な音が響き。

「——！」

「つて——げっ、ラピの奴!？」

少年と少女が揃って驚きの顔を浮かべる屋根の下。その場所は境界の内である縁側に現れた、瑠璃色の髪の少女は——

常に首に下げる、猫の頭に似た形の奇怪な笛を、青白い月を無言で見上げながら、丁寧にその音を奏でており。

「やめてよ、あんたがそれ使うといつもロクな事ない——」

その笛の力——妹分の家に伝わる『奇跡』に、少女は青ざめた。

あらら……と。次の瞬間、場に起きていた異変に、青年は目を丸くした。

「こりゃー……マズイかな？」

「——！」

突如として現れた青く巨大な人影が、青年と吸血姫を両方、むんずと掴み。その姿に少女が、完全に安心して怯えるようにならずと後ずさった。

「おっ……おフクロー!?!？」

隣で呆気にとられる少年からも、それはどう見ても養父母の里帰り先にいた、青い女性の巨大版に見えた。

「ナシ、それナシ、それでなくてもバケモンなのに巨大化とか反則——！ つて本人じゃないけど、それでもその姿は反則——！」

「ホントだねー。これじゃオレ達、戦えないねえ」

どんな抵抗も通じない、巨大な人影に掴まれ身動きがとれず、どうやらこのまま遠くに連れていかれると悟った青年は。

『見えて触れる幻』……それだけの奇跡を呼ぶ力も、意外に使い勝手良さそうだね?」

瑠璃色の髪の少女と出会って間もなく、その不思議な実態を知った奇跡の笛の力を思いながら、縁側から月を見上げている瑠璃色の髪の少女を、人影の手の中から見下ろして笑った。

「ラピちゃんには負けたなあ。それじゃ——」

そして青年は、少年と少女にひらひらと楽しげに手を振ると、  
「また来るね、水華、ユーン君。次は戦力総動員で来るから、

覚悟しててよ?」

「——!!」

巨人に連れ去られるという情けない姿でありながら、あくまで不敵な顔でそう言い残し。最後まで黙りこくった吸血姫と共に、青年は姿を消していたのだった。

巨大版の青い女性が、どうやら帰ってくる事はなさそうだと状況を悟ったのか。常に恐れる相手の出現に焦っていた少女は、安堵したように大きく息をついていた。

「ったく……心臓に悪いってーのよ」

「水華ー、ユーオンー。大丈夫ー?」

地上から少年と少女がいる屋根の方へ、緊張感の欠片もない声がかかり。二つの魔法杖を携帯型の腕輪の形に戻した少女は、まだ茫然とした少年の首根っこを掴み、共に庭に降り立った。庭に面した縁側では、瑠璃色の髪の毛が首を傾げていた。「二人共ずっと屋根の上で、どうしたの? 何でアラス君が、うちに来てたの?」

「バカ。ザイが言ってたでしょ、アイツは今は敵だって」

「そうだけど……水華やユーオンにどうして、アラス君が何の関係があるの?」

昨年の秋に、青年と知り合ったばかりの妹分は心底不可解と、自身の身内に関わる青年——実際ほとんどその正体を知らない相手を思い浮かべ、目を丸くするのだった。

「……ラピスは知らなくていいよ。でも、助けてくれてサンキュ」

少年はそんな少女に、困ったように笑いながら礼を言う。

しかし少年のそんな態度は、少女は気に食わなかったらしく。

「アンタねえ。戦う気あるのか無いのか、ハッキリしなさいよ」

「……………」

「あのバカの目的はわかんないけど、あたし達がここにいれば、どの道ラピも巻き込まれるわよ。なら話しといた方がいいでしょ」

「……………」

少女の言い分が全くもって正しいとわかる金色の髪の毛の少年は、しかしそれでも、困ったような顔付きのまま何故か俯き……。

「——うん。よくわからないけど、作戦会議しよ♪」

対照的にニコニコと、妹分はがしっと少年と少女の腕を掴んだ。

「心配しなくても、私はポピがいれば大丈夫だよ、ユーオン」妹分の足下では、妹分に常に連れ添った、猫の頭だけのようない奇妙な生き物も少年を見上げ。顔から直接生える、小さな黒い手足と長い尻尾を器用に使い、少年の肩までよじ登って来た。その奇妙な生き物こそ、弱小な妹分を守る奇跡の本体であり。

「……………」

それでも少年は、少年と少女が出会った敵の事を——

その妹分には話さない方がいいという、内心を占める理由のわからない思いに。何も言えないままで、妹分に引っ張られて、家の内へと戻るしかなかったのだった。

\*

「おう、きの……ほうじゅ……？」

ぼかん——と。

金色の髪の少年は目を丸くしながら。茜色の髪の少女の方を見つめ、少しだけ考え込んだ後に改めて尋ねた。

「……大きな宝珠？」

「違——う！ 『黄輝の宝珠』よ、あたしが狙ってるのは！」

普段の服装に袖の無い長いケープを羽織り、旅立ちスタイルの少女は。同じく旅立ちルックの、片耳に翻訳機と、シンプルな薄手の肩を出すケープを着けた少年に、呆れ顔でそう返した。

「水華ってば本当、この間からそればかりだよ」

彼らと同じ道中を、ジパングは京都のある場所に向かいながら、奇妙な生き物を肩に付き添う妹分が笑う。

「確かクアン君が次の、『赤火の宝珠』の守護者なんだっけ？」

だから水華も守護者になるだなんて、無茶だよ」

南の地にいた、守護者の家系の同年代の少年と関わった少女は、最近になってそんな事を言い出し、強い力の持ち主だったその優しげな美少年と張り合うかのようにらしい。

「だってどーせ、その宝珠の守護者はずっと空席なんですよ？」

それならソレを手に入れちゃえば、この先誰が襲ってこよーが、あたふたしないで済むってもんでしょ」

「それはまあ、そうだけど。おとーさん達が帰らない限りは、アラス君がまた来て、おば様達の所に避難も出来ないしねえ」

守護者の一人である、その敵対者への対策を話し合った結果、

三人の少年少女は現在この竹林を歩いているのだった。

その竹林は、最初に少年が天使のような人形達に出くわした場所でもあり。そのためか警戒心に満ちた顔で、少年は改めて、その道を行く少女の目的を確認する。

「水華が『地』に行きたいのは、その宝珠を手に入れるためか？」

「そーよ。今は『地』にあるはずだって、ザイも言ってたし」

南の島にいる時に、ふと手にした本から宝珠の存在を知り、ついでに四天王やら魔王やらの古い情報まで、少女は滞在先の城の主から聞き出していた。

「その宝珠があれば、火や水とか単属性だけじゃなくて、大体どんな力も使える、万能にして最強の宝珠らしいのよ」

天空にあるという聖なるその島——『地』に行けば、魔王の残党に狙われた彼らの問題への対抗策があると。

青銀の吸血鬼の来訪があつた後の作戦会議で、そうした事を口にしたものの、『地』に行く方法はさっぱりわからないと、悩ましがだった少女に——少年は躊躇いがちに、

「……多分、『地』に行く方法がわかる奴、オレは知ってる」

それまで口にしなかった事を、青銀の吸血鬼に対抗するため、静かに爆弾発言をした少年だった。

——わしは遠い昔、『地』の無力な住人だったのじゃ——

そしてその占い師を訪ねるべく、京都より少し南に位置する安全な自宅を、少年達は後にしたのだが。

「それにしても、そんな奴知ってるなら何でアンタ、あたしにすぐ教えなかったわけ？」

「……………」

その家に少女が留まっていたのは、世界の様々な場所を旅し、『地』の事も知っていたような義理の兄弟——少年と妹分からは養父母を待ったためであり。しかし『地』について既に知る者がいるなら、いつとも知れない帰りを待つ必要は無かったはずと、敏い少女は不服気だった。

「でも私も、梅おばあちゃんがまさか天に住んでたヒトなんて、信じられないなあ。ユーオンは何処でそんな事聞いたの？」

「……直接聞いた。詳しくは知らないけど」

「ええーっ。ああ見えても梅おばあちゃん、凄く秘密主義で、素性不明なの？ おとーさん達も多分知らない事だよ？」

そーなんだ、と。不思議そうな妹分に、少年はそれだけ呟いた。

それはおそらく——彼女と似た境遇である少年にだからこそ。

——とところでお主は、一見は、明らかに妖精の類じゃが——

何かの願いのために、自らの連続性を繋いできた占い師が、——最早、精霊族であるが妖精ではあるまい——

在り方が似た、呪われた生を受けた少年に伝えた真実であり。

その占い師とは、養父母と、その里帰り先にいる青い女性は元から知り合いだと言うが。青い女性は奇しくもいくつか——占い師と同じ台詞を少年に言った事があった。

「君は……妖精なのかな？ 本当に」

「……………」

義理の祖母たる青い女性は、拾われたばかりで自らの記憶もなく、何処にいても異端者とばかり所在なげな少年に。

それでも確かに、少年は女性達の家族に加わって良い者だと何故か保証してくれたのだが。

「ラピスちゃんの時にも、驚いたけどね……あのコがまさか、君みたいなのを拾ってくるなんてね」

茜色の髪の少女には日頃から厳しく、恐れられている女性は、降ってわいた義理の孫の少年には何処か甘い所があり。

元々、少年を拾った養母——義理の祖父母からは末の娘にはその両親は甘いようで、末娘が引き取った瑠璃色の髪の養女も、そのためか明らかに可愛がられている。

けれども青い女性は——瑠璃色の髪を見る目とも、また違った遠い目で。物悲しげに少年を見て、珍しく笑っていた。

「……誰かさんに、本当そっくり」

——とところでお主は……その姿形は、偶然ではあるまいよ——

少年のある事実を指摘するような台詞は、女性だけでなく、占い師からも初対面で言われていた少年だった。



「それにしてもなあ……おとーさんにそっくりなユーオンだけじゃなくて……水華にそっくりな吸血姫さんまで現れるなんて、世も末だよな？」

「末って何よ、末って」

「だって、実の親子でもないのに、そんなに似たヒトばっかり普通いるの？ 私の周り、そっくりさん存在率高過ぎるよー」

少女にそっくりな吸血姫が現れたと、作戦会議の時に聞いた瑠璃色の髪の妹分が、つくづく感心したように言う通り、

「梅お婆あちゃん、ユーオンはおとーさんの本当の子供って言うくらい、とにかくそっくりだもんねえ」

「違うって。有り得ないって、似てないって」

何故か少年は、瀕死の少年を見つけて保護した養父と、種族は全く違うが顔立ちが生き写しだった。

「ユーオン。無理しないで、おとーさんに自分を認知しろって迫っていいんだよ？」

「だから違うって……」

「アハハ。いつもムキになるのが尚更怪しいよー、ユーオン」  
更には古い師がダメ押しの一語を付けたため、妹分にすっかり隠し子扱いされ、こうしてからかわれる少年だった。

ひよつとしてと、妹分は更に少女の事も巻き込みに入る。

「水華のそっくりさんも、水華のおかーさんとかおねーちゃんだったりして？」

「有り得ないし。吸血鬼に知り合いなんでないし、あたし」

「わかんないよ？ だってそのヒト、ザイさんと同じ、元々は四天王さんだって言うじゃない。ザイさんみたいに人間の血も流れてるのかもしれないよ？」

「尚更論外だし。あたしは聖と魔の混血だって、おフクロ達は言ってた気がするし」

人間の血はほとんど流れていないと、淡々と否定する少女は、二つの魔法杖を渡された理由をそう伝えられていた。

「生粋の天のヒトのクラルさんからも、あたしの羽は、自分とほぼ同じだって言われたしね」

「あー。たまに出る水華の変な、光で出来たみたいなのアレ？」  
「変とかアレとか言うなっつーの。ま、どう考えても吸血鬼の羽は無いから、吸血鬼の身内なんてお呼びじゃないのよ」

本来は自身の真の両親——ルーツを探し、旅に出ていたはずの少女は。南の地で、宝珠や守護者という存在を知ってからは、興味はほとんどそちらに移っていた。

「万能の宝珠なんて、聖魔併せ持った万能のあたしに、まさにぴったりじゃない」

その背に刻まれた光が持った、聖なる力を扱う白い杖と。躯体本来の魔の力を受ける、黒い杖が必要である少女は——

「……オレは……気は進まないけど」

分けられなければいけなかった事情……併存出来る理由を。この道の先で少女が突付けられると、少年は知らなくとも。

その歪な誰かの事を、よく当たり過ぎる妖しい占い師の元に連れていくのを躊躇ったのは——決して少年だけではなかった。

「大丈夫かな。水華、この間までちよっとおかしかったから」

「——へ？」

家を出る直前に、瑠璃色の髪の毛の妹分は、ふと思い出したように茜色の髪の毛の少女の後ろ姿を見て呟いていた。

「私と水華、ここに帰る前に南にいた時——一カ月だけ学校に通わせてもらったんだけど」

南にいる守護者の三人の子供が通う学び舎へ、体験入学として二人の少女は混ぜてもらったという事だが、

「そこでの水華の通り名、何だと思う？ 竜牙水華——それは淑やかな微笑みの美少女……『紅の天使』だよ？」

「それは確かにおかしいな、有り得ないな」

でしょ？ と少年を見る妹分は、しかしいつもの軽さに何処か蔭りがあり、実際にその通り名がしっくり来てしまう変貌を、しばらくの間遂げていた少女の姿を見ていた。

「今はすっかり元通りだけど……その代りに、宝珠寶珠って、そればかり言うようになっちゃったし。守護者とかそういう危なそうな事、あんまり関わってほしくないんだけどなあ」

「そーだな。別にこないだの事がなくても、どの道そっち方面、自分から関わってたっばいしな」

うんうんと頷き合う、基本的に弱小な養子の兄妹だった。

「ユーオンには『銀色』さんがいるからいいけど、私は本当、さすがについていけないなりそうだなあ」

「そうか？ オレも大概、ついていけないよ」

妹分も奇跡の笛を持っているが、それが使えるのは月夜の下、子供の間だけという事であり。結局弱い人間に過ぎない妹分は、常に何処か——自身が異端と、養父母や友人達のような優しい千族に囲まれていても、差異を感じているようだった。

「もうそろそろ、おとーさん達も家を出て半年過ぎそうなのに。帰ってこれないってことは、『ディアルス』に本拠を移す日も近いかもしれないね」

「……いつかはそうなるかもって、そういえば言ってたな」

『西の大陸』にある大国で、身元不明の化け物でありながら戸籍をもらっていた養父母は、その国の王族と知り合いであり。王族の依頼で様々な地に出向く中、七年前にこの瑠璃色の髪の毛の少女——六歳で両親を失い、二年近く養家を転々としてきた、西の大陸出身の孤児と出会い、養女としていた。

「私はジパングが好きだし——くーちゃん達もいるからここにいたいけど。水華は南が気に入ったみたいだし、結局みんな、いつかは私が届かない所へ行っちゃいそーだよな？」

いつも笑顔絶やさない妹分は、家の戸締りをしながら、そうした事を言う時も必ず、穏やかにニコニコしており、

「そうかな。オレは多分——ずっとここにいますよ」

その危うげな明るさを持った相手に、少年はただそれだけ……祈るように細やかな笑顔で、当たり前前の約束を口にしていった。

少年が茜色の髪の少女に、占い師の存在を教えなかったのは、  
—オレの仕事は、ラピスのいるこの家の番人だろ—

この妹分が何より、友達がいる土地での、養父母の帰りを待つ  
三人での生活を喜んでいる事——それが大きかった。

近道のための竹林を、先々と進む茜色の髪の少女の後方で、  
少年と妹分はしみじみとした会話を再開する。

「ユーオンもジパング気に入った？　と言っても、ここ以外は  
まだそんなに知らないと思うけど」

昨春に養父母に拾われ、それ以前の記憶を失っている少年は、  
養父母について短い旅をした時以外はずっとジパングにおり。

「ジパングっていいヒト多いでしょ？　　鴨ちゃん達なんて特に  
そうだしね」

「そうなのかな。何となくこの時間、他の大陸よりゆっくり  
流れてる気はするけど」

「そうだよー。だってユーオン、強くならなきゃってずーっと  
一杯一杯だったのに、今は何かそれ程でもなくなってる感じ。

絶対それ、鴨ちゃん達のおかげだよー」

しかし首を傾げる少年には、その自覚は少ないようであり、  
「ラピスがジパングにいるなら、オレもジパングにいるよ」

「ええー。じゃあ私が西に帰るって言ったなら、ついてくるの？」  
「ラピスが嫌でなければ。いないよりはマシな護衛だと思っし」

この妹分を可能な限り守る事。それを今も硬く定め、他要因に  
関わらない、自らの居場所としていた少年だった。

「でもそれ、鴨ちゃんとか残念がると思うよ？」

「——？　何で？」

少年が花の御所にいた頃の事を、妹分は赤い髪の少女から主に  
聞いていたようだったが、

「ツグミは強いし、周りにも強い奴らがいっぱいだし。オレが  
いると返って面倒かけるだろ」

「ええー。ユーオンそれ、本気で言ってるの？」

いつも笑顔の妹分は、何故かこうした時は、露骨に不服な顔も  
少年にはよく見せていた。

「ユーオンは御所での生活、楽しくなかったの？　　っていうか  
楽しかったでしょ？」

「……あんまりそういうの、考えたことないけど」  
コラコラと。妹分は瞬時に、日頃の一番明るい笑顔を見せる。

「それが一番大事なことだってば？　　私や鴨ちゃんがどうとか  
じゃなくって、ユーオン自身が何処にいたいのか、何をしたいか

——ヒトの責任にしないで、自分でちゃんと考えなきゃ」  
「……ぐう。今何か凄く、痛い事を言われた気がする」

ここまではつきりと突付けられると、普段からそうした所が  
曖昧な少年も形を得るしかなく。そういう意味でこの常に事の  
核心を探す妹分は、少年には毒薬一歩手前の良薬とも言えた。

「それならオレは……ラピスのそばが、いいんだと思うけど」  
「うーん……わかってたけど、わかんないな。何でユーオン、

いつもそんなに私のこと心配してくれてるの？」  
そこまではさすがに、さあ？　と少年も答えるしかなかった。

道中は至つて平和で、そうしたお喋りに一通り花が咲き。

京都の町の場末にある、木の骨格を布で覆うテント仕立ての占い小屋へ彼らが着いた時は、ちょうど昼食時だった。

「さつさと話聞いて、何かジパング名物でも食べて帰ろー」

ふんふん♪ と鼻歌混じりに小屋に近付く少女に、

「脅迫とかしちやダメだよー、水華。すぐに全部教えてくれるなんて限らないだからね〜」

少女の行動パターンを知っている妹分も、さらりと不穏な事を口にしながらそれに続く。

「……………」

ここまで来ても気の進まない、往生際の悪い少年は。しかしその理由もわからず、流れを見守るように立ち止まっていた。

たのもー！ と、思い切りの良い少女が、両手で占い小屋の入り口の布を掴んで勢い良く開けた次の瞬間には。

「……………へ？」

礼儀や常識を全く重視しない気ままな少女が——しかし一瞬で茫然とした程に。その先には奇妙な光景が待ち受けていた。

「…………お待ちしておりました……………我が君よ」

小屋の中では、全身ケープの老婆が何故か入り口の前で跪き。

「……………は？」

「——あれ？ 梅……………おばあちゃん？」

呆気にとられる少女の背後で、妹分もポカンとしながら、地にひれ伏す小屋の主の名を呼びかける。

跪く老婆は、あくまで俯いたまま畏まっており、

「長い時でした……………この身を妖に墮としてまで、ただ貴女様のお帰りを待ち続けておりました」

「…………ちよつと。あんた、誰よ？」

ようやく少女が、日頃の頭の回転の速さも空しく、占い小屋に来た事も忘れて何とかそれだけ尋ねたところで。

老婆はすつと立ち上がると、ケープから頭を出し、肩までの白髪とくすんだ細い赤い目を露わにした。

「フラウア・プフラオメ……………私が『地』にて、貴女様のお傍にあつた頃の名です」

「——へ？」

「その名と記憶は失わぬよう、今は異所に封じているのですが。

私には、貴女様に伝えなければいけない事があるはずなのです」

物憂げな厳しい顔付きで少女を見つめる老婆には、これまで

少年や妹分が知った、気のいい意地悪婆さんといった占い師の面影は少なく。忠実な侍従という雰囲気のままさにぴったりの、凛とした背筋の正しさだった。

そして老婆は、茫然としか出来ない少女達へと、彼女が願

待ち続けた古い物語をそこで話し出す——

\*

一番最初の作戦会議で。その少年と少女を狙う生きた敵は、少なくとも五人はいると、狙われた側は把握していた。

「今日来た黒のバカ守護者と、あの外道な吸血姫と。アンタが言うには、花の御所にも仲間が一人潜り込んでたんだって？」

「ああ。全然戦闘能力は無さそうだけど、ヨリヤ達の中にも、仲間に来る奴がいなか多分探してたみたいだ」

金色の髪の少年が把握する敵は、その三人だが。茜色の髪の少女は更に、少女が既に出会っていた敵をそこに加える。

「あたしが見たのは、個々の強さはまちまちだけど、とにかく動く天使人形が大量なのよ。それを操ってるのはただの小さな子供なんだけど、そいつの守り役みたいな神父が一人、そばにっているのよね」

「へえー。東の大陸……私がやっと水華を見つける前、そんな荒事があったんだあ」

少女がその事変に巻き込まれた時、瑠璃色の髪の妹分は少女にジパング近海に置き去りにされた後であり。その後、執念の一人旅で少女を見つけたというが、結果的には最も危険だった事変に、そのおかげで巻き込まれずに済んでいた。

「じゃあ、兵士としての人形は無数で、無力な幹部は操り手の子供と、御所の偵察者の女と二人。戦える幹部はあの守護者と、その神父の二人って事正しいのか？」

「あくまで少なくとも、ね。後、あたしにすれば虫けらだけど、アンタには充分脅威の吸血姫を忘れてるわよ」

「……………」  
声を呑む少年に、少女は冷静な視線を向ける。

「銀なら勝てるだろうけど、アイツもあまり動けないでしょ？ あたし一人で止められる範囲は、神父と人形使いを何とかして、人形達もそれで無力化出来るかどうかってとこ」

「そっかあ。それだと後は、御所にいたっていう女のヒトと、アラス君と、水華のそっくりさんがまだ残っちゃうね」

「…………ミズカ。それは…………」

そうなると残った敵の相手は誰が出来るのか——その吸血姫が現れた後、何故か早々に退場した『銀色』に期待出来ることは少ないだろうと、少女はあっさり見切っていた。

「無理よ。あのバカ、仮にも守護者だから。宝珠を使われたらあたし達にはそもそも勝ち目ないし」

「……………」

「魔王の残党相手とか、あまり迂闊に他人も巻き込めないし。レイアス達が帰るまで、ここで籠城が最善でしょ。それも結局、実家に連れて帰られるだけだと思うけど……。どうしても外に出ないといけない時は、出会えば逃げる！ それしかないわよ」

結局の所、作戦会議の結論はそうした感じであり。この強い結界のある家内で息を潜めるか、もしくは何か——大きな力を手に入れるしかない、『地』へ行きかけた少女だった。

「——結局、どうしようねえ？」

「……………」

先日引き続き、作戦会議だと三人の少年少女は台所に集まり。瑠璃色の髪の妹分が用意した飲み物と軽食を前に、妹分以外の二人共が難しい顔で黙り込んでいた。

「私達、梅おばあちゃんを本当に信じていいのかな。『地』に行ける場所、行く方法を教えてくれるって言うけど……………何だか変な事になってきちゃったよね」

「……………」

いつも笑顔の妹分は、しかし今夜は苦笑いの多い様子で、

「まさか……………水華が『黄輝の宝珠』の守護者になるはずだったヒトの生まれ変わりなんて、言われるとは思わなかったよね」  
昼間に起きた突飛な出来事を、黙り込む者の代りに、さらりと口にするのだった。

「ユーオンはどう思う？ 梅おばあちゃん、変だと思わない？」

「……………いや。多分何も、嘘はついてなかったと思う」

「私は正直、よくわからないよ。生まれ変わりとかそんなの、ユーオン達には普通にある事なの？ 誰が誰の生まれ変わり、そんなのって簡単にわかる事なの？」

淡々と妹分は、あくまで軽い調子で、人間一般としての感覚で不思議そうに話を続ける。

「水華自身はどう？ もし本当の事なら、願ってもない話かもしれないけど……………」

「……………」

その占い師に会ってからは、こうしてほとんど黙った状態の少女は。問いかけてきた方ではなく、何故か少年の方を向いて、面白くなさそうな顔でようやく口を開いていた。

「……………アンタはどうなの？ ユーオン」

「——へ？」

「アンタとレイアスが——親子だろうって。それも前世のことなんだって、あの占い師、言ってたじゃない？」

「……………」

少年と養父の、その姿形の類似は偶然ではないと——

少年は間違いなく、養父にとって子供に当たる存在であると、占い師が初対面に断言した事を。今日の日中に改めて、それは遠い先の世の縁であると、占い師は言葉を加えたのだった。

「……………オレはそんなの——……………何の意味も、ないと思ってる」

……………その繋がりは、とっくに少年は。

養父に拾われたその時から、隠し子という根の無い縁でなく——もっと重い何処かでの、確かな繋がりに気が付いていた。  
「……………ユーオン？」

少しだけ、憂いの表情で少年を見る妹分の深い青の目には、机に置いた腕を重ねて目を伏せる——誰も知らない誰かが映る。

「生まれ変わりがあってもなくても。ヒトは死んだら、みんないなくなるだろ」

「……？」

「たとえ誰かの生まれ変わりでも……もうそいつは、その前の誰かじゃないんだから」

淡々と、誰の目も見ず、俯いたままで無表情に少年は続ける。

「誰かには大切だった事も、思い出も未練も。次のそいつには関係ないし……そいつがそれを思い出すなら、今度はそいつが消えるだけだろ」

「……なるほどね。ま——それが妥当だわ」

だからこそ——茜色の髪 of 少女を待っていたという占い師は、その少女を待ちたいと願う自らを変えずに維持するために、転生を拒否し、妖となる道を選んだのだろうと。

「あたしはあたしの意志で宝珠がほしいし。前世がどうか、今のあたしが知らない事の責任まではとれないし」

「……」

冷静に頷いている少女に、少年はしかし——何処か澱みのある紫の目を、躊躇いがちに向ける。

「まあでも、ラピの言う通り、都合がいいのも確かだけどね？」

「……ミズカ」

「どーせ宝珠を狙うなら、そこに縁があるなら使うだけだし。あの占い師が案内するって言うなら、あたしは乗っかるわ」

「……」

知らず、少年と妹分は黙って顔を見合わせ、どちらの顔にも同じような微かな困惑が浮かんだ状態だった。

「それじゃあ水華……梅おばあちゃんと一緒に伊勢に行くの？」  
「そこに行かないと、『地』に行く方法わからないんじゃない？ あいつが封じた記憶の媒介があるって言うし、多少は遠いけど、行ってみるしかないかな」

ジパングに存在する聖地である伊勢という山間地に、明朝から少女は出向くと言う事であり、

「……畏つて事はないよね？」

「あのね。そもそもあんた、てかおフクロ達の知り合いでしょ？」  
「でも——途中で襲われたらどうするんだ？」

安全な結界の家から遠く離れる。その危険性が少年も妹分も大きく顔を曇らせる理由だった。

「逃げるしかないでしょ。最初からそれは変わらないし」

「……」

そこでもう一度、少年と妹分はびつたりのタイミングで顔を見合わせ——互いに思わず、困ったように笑っていた。

それというのも。

「そっかあ。それなら私もついてっちゃおうかな」

「——は？」

「ミズカ一人じゃ、何となく危なっかしいな」

はい！？ と少女が焦るのを承知で、同じ結論に至った少年と妹分だった。

「あんたらねえ、足手まといってわかってんの!？」

「だつて梅おばあちゃんもいるんだよ? どの道そんな無茶な道の行き方しちゃダメだよ、水華」

「いざとなつたら、梅を見捨てて逃げそうだよな。梅は梅で、それで本望とか言いかねないしさ」

ぐ——と。少年の指摘が全く凶星の少女は言葉に詰まる。

「……それが危険でも、ラピスはミズカと一緒にの方がいいだろ」

だからこれまで、道中を共にしてきたのだろうと。あははと否定しない妹分に、少年は困つたように笑う。

「それに何か……ミズカを一人で放つてたらいけない気がする」  
弱小な自身が、足手まといになる可能性を十分わかりながらも。

占い師の事を教えた時から、少年は——しばらく少女から目を離してはいけない、その思いも、理由のわからないまま確固として存在していた。

「つたく——好きにきなさいよ。でも言つとくけど、あたしはあんたらの事も、何かあれば容赦なく見捨てるわよ」

既に妹分をジパング近海に置き去りにした前科のある少女は、悪びれもなく言うのだった。

「ああ。そうでないとオレも困るし」

そして何故か、そんな少女こそ頼もしそうに、少年は穏やかに笑いかけて。

誰に対しても、負担になる事を極度に恐れる少年が唯一——  
何故か背中を預けられるのが、茜色の髪の少女だった。

そうして明朝から、しばらく家を空ける事が決まった夜に。

京都より少し南の草原の端に位置する、人家は少ない人里の一角の民家、青銀の髪の吸血鬼が「禍々しい」と先日評したその瓦の屋根の下で。

—助けて……水華——……—

既に慣れ切ってしまった、昏く赤い夢とはまた違った——

有り得なかつた世界の夢が、銀色の髪の少年を襲う。

少年を襲う夢は、少年以外のものがほとんどだったが。

—なんて……かつてなヤツ……—

青白い剣の夢……じわじわと少年に忍び寄る旧い誓いだけは少年自身のもので、それともその有り得ない夢は大きく違い。

昏く赤い夢とはまさに対極を成した、それなのに結局誰かを追い詰める——大切な誰かの存在しない、有り得ない夢だった。

「……………」

いつも通りの吐き気とは違う、誰かの強い痛みが少年を襲う。  
—よく平気だね、『剣の精霊』—

少年程ではなくても、同じ方向性の勘の良さを持った者には、無意識にそれが伝わっていたのかもしれない。



それは有り得なかった世界というより――

有り得てほしかった世界の幻なのだと、少年は知っていた。

その世界は、瑠璃色の髪の少女……の両親が失われていない、大切なものを失った誰もが、きつと願ってしまう夢で。

それを妹分の奇跡の笛が、具現化してしまった幻であると。

――あのな、シー。オレのことは……忘れていいから――

シルファ・セイザー……現在はラピス・シルファリーという

妹分の本名を、そんな風に呼ぶ銀色の髪で赤い目の謎の少年が、その世界では茜色の髪の少女の代りに妹分の傍にいたのだが。

しかし赤い目の少年は、唐突にその生を終わらせる事になる。

――何か……言い残すことはある？――

それは青い目の少年が願い、探し求め――有り得てほしいと思ってしまった誰かが、その世界に存在するからだだった。

「何でキラを……が、殺すの？」

まだその名前を思い出せない少年は、妹分の拙い幸せの夢を、そこで終わらせてしまった残酷な処刑人を――

結局何処にも、平穏な幸せの世界――行き場などなかったと、妹分を心から追い詰めた誰かを……しかし思い出せないようにされた事に気付かないまま、夢を観続ける。

有り得なかった世界の夢では、必ず最後にいつも――

銀色の髪で赤い目の少年が、同じ言葉を残していく。

――シーのこと、よろしく頼んだぜ――

その少年は何故か、銀色の髪で青い目の少年がよく知った姿……少年に命がけの呪いを施し、名を譲ってくれた遠い誰かで。

昼間の占い師の言葉を借りるなら……――  
きつと、生まれ変わりとでも呼ぶべき存在だった。

「そんなの……何の意味も、ない……――」

こんな夢を観るのは、同じように銀色の髪で赤い目の誰かが、夢でなく少年の前に現れたからだろう。

――キラ、ユオン……こつちへいらっしやい――

赤い目の少年と青い目の少年を呼ぶ声。その声の主は、目を常に覆い隠した姿で――本来の顔立ちは見ると影もなかった。

けれどそれは、この少年には何の不都合もない事であり。

「……何で……母、さん……？」

銀色の髪で赤い目の女性、それは赤い目の少年の実の母で。その女性と瓜二つの少女に、理由なき信頼感を持たせる因の……それもきつと、生まれ変わりと呼ぶべき誰かだった。

その青白い光を放つ剣は、多くの命を吸った呪われた剣だと  
——様々な夢を見る度、その現実には突付けられていた。

「……………」

激しい吐き気に目が覚めて、少年は夜風に当たりに外に出る。

「……………せつかく……………忘れてる、のに……………」

今の躰で目覚めるまで、少年の過去と言える剣は長過ぎた時を  
眠りの中で過ごし……………その記憶はほとんど失われていったが。

少しでも縁故のあるものに出会う度、はつきりとした中身は  
戻らなくても、事実だけを少年の青い目に必ず観せていく。

「もう、誰も……………覚えてないのに……………」

常に冷たさばかりを与える旧い剣は……………ただ唯一、その柄に  
填まる透明の玉だけがいつも温かく、思い出せない優しい夢を  
時に観せてくれていて。銀色の髪の少年もそれだけは、決して  
失くしてはいけないものだはずとわかっていた。

「殺した奴も殺された奴も……………もう、何処にもいない」

剣を魂とする少年が、あまりに長く眠っている間——

生まれ変わりがあるのなら。少年が失った誰かも傷付けた  
誰かも、おそらく何度も魂を書き換え、巡らせてきたのだろう。

「何処に行っても、誰も……………俺の事は知らない」

それは確かに、少年に与えられた救いで——そして罰だった。

でも——と。

自らが常に曖昧である少年に、今だけは確かな形があり。

「俺はラピスの……………助けになりたい」

それを与えてくれた妹分と、妹分が大切に思う者達——  
妹分の心を守るために必要な誰か達を、ただ守りたかった。

「それなら……………殺さない」と

海の底のように暗い夜空と、白だけの月を見上げながら、  
少年は暗く青い目を澱ませていく。

そんな少年の傍で、剣の柄の透明な玉は僅かに赤みを帯びる。

——殺したくないって。どうしてそう思っちゃダメなの？——

その思いをこそ少年は殺すと、その玉はずっと知っており。

それを少年に告げてくれた、赤い髪の誰かを映すような赤で、  
剣から零れゆく青白い光をささやかに抑え続ける。

それでも少年には、昏く赤い夢が今も届き続けているために。

「あいつを殺さない……………ラピスが、いなくなる」

それが誰か思い出せない相手も、既に観極めていた相手も、

「ラピスが望むなら、それが……………俺の、役目だ」

自身に出来ることはそれくらいだと。誰も知らない誰かの闇が  
わかることが——剣となった少年の永い呪いだった。

翌朝早くに、少年達がその家を後にする前に。

思つても見ない者達が、突然訪ねてきていた。

「へ……ツグミ、何で？」

「あれー。どーしたのくーちゃん、うちまで来るなんて？」

少年が先日まで世話になった御所の、剣の師の娘で守護者の姪である、赤い髪の少女と。少女と同年で、少女の従兄弟を含めた仲良し組の、帽子が似合う少年——ジパングらしからぬ襟のある上着と、繊維の荒い長い下衣という服装が多い友人が、連れ立って朝から現れるという珍しい事態に。

妹分は首を傾げながら、嬉しそうに彼らを庭に招き入れる。

「ごめんねラピちゃん、ひよつとして取り込み中だった？」

既に出かける準備万端の妹分に、帽子の少年はすぐ気が付いたようだった。

「ううん、今日からまた、しばらく留守にするから。その前に

二人だけでも会えて良かったよー」

「そーなんだ！ 危ない危ない、やっぱりすぐ来て良かったよ」

「？」

ますます首を傾げる妹分の前で、赤い髪の少女の方が、妹分と少年の両方を見ながら難しい顔をした。

「……何処か行くの？ ユーオンもラピも」

「ああ。ちよつと梅と一緒に遠出してくる」

淡々と返しながらも、何処か真剣な目で知らず剣に手をかけていた少年に、赤い髪の少女は軽く息をつく。

「頼也さんが昨日——ユーオンの事を占われたんだけど」

「へ？ ヨリヤが？」

「あまり良くない結果だったみたい。妹と人形が禍を呼ぶって

……それ、妹ってラピの事になるの？ やっぱり」

「……………」

少年にはそれよりも——もう一つの方が気になる単語だった。

「……人形って？ ツグミ」

「わからないけど、頼也さんは、ヒトに限りなく近い人形って首を傾げられてた」

妹と人形——……その二つの言葉が当てはまる何かを、今の

少年には断定する事は出来ず。

一瞬の強い頭痛を振り払うように、強く顔を歪めた少年は。

「まあ——例の人形達には確かに襲われそうだし。ありがとう

ツグミ、気を付けるよ」

「……………」

穏やかに笑って礼を言う少年の前、赤い髪の少女はおもむろに、着物の袖から何かを取り出していた。

「——？ 何これ？」

そして渡された、札束のように大量な何かのお札に少年は目を丸くし。対する少女は何処か、そつぽを向く様子で、

「みんなで書いたの。それぞれ色々力も込めてあるから、何かあったら良かったら使えば？」

「——へ？」

「ユーオンなら多分、どれがどんな力か何となくわかるでしょ？  
ヒョワなんだから、戦う時は道具を上手く使いなさいよ」

「……………」

渡された大量のお札は、根本的には同じ属性——同じ血を持つ術師の家系の者が、それぞれの力を込めてくれた……暗い青が基調でも、そこに乗る色は温かいものばかりだった。

中には優しい赤が観え隠れる、多分目の前の少女が書いてくれたお札も沢山混じっている。

「……来てくれてサンキュ、ツグミ。これ——ツグミや御所のみんながそばにいるみたいだ」

「札なら頼也さんに言っただけだ、占いを伝えるついでに、渡しに行くよう頼まれただけだから」

あくまでそっぽを向いている少女に、少年はただ……心から嬉しそうに、穏やかでも無防備に笑って札を口にした。

それはおそらく——彼らの前で、その命を落とすたくないと言っただけに對する、赤い髪の少女の答えなのだ。

青白い月夜の事を覚えていなくても、何処かで悟るように。

「無くなったら取りにおいでって、頼也さんは言われてたわ」

事も無げに少女はそれも口にして、その後は今度は——

連れの帽子の少年と話す瑠璃色の髪の少女を見ながら、再び難しい顔をして次の言葉を口にしていった。

「あのね、ユーオン。悠夜から最近、訊き出したんだけど……」

「——？」

赤い髪の少女の従弟で、守護者である公家の次男の、おそらく最も強く力を受け継ぐ子供の名に、少年は不思議そうに少女を見つめる。

「少し前から悠夜、浮かない顔をしてる事があって。なかなか何も話そうとしなかったんだけど……昨日の占いの結果が出た後、ようやく話してくれたのはね」

少女曰く。とても強い霊的な感覚を持っているその子供は、視たくないものに最近気が付いてしまったという。

「ラピのね——……本当のお母さんの霊が、まだ成仏しないでうろついてたって言うの」

「……………え？」

少女の視線の先では、瑠璃色の髪の少女が——心から楽しげに、帽子の少年と話をしている。

「それ自体は、悪さはしないって言っただけ……ラピ、何か様子が変な事とかはない？　そういうのって無意識に、何処か影響を与えてくる事があるから」

「わからない。前から大きく変わってはないけど……でも……」

友人達は、それが自ら命を絶った者とも伝えられておらず。

その瑠璃色の髪の娘は、とつくの昔に差し迫った身であると——少年はおぼろげに、『銀色』ははっきりと知っていた。

そんな話が出ている事は、露も知らない瑠璃色の髪の少女は。

帽子の少年が取り出して渡してくれた、PHSに取付けられる仕立ての小さな巾着を、まじまじと眺めて驚いていた。

「いいの？ いきなりこんなのもらっちゃって」

「うん。ラピちゃん何か、帰ってきてから元気無かったしさ。

お守りになるといいなと思って」

「そうだった？ 私は全然、いつも通りのつもりなのにな？」

むしろこの所は、慣れ親しんだ家に帰り、調子が良かったはずの彼女は不思議そうに首を傾げる。

「だってさ、おじさん達とずっと連絡、とれてないんでしょ？

それだけでも心配で落ち込んじゃうって」

「それはあるけど……でも、伝波が届かない所に行ってる事も本当よくあったから」

同じ通信道具を持つ養父母が、少し前から音信不通となっていた事を、言われてからその養女は思い出したようだった。

しかしそれは、あまり考えたくない事であるのか、PHSの飾りに視線をすぐに戻す。

「これ、何が入ってるの？ お守りなら開けない方がいいよね？」

「うん、こう見えても高収納性なんだよー♪ つまんない物も入ってるけど、メインは前にラピちゃんが行った、火狐神社の狐の形した琥珀のアレ！ ラピちゃん確か、可愛いってずっと見てたしさー」

「ええ！？ あれ結構高くなかった、くーちゃん？」

ごく小型とはいえ、上質な天然石の名を口にする帽子の少年に、日頃あまり動じる事のない瑠璃色の髪の少女が少し慌てる。

「それがね、最近ちょっと旅芸人一座さんのお手伝いしたら、後でお小遣いもらっちゃって。臨時収入あったからさー」

……むむむと、瑠璃色の髪の少女は小さな巾着を凝視した後。

そのままの顔で、くるりと帽子の少年を見てさらりと言った。

「でも……火狐神社って、安産祈願じゃなかったっけ？」

「え！？ そうだっけ！？」

帽子の少年の動揺に、アハハと笑った瑠璃色の髪の少女の前で、「何でそんなとこ御参り行っただっけ！？ てっきり確か、

家内安全とか商売繁盛とかそういう系って信じてたのに！？」

「わかんないよー？ 学業成就だったかもしれないよー？」

「うわあどうしよう、神様困るよね怒るよね！？ ラピちゃんこれから、お受験の予定とか作ってくれる気ないよね！？」

「……また、ラピスがクヌギで遊んでる」

焦る相手に更に油を注ぐのが、妹分らしいと。傍から見守る少年はたはたと苦く笑うのだった。

「思い出した！ 買う時ちゃんと、厄除けでって言ったよ！」

「あはは。さすがくーちゃん、抜かりないー」

本当、有難うと……表情豊かな帽子の少年の、いつも楽しげで優しげな笑顔を写すように、幸せそうに笑った妹分だった。

昏く赤い夢など無かった事のような、いつも通りの微笑みで。

\*

自分は昔、天空の聖地に住んでいた——

そう語る占い師が現在覚えている事は三つだと、茜色の髪の少女は告げられていた。

「私は約二百年前には、『地』にて『黄の守護者』の血をひく貴女様の乳母をしておりました。しかし当時起こった大規模な魔族の襲来の際、貴女様は命を落とすことになってしまわれ……けれども、貴女様は必ずいつか帰られる事だけはわかっていました」

「……………は??」

「私自身、貴女様が現れるまで存命可能かわかりませんでした。そのため、貴女様がおそらく訪れられるだろう聖地に、自身の記憶を別個に封じておいたのです」

そのため今の占い師にわかるのは、少女が現れた時に少女を判別するための『気配の記憶』と、最低限の『己の情報』に、『記憶を隠した所』だけだという。

「つて——…結局、どーいう事なのよ?」

「……貴女のその羽は、紛れもなく……乳飲み子の頃より私がお育てした、ミラティシア・ゲール様のものです」

普段は全く人目に触れることもなく、少女が意識しなければ現れることもない、その背に刻まれたある光を——

占い師は両目に涙を溜めながら見通し、口にするのだった。

「——もう、水華つてば。一番出かける用事のある人が、一番遅くまで起きてこないってどーなのかなあ?」

「んー……眠いっつーの……」

寝ぼけ眼をこすりながら、占い師が待っている京都に向かう茜色の髪の少女に、家を後にしてから妹分はずつとつかかかのように話しかけていた。

「せっかく鶇ちゃんやクーちゃんが来てくれたのにく。別に水華、朝弱い方じゃないんだから、紹介出来ると思ったのに——」

「仕方ないでしょー……何か変な夢沢山見たし……」

珍しく少し覇気のない少女に、妹分も首を傾げる。

「どんな夢見たの? いつも爆睡なのに、珍しいね?」

「んー……どーでもいい感じばかりでよく覚えてないけど。途中でユーオンは外に出てくし、とにかく眠りが浅くてさあ」

「……へ? オレ、起きた覚えないけど?」

不思議そうに首を傾げる少年に、少女は不服気な目を向けた。

「よく言うわよ……何かずーつとうなされてたわよ? エルかエアか知らないけど、何でだーつて、ぶつぶつと」

「……………へ?」

一瞬、金色の髪の少年の時間が止まりかけた時に、ちょうど最初の目的地——占い師との合流地点で占い師の姿が見え。

それ以上その話は続く事なく、京都を後にした一行だった。

「……………」

前方を茜色の髪の少女と妹分が、後方を少年と占い師が歩いている状態で、少年はちらりと横目で占い師を見る。

「なあ、梅……………」

「——ん？」

「ミズカの前世を知ってるって……………本気なのか？」

不審そうな顔付きで切り出す少年に、占い師は少年が馴染みのあるいつもの意地悪婆の雰囲気であらう。

「知ってるという事は知ってるがのう。確かにお主の言う通り、それ以上の事は知らぬよ、今のわしでは」

「……………それは本当に、ミズカの前世なのか？」

「——ふむ。お主は何やら、違う何かを観えているのかのう？」

「……………わからないけど……………何か、気になって」

現状把握に優れるという勘の良さを持つ少年には何故か——

占い師の言は嘘ではないが、真実とも何処かずれている気が昨日からしているようだった。

「そうじゃな。それもわしが、記憶を解放すれば明らかにになるかもしれない」

「ミズカはこの先……………梅が知ってる奴の事を思い出すのか？」

その問いを口にした少年の顔付きは、何故かとても浮かない様子であり。占い師はおやと、目を丸くして少年を見返す。

「それはないじやろう。前世とはあくまで現世の陰に過ぎない

——前世が現世を侵食するのは、あってはならない事じゃよ」

それはまるで、死者がこの世に干渉する禁忌と同じであると、占い師は厳しい顔付きで口にするが、

「それなら何で……………梅はミズカに関わるんだ？」

少年も同じくらい厳しい目つきで占い師を見つめる。

「ミズカが何者でも、ミズカから梅は何の関係も無いはずだろ」

「ああ。しかしわしにも、自らの存在意義を果たす権利はある」

「……………」

「お主はストイック過ぎるのじゃよ。せっかくすぐ身近に、実の父がいた事を——お主の目なら初見でわかっただろうに」

あくまで現在の養父を、養父としてしか認めない少年に——占い師は痛まじげな目を向けながら、ワープゲートを出た後の目的地に続く林道を、老婆とは思えない速さで足を進める。

「……………オレも向こうも覚えてない。それなら意味はないだろ」

「どうだかのう？ 記憶それ自体は無かったとしても、お主もレイアス殿も、尋常ならぬ眼の持ち主であるし——

そこで不意に。占い師の声の続きを聴ける事はなく、少年の周囲が唐突にブラックアウトした。

「——!?!」

これまで歩いていたはずの、人の手が入りながら厳かさも残す林道とは全く違った、薄暗いだけで何も無いモノトーンのその場所は……………青銀の吸血鬼と同じ色と、それだけは瞬時に少年はわかったのだが。

「何だここ——……………ミズカ!? ラピス!?!」

立ち止まって必死に辺りを見回す少年の前、均一な色の空間が、ぐにやりと歪んだような錯覚に少年は捕われ。

「……………!!」

その歪みの後に、場に現れていた――

これまで少年が、直接会った事は無い白銀の人影が、何故か強い既視感で絶句する少年に、穏やかに笑いかけていた。

「――どうも。お初に……………お目にかかります」

「……………アンタ……………!?!」

何一つ余分なものが無い、僅かに青じみた鉛色の世界に。その世界では目立つ白銀の短い髪の毛、薄青い切れ長の目を細眼鏡で覆う、一見は聖職者のような恰好の男が少年の前に立っており。

「先日は陽炎が、花の御所でお世話になりました」

「アンタ……………あの女の……………!?!」

あくまで穏やかに笑う男は、少年が御所の者に敵対する存在として警戒した偵察者の女の名を口にし、青銀の吸血鬼と同様、少年に敵対する者である事をあっさり認め。

「俺はジェレス・クエル……………悪魔としての名はルシフージュといます」

「――」

「俺の契約者が君の保護を望んでいるので、アラス君の代りに迎いに参上したというわけです」

そう言って少年をまっすぐ見据える男は――しかし少年には、見逃す事が出来ない違和感をその全身に纏っていた。

「アンタ……………あの女の、主か……………?」

「――いいえ? 俺の契約者はもっと幼い、純粹な子供ですよ」心から意外そうにする男だが、それでも消えない微笑みの裏は全く空虚で……………生き物としての奥行きが無く。

「陽炎に言わせれば、俺は身も心も、クエルを名乗る事すらもおこがましい借り物ですから。彼女の探す主は俺とは別人です」それでも確かに、偵察者の女が口にした、女が生涯をかけて仕えたいと望む『主』とはこの男を指した話だったと。

正確にはこの――確実に自ら以外の、生きた者の体を奪って使う誰か……………死んだ妖精の体を奪った少年以上に呪われた者の事と、現状把握に優れる少年は声を呑んで悟っていた。

おそらくは何重もの意味で、危険な相手である事を。

少年は一度辺りを見回し、男以外に誰もいない事を確認する。

「大丈夫ですよ。ここはアラス君が丁重に創ってくれた、誰も巻き込まずに君達とお話が出来る特別空間ですから」

「……………!?!」

「彼は非常にお人好しなんです。君と水華さん以外は決して傷付けたくないと言いますし、あまつさえ君の事は生け捕りにしなければいけないんです、俺達は」

何故か男は楽しげな笑顔で、ひたすら緊迫顔の少年を見ており、「仕方ないので、水華さんの方には別の者を行かせましたが。果たして敵うかどうか……………難儀な事です、本当に」

不利なのは自分達と言いたいような笑顔に、少年は顔を歪めた。



「アンタは何者だ……契約者って、どういう事だ？」

「——簡単な話ですよ？ 俺は悪魔ですから……悪魔と人間の関わりは常に、魂を代償に望みを叶える——それにつきます」

「……じゃあ、アンタの契約者って……」

「ええ、人間の子供です。最も、彼女が契約している悪魔は、俺だけじゃないんですけどね」

話しながら男は、羽織っていたケープを胸の中央で止める輪に手をかけて取り去り、まさに神父のような服装を露わにする。

「それでもソール曰く、俺がアラス君が本命らしいですけどね？」

その姿に少年は、これが茜色の髪の子女の言っていた敵——人形使いの子供を守る神父だと、改めてわかったものの。

「……アンタ達は……まさか、みんな……」

「——？」

ケープの留め具である輪を、布をはためかせた状態のまままで、その神父は倍近い直径に広げ。どうやらそれが、彼にとつては武器であると少年にはわかったのだが、

「あの守護者もアンタも……悪魔の血を持つ奴は、みんな……」  
そうして武器を取る相手を前に——何故か少年は剣を抜く事も忘れて立ち尽くしていた。

「悪魔を人形として使える人間の……：奴隷なのか？」

「……おやおや。君は随分——本当に勘が良いようですね？」

目の前の誰かも、突然旧い仲間を裏切る事になった守護者も。それが人形に宿る悪魔でも、生者そのものの悪魔でも、生者に憑いた悪魔でも……自在に取り入る誰かの傀儡だと知ってか。

茫然としたままの少年に、神父は手にした輪の一端を向けて再び笑いかける。

「彼女が君を気にする理由が——何となくわかりました」

「……——」

「せっかくですから、俺が水華さんの相手をして、彼女に君を会わせたかったのですが……それでは負けるらしいので」

「……！」

ぎしりと突然、まるで神父の持つ輪が少年を直接取り巻いて締め付けたかのように、見えない拘束の力が少年を襲った。

「水華さんは本当にお強いですからね。アラス君以外のうちの者では、正攻法では相当苦戦するでしょうから」

「……まさか、アンタ——……！」

どんどん締め付けてくる見えない輪に捕われながらも、少年の脳裏には全く別の危機感が突然に生まれる。

「ミズカまでまさか、そいつの人形にする気か……！？」

悪魔である血——魔として落ち得る力を持った者を、傀儡と出来る誰かには、聖魔併せ持つ少女も決して対象外ではないと。  
「出来るかどうかはともかくとして……その呼びかけによって、水華さんに隙を作ることとは可能でしょうね？」

今この場で、まさに少年が危機に瀕しているように——

おそらく少しだけ違う位相の同じような空間で、その少女も危地にあるはずだと悟った少年は。

最早躊躇う事は無く——その身を削る力を、一挙に解放した。

「——！」

目前で呼吸を止めた少年の周囲から、突然放たれた白い光に、神父は瞬時にその微笑みを消し去っていた。

「っ——！！！」

精霊も使えない弱小な身で、唯一の特技——命を直接ぶつけるためにどんな力にも通じる、命を直接削ぐ光を放った少年は、見えない輪から解放されたはいいが、命を削る光の反動として、すぐにも口内に湧き上がった血を必死に嘔み殺す。

少年のその姿に、神父はおやおやと両肩を竦め、

「本当に髪の色が変わるんですね。でも——いいんですか？」

「——！」

銀色の髪へ変わった少年の周囲に、今度はまるで何重もの檻のごとき輪を神父は積み上げたようだった。

「力の絶対量だけで言えば、君は俺には遠く及びません。そのやり方では単に時間の問題です」

「……！！！」

少年を生け捕りにしたい手加減が相手にあるとはいえ、悪魔を名乗る者との力の差はあまりに歴然としており。

今朝方赤い髪の少女が持ってきてくれたお札も、個々の力は決して大きくはなく、小さな紙に込められる程度でしかなく。

「……っ……」

命の光の反動で全身を蹂躪し、脱力させていく痛みの中——少年はある決意と共に、赤く観える札を一枚取り出していった。

——曖昧なら曖昧でいいんじゃない？ と。

自らの形に乏しい少年と、短い時を過ごした赤い髪の少女は、当たり前のように……気持ち強気に、笑って口にした。

「自分と周りの区別があまりつかないのが、ユーオンなら……それを強みに使えばいいだけでしょ？」

少年の五感は生まれつき、そのすぐ近くに在るものの事まで、我が事と感じる故障品であり。

本当はそれは、この少年に数々の呪いをもたらす最大の因と知りながらも——少年が決してそれを手放さない事をも知った少女は、その愚かな在り方ごと受け入れるように。

「普通は自分以外の誰かが込めた力なんて、五割再現出来れば上々ってところだけど……」

どれだけ腕の良い力の使い手であっても、特別な縁で繋がる相手以外の他者の力を、十分に制御する事は難しく。

その札は本来、花火程の価値しかないと少女は笑った。

「でもユーオンなら——……ユーオンがこれを使えば……」

自身と他者の境界が曖昧な少年には、それは自身の力であり。

そしてこの少年の——ごく少ない命でその生を繋げられる、花火を爆弾の威力に変える特性までは誰も知らなかったが。

「……な？」

神父は突然、その何もない空間に現れた強過ぎる噴水のような力と、それにより吹き消された自らの力に目を丸くした。

「——！！！」

同時に頭上から襲い来た気配に、攻守を備えた輪形としてある魔法杖を咄嗟に振り上げ、青銀の剣の斬撃を何とか防ぐが、

「ぐ——！！？」

それが魔法具である輪杖でなければ、剣から発された白い光がそのまま己の命を削いでいただろう事を、剣を受け止めた輪の周囲に飛び散った光の一部を受けて悟る。

「……——っ」

斬撃を防がれ、その先に飛ばさんとした光も散らされた少年は、本来ならその程度で尽きた命であるはずが——

「なるほど……君もどうやら『水』の系統の化け物ですね」

先程の荒れ狂う水の力の直下にいた少年は、それを受けて逆に回復したかのような様子であり、

「自然の一部たる精霊の特性か——……『水』の気は君には、大きな力となるわけですか？」

近いが違うと感じた少年も、そんな情報を敵に言うわけもなく。赤い髪の少女がオーソドックスに込めてくれたらしい、五行の力……木火土金水と観える内の、今度は火の札を手を取った。

「——！！？」

大きな動きで斬りかかった少年を、苦も無く見切り神父は再び輪杖で剣戟を防ぐが、

「今度は『火』——！！？」

剣に乗せて突き付けられた札が、元は松明程度の力が、強力な火炎放射器のように発火し、神父を一息に飲み込んだ。

「……——！！」

発火の直後に反転し少年は距離をとったが、火だるまになった相手はしかし、

「全く……俺も『水』の家系でなければ、厄介な一撃でしたね」  
着衣一つ焦がす事は無く、全ての火を消し止めていく。

「……君は本当に……面白いヒトですね、ユオン君」

そして何故か——今はほとんど誰も呼ばない少年の名を口にし。  
「他人が込めた多少の力を、爆発的な威力に変えられるなんて……『ピアス』の情報に、そんな事はなさそうでしたけどね？」

「……——え？」

それはいったい、どんなに強い呪いの類の言葉だったのか。  
銀色の髪の少年の全身が瞬時に強張り、強い動揺が少年を襲い。  
そして何より……その動揺の理由が全くわからないことが、  
銀色の髪の少年を動揺させていた。

「……ピアスって——……誰、だっけ……？」

——知っている。

自身は確かにその名を知っていると、そこまでわかっている少年なのに、知っているという事しかわからなかった少年は。

それがどれだけ、少年にとって大きな存在であるのか——

それなのに何一つわからないことの動揺に、知らず片膝までついてしまう程の衝撃を受けていた。

そうした少年の動揺を知ってか知らずか。

様々な力の込められたお札という、新たな戦法を使ってきた少年を警戒するように神父は一度距離をとり、

「あちらも思わぬ苦戦状態のようですし……今日は水華さんは諦めましょうか」

標的は少年一人に切り替えるというように、そう口にする。その声に呼応するように薄暗い空間が突然大きく揺らぎ。

「……………え……………?」

揺らぐ空間の隙間から、その向こうにいた茜色の髪の少女や妹分を背にして、それはこちら側に飛来し。

茫然とする銀色の髪の少年の前に、物音一つ立てずに——

その赤く幼げな天使は、黒い翼と鎌と共に降り立っていた。

「……………そんな……………」

それが誰であるかわからないまま、ただ胸を切り裂くような衝撃だけが、銀色の髪の少年を激しく蹂躪する。

「……………ウソ……………だ……………」

胸骨上に何か填める、円形の窪みのある簡素な赤い鎧を纏い、黒いもやもやとした羽のある、おそらく天使人形であるそれは。

全く表情は変わらないが、あどけない顔立ちで、少年以下の年齢の少女をモデルに造られたと思われる人形であり。

横側で束ねた長いまつすぐな黒髪の頭に、何故か赤い猫耳も取り付けられた、黒い目の天使の人形だった。

「……………どうやら本当に……………彼が本命ですか? ソール」

剣まで取り落として座り込んだ少年の姿に、神父はちらりと、空間の隙間からやってきた別の人影を見やる。

「残念ながら彼は、君が取り入れる悪魔ではありませんが……………」

その小さな人影は黒く短い髪と鋭い緑の目の、男の子のような幼げな子供であり。黒く大きな両目の灰色の猫のぬいぐるみを抱え、無表情に神父の足下に立ちながら少年を見つめ——

「……………ユオン……………兄さん?」

あくまで無機質なままの顔と声で。それだけ口にしたのだった。

\*

その赤い天使は、有り得なかった奇跡の幻の世界で——  
黄色の髪の少女の代りにいた、同じ『資格者』の銀色の髪で  
赤い目の少年を、その力を奪うために殺した処刑人だった。

—お願い……誰か……水牙を、助けて—

水華という少女の代りに存在した少年の名前は、その少女に  
とても近く、瑠璃色の髪の少女とは兄弟のように仲が良く。

—助けて……水華——……—

瑠璃色の髪の少女は……存在しない少女に助けを求める程に、  
有り得てほしかったはずの世界で、追い詰められる事になった。

何故ならその少女の目の前で——銀色の髪で赤い目の少年は、  
あまりに唐突に、赤い天使にその命を奪われたからであり。

だからおそろく……それがただの幻であったとしても。

瑠璃色の髪の少女は誰より——赤い天使を恨んだはずだった。

「……………ウソ……………だ……………」

銀色の髪で青い目の少年に今わかるのは、ただそれだけで。  
場に降り立った赤い天使は、少年が助けになりたいと決めた  
妹分の——確実に敵であると。つい今まで、黄色の髪の少女を  
襲っていたはずの人形に、それはわかった少年だったが。

理由もわからず座り込んだまま、動けない少年に。

神父は足下の幼子をかばうように立ったまま、淡々とその  
幼子と人形の名前を少年に告げていた。

「ソールは君が……君のあの白い光が『ピアス』の知る誰かの  
力にそっくりだと言うんですよ」

自分に向けられた神父の声にも関わらず、赤い天使から目を  
離せずにいる少年に、神父は穏やかに先を続ける。

『ピアス』は古い、神暦の頃に存在したと言われる亡国で、  
伝説となった人間の少女武人をモデルに造られた人形なんです。  
しかしソールが言う事には、『ピアス』が着けるあの赤い鎧は、  
『ピアス』を造らせた物好きな悪魔が……本物のピアス少女が  
着けていた鎧を入手した物らしくてね」

「……………」

神父の足下で佇む幼子は、少年をまだ見つめつつ、神父の服の  
裾を掴んでいた。

「十中八九、『ピアス』には——その赤い鎧には、少なくとも  
本物のピアス少女の記録が宿されています。ソールはそれを、  
読めるのですが……」

人形使いであるその幼子が赤い天使の事を操り、また記憶まで  
把握しているのだと——事も無く神父は告げた後で。

「それによると——君は、『ピアス』のお兄さんらしいですよ？  
……ユオン・ドールド君？」

少年が未だ思い出せない事を、あつさり白日の下に晒していた。

「……………え？」

最早完全に戦意を失ってしまった少年が、そこで初めて赤い天使から目を離し、戸惑うように神父の方に振り返った。

少年の放心ぶりに神父は冷笑しつつ、足下で裾を掴む幼子のためにその先を続ける。

「ソールは俺やアラス君を、『ピアス』の兄に似ているとして目をかけてくれていますが……まさか限りなく本物の可能性が高い兄に出会えるとは、思ってもみなかったようですよ」

「……………」

幼子は神父を見上げ、意味ありげにただ黙り込む。

「どうして君が『ピアス』の兄にそっくりなのか、説明出来る事柄としては……俺や水華さんと同じような事情くらいしか、考えられませんけどね」

「……………な——？」

そこで出た思わぬ名前に、少年は極僅かに気を取り直し……無意識に剣だけはその手に取り戻していた。

「アンタや水華と……俺が、同じ——？」

「……………」

神父だけを見て言葉を発した少年に、幼子は何故か複雑そうな視線を向ける。

そして神父は、彼が彼である事情をも——あっさり口にした。

「俺も君も……そして水華・竜牙・クオリファーも。遠い昔、既にその命を落とした……『死者の一族』だと思いますよ？」

「……………」

『死者の一族』。それはつい先日、御所の偵察者であった女の口からも出た言葉であり。

「……………何で——」

少年も既に知っていたその名……本来は、死した自らの体を別の媒介に宿した魂の力で動かす、異端の化け物を。広義には一度死を迎えながら、何らかの方法で存在を繋ぐ者の総称に、「水華が何で……そうなるんだ？」

その少女の歪さを少年はとづくに知っていたが——

そこに確固とした形が得られるのは、おそらくこれが最大の機会であると、神父をまっすぐ見返していた。

「君は——自分が死者であるという事は、否定しないんですね」  
神父はそんな少年に、何処か歪んだ微笑みを浮かべると。

「何らかの方法で、今その体を使っている君と同じように……」

この体を与えられ、我がものとして使っている俺と同じように。

水華・竜牙・クオリファーの体を横から使っているのが、俺の………実の妹だからですよ」

いったいどれだけ少年に、唐突で衝撃的な話を、真っ向からつきつければ気が済むのか。

実感は出来ないながら、全て真実であるとわかる男の言葉に、銀色の髪の少年はただ強く剣を握り締めていた。

「アンタが……水華の、兄……？」

「正確には、彼女が生やしている羽の持ち主……ミラティシア・ゲールの腹違いの兄だったのが、ジェレス・クエルですよ」

その生前の名の主とは、自らは別人であると言った男は——

「困った事に俺は、ルシフージュという悪魔なのに、天の民に生まれてしまつてね。悪魔の血に目覚めて実の妹を殺した後に、兄の手で『黄輝の宝珠』に封印されていたんですよ」

今はその悪魔でしかないと、楽しげにすら見える顔で語る。

「じゃあ、アンタがやつぱり……」

『死者の一族』という言葉を最初に口にした、偵察者の無力な女は。その探し求めた主について——

「アンタも守護者になれるはずだった……『資格者』なのか」

『黄輝の宝珠』の家系の血を持ち、実の従兄と妹を手にかけて、天の島から姿を消した者であると。女が話していた事だけでも、この状況を理解するには少年には充分だったが。

「——そこまで気が付いていたんですか？ つくづく、驚きの現状把握能力ですね、君は」

青銀の吸血鬼が何度となく口にした、『資格者』という言葉の意味を……何故かそう関連付けていた少年だった。

「ソールと同じですね。君がもし人間であったなら、ソールのように悪魔使いになれたでしょうに」

「……!?!」

「悪魔の望みを把握し逆手にとる事で、ソールは数々の悪魔と契約を結び、傀儡の人形として動かしています。それは俺も、アラス君相手にも例外じゃありません」

足下で黙り続ける幼子の頭を撫でながら、今度は神父は身動き一つ取らずにいた赤い天使を、改めて見直していた。

『ピアス』だけは例外ですけどね……それでも『ピアス』の望みも、ソールは叶えたいと思っっているんです」

「……」

「俺達と一緒に来ませんか？ ユオン君。君がたとえ、彼女を思い出せないでいても……『ピアス』は君の妹ですよ」

生粋の人形らしく、表情を変えず喋る事もなく、ただ少年を黒い目で見つめ続ける赤い天使を——まるで憐れむように。

立ち上がる力すら戻らない少年に、彼は悪魔の誘いをかける。

「俺、は……」

少年の脳裏にはあまりにも沢山の情報——

誰かの望みと古い夢。昏く赤い夢とそれに奪われた自身の心。青白い剣の夢と、有り得なかった世界の幻。

そして誰か達との束の間の、優しい時の記憶が錯綜を続け。

赤い天使がそこで、すつと自然に差出した手を……

全ての混乱を放棄するように、少年がその手を取りかけた時。その空虚な世界には唐突に、終わりの時が訪れていた。

「——！！！」

「!?!」

突然薄暗い空間全体に入った白い亀裂に、神父は咄嗟に足下の幼子を抱きかかえる。

「仮にも守護者が宝珠の力で創った空間を……まず見つけた上、  
こうも完全に破るとは——」

その脅威の特殊さに思い至つたらしい神父は、少年を今連れて行く事を諦めたらしく、

「……君の事はまた後日、改めて迎え入れましょう。それまで俺の妹を宜しく頼みますよ——……ユオン君」

少年が彼らの元に来るといふ事を、全く疑わないような声で。それだけ言い残し、赤い天使と幼子を連れ、空間の崩壊と共に悪魔である神父の姿は消えていたのだった。

「あ——……」

それに対し、否定の言葉を返せなかった銀色の髪の少年は。

ボロボロと崩れ落ちていく、一つの小さな世界の断片を前に……同じように崩れ落ちた、自身の存在理由から逃げるように。

その短い時間の記憶を、なるべく手放すために——

金色の髪の少年へ、座り込んだまま体を譲っていたのだった。

「ユオン！ 大丈夫!? いるの、ユオン!?」

景色が完全に元の林道に戻り切らない内から、瑠璃色の髪の少女の声が響いてくる。

「ラピス、待つんだ——今迂闊に踏み込めば巻き込まれる」  
焦って少年を探す妹分をなだめるように、どうやらこの空間を壊した張本人らしい、誰かの落ち着いた声と一緒に届く。

「……え？」

その声の主が何故ここにいるのか。戸惑いの思いに我に返った金色の髪の少年は、今まで起こっていたことが何なのか、全くわからない混乱も覚めずにいたが……とにかく立ち上がって、声の主を探してきよろきよろと辺りを見回し。

「何で——……レイアス……?」

次の瞬間、すつと少年の前に降り立っていた人影を目にして。

大きく目を見開いて丸くする少年が、無事であるとわかって安堵したように、降り立った人影は穏やかに笑った。

「——大丈夫か? ユオン」

立ち尽くす金色の髪の少年の頭を、ぽんぽん撫で叩く人影は。

傍らには瑠璃色の髪の少女もしがみついた状態で、その肩を大切そうに抱きつつ、義手である右手で少年の頭を撫でる——  
紛れもない彼らの養父の姿が、そこにあったのだった。



\*

ジパングに存在するという聖地——『伊勢の宮』に、その後一行は、驚く程あつという間につく事になった。

「さすがはおとーさんの『飛竜』だね♪ 気持ちいいー早いー」  
四本足で大型の、コウモリの羽を持つトカゲのような獣の背で、同行者と共に空を行く瑠璃色の髪の少女は、京都の南の自宅に帰った時以上にご機嫌の様子であり。

「……オレは初めて乗った気がする」

右前足だけ何故か先の無い、全体像としては灰色に観える獣に、少年は複雑そうな紫の目を向けるのだった。

レイアス・ウオーデン。近年滅んだ『靈獣族』という千族の生き残りであり、一見は前髪に黒いメッシュの入る灰色の短い髪に、髪よりも薄い灰色の目の——少年にそっくりな顔立ちの若い男が、少年と瑠璃色の髪の少女の紛れもない養父であり。  
「……五人も乗って大丈夫なのか？ コレ」  
少年と妹分、気を失い眠り込む茜色の髪の少女と、その少女を大事そうに膝に乗せている占い師と。

それらをまとめて、自らの『力』である『靈獣』の背に乗せ空路をとると決めた養父に、少年は不安げに尋ねる。

「そうだな——本来、ヒトを乗せられるような『実体化』は、俺がここにいと出来ないはずだけだな」

長剣を背にし、少年と似ている黒く袖の無い上衣と、黒く長い下衣を、細身でありながら鍛えられた身体に身に着ける男は。不安げな少年とは対照的に、穏やかに少年に笑いかけた。

その養父——『靈獣族』という化け物は、自らの体とは別に『靈骨』という固有器官を媒体とする獣、『もう一つの体』を持つ事で知られていた。

『獣の自分』は、見えても触れない霊体に近い、靈獣として具現化されるといい。本体の自分とも感覚を共有した、まさにもう一つの体を彼らは持つ事になる。

「完全な実体とまではいかないが、ヒトを乗せる密度くらいは、短い時間なら何とかなる。俺の特技はそれくらい……少しだけ『力』を見て好きにいじる事だから」

靈獣族にとって、『もう一つの自分』の靈獣は、本体である人型の自分と同格であり。しかし実体をとれるのは、どちらか片方だけであり、靈獣を本体とする——つまり『実体化』する事も可能というが、それは本来人型の自分が代りに霊体化する局面のはずだった。

「靈獣はあくまで、『力』の本体が異界から投げた影だ。この世界の俺と入れ替わる事しか、本来は実体はとれないが……影をとことん濃くしたら、何とかこれくらいになった」

何でも無い事のように言う養父だが……その特殊な特技のため、少年達が閉じ込められた異常空間を見つけ、破壊出来たのだと——納得しつつ不安げな少年なのだった。

「……何ですぐにオレ達のこと、見つけられたんだ？」

それは色々な意味で尋ねた少年だったが、養父は淡々と、

「ラピスが置き手紙をしたからな。「伊勢に行つてきます、

その後は水華が『地』に行きたいみたいです」って……本当に  
入れ違いになったけど、まあ、危ない所に間に合つて良かった」

「……………」

他人には無愛想な養父が、少年や養女にはこうして笑うことは  
多く。それにしても、あまりに安心したような養父の様子に、  
逆に少年は何か引つかかる思いが消えなかった。

「おとーさん、おかーさんは今は何処にいるの？」

飛竜の背から落ちないように振り返つて、当然の疑問を尋ねる  
養女に、養父は困つたようにまた笑う。

「どうしても手が離せない仕事があつて、アフィだけ向こうに  
残つてるんだ。家を長く空けたから、ラピスとユーオンの事は  
ずっと心配だったし」

だから片方だけが、何とか一度帰つたのだと口にする養父に、  
「それじゃあ……この後はまた、すぐお仕事先に帰るの？」

淡々と養女は、さすがに笑つてはいないものの……特に大きな  
憂いも見せず、事務的にそう尋ねたが。

「いや。今度はラピスもユーオンも連れていくよ……まずは  
水華の用事を、『地』で終わらせた後に」

何故かそこでは真面目な顔で、養父は憂い気に言ったのだった。

伊勢の地に一行が着き、飛竜が消えた後も茜色の髪の少女は

眠つたままであり。少女を抱えながら山道を、占い師の目的地  
まで同行するという養父に、占い師もそこで話を始める。

「レイアス殿……この件に関わりを持たれるつもりか？」

「ああ。水華が『地』に行きたいと言う時は手を貸すように、  
元々言われているんだ」

それは茜色の髪の少女の養父母——男からも義理の両親の言と  
いう事であり。しかしと占い師は憂い気に顔を伏せる。

「事は思ったよりも、大きく動いているようじゃ。先程現れた  
者達の狙いも『地』——そこに在る『黄輝の宝珠』と見える。

こちらに現れたのは、赤い鎧を身に着けた天使の人形と、その  
人形の使い手の子供だけであつたが……」

飛竜の背に乗り、少女を膝に寝かせる間に、何やら占い道具の  
カードを切り続けていた占い師は、

「お主とお主の養子と、その人形には並々ならぬ縁が見える。  
宝珠や魔王とは、何も関係ないはずのお主達を……十八年前と

同様に、望まぬ悲しみへと引きずり込む棘の鎖が」  
「……………」

男がその連れ合いと出会つた頃に、偶然関わってしまった、  
ある魔王の手の者により。男の故郷は滅ぼされ、沢山の大切な

仲間を男は失つていた。

「まず間違ひなく——その人形を造らせた悪魔こそ、お主の仇  
……前代の北方四天王の遺物が、今のお主達の敵じゃよ」

男は茜色の髪の少女を抱えながら、大きく肩を落として溜息をついた。

「またそれは……思い出したくない奴の名前が出て来たもんだ」

「今代の北方四天王も敵側の手に落ちたようじゃ。敵の現在の根城も、北の島とみて間違いはなからう」

「なるほどな。それなら北の聖地は使えないな」

「その通りじゃ。この伊勢からも『地』に飛ぶには、さすがの飛竜も力が足りなからう」

「ああ。俺と水華だけならいいが、ラピスとユーオンを連れていくなら、『火の島』経由で行かないと駄目だろう」

段々と近付いてきた、奥まった場所にある古い祠を占い師はきよろきよろと探す。

「……おお。これじゃ——確かにこの祠じゃ」

獣道に近い山道の終点、行き止まりの岩に埋め込まれるような、苔と草に覆われたその小さな社を開けて。占い師はそこから、僅かに白く濁った、大きな水晶玉を取り出していた。

「間違いない……わしの羽を封じた、懐かしき商売道具よ」

「……結構重そうだな。すぐにはくつつかないんじゃないか」

「そうじゃな。完全に記憶が戻るには時間がかかるじゃろう。羽が馴染み次第、わしもお主達の後を追う事にしよう……一足先に『地』へ向かい、我が君の本懐を遂げるために、よろしく助力を頼むぞ、レイアス殿」

占い師はそして、男の腕で眠る少女を——改めて涙混じりのくすんだ赤い両目で見つめ、大きく息をついていた。

そうした話を、前に行く養父達がしている一方で。

少年はまず、先程の敵が来た時、少女達の側で何があったか、妹分から真っ先に訊き出していた。

「うん、大変だったよ。何かね、水華の魔法が効かない人形の天使さんと、小さいのに凄くアヤシイ感じの子供が一緒にいて……本当に私も、驚いちゃったんだけど……」

妹分は困ったように笑いながら、その来襲者の事を口に……。

「おかしいよね。まさか、夢で見ただけのようなヒトに実際に襲われるなんて、思ってもみなかったよ？」

「……ラピス……」

金色の髪の少年はよくは知らないが、有り得なかった世界で出会った者の出現に、妹分は大きな衝撃を受けたようだったが。

「でもおかげで——危ないヒトだって、すぐにわかったから。凄いいね、まるで予知夢だね、私」

あははと笑う妹分は、何故か魔法が効かずに苦戦する少女の傍らで……遠出する時は持つようにと養父母から渡されていた小さな銃を取り出し。それで少女を援護しようと試みたところ、何故か魔法以上の効果が、そこであつた事を語った。

「魔法も効かないし、斬っても叩いてもダメだったんだけど。何でか銃は通じるみたいで、水華より私の方が活躍したんだよ」

「……………」

今も養父の腕の中で眠る少女は、その赤い天使は最も相性が悪い相手と——よくわからないままそれだけ少年は把握する。

「何か水華、戦ってる間中、ずーっと苦しそうな顔してて……人形さん達がいなくなった後、もう限界。って言って、すーすー眠り出しちゃって。よっぽどホントに、寝不足だったのかな？」

「……それもくはないだろうけど」

金色の髪少年にはあくまで、その人形が妹分の敵である事。

そして人形使いがその人形のために、何故か少年を求めている……理由はわからないが事実だけがわかった状態だった。

「でもユーオン、よく無事だったよね？ 水華だってあんなに苦戦してたのにな？」

「……ツグミのおかげだと思う。お札を何枚か使った気がする」

「そっか、鵜ちゃんかあ。それにやっぱ、『銀色』さんまで頑張ってくれたんだ。今度会ったら両方お札言わなきゃ」

「……………」

少年の無事を心から喜ぶ妹分は、その少年の——何の流血も厭わない苛烈な半身を、それでも全く恐れる事はなく。

養父母ですら警戒、というより注意していた少年について、

「オレは自分の身を守っただけだろ？ 別に礼なんて……」

「えー、何でー？ 私は『銀色』さん好きだけどな？ いつも

精一杯、ユーオンと同じで私の事守ろうとしてくれるもん」

その本意にとくに気が付き、そのまま受け入れていた。

「どうせならユーオンの事も守ってくれた方が私は嬉しいし。

ユーオンも『銀色』さんも、何かいつも危なっかしいんだもん」

だから妹分は、少年の無事が本当に嬉しいようだった。

「……………」

その妹分の、あまりに嬉しそうな顔付きに。

理由のわからない混乱だけが残った少年は、思わず……—

「なあ、ラピス……」

「——？」

「オレ……思ってた以上にろくでもないっぽい」

日頃は毒のある物言いをする、しかしそれが優しさでもある妹分に。困ったような笑みを浮かべつつ、少年は口にしてきた。

「元々オレがこうしてる事自体、ろくでもない事なんだけど。記憶が無いのも、多分都合が悪いからなんだ」

「ふーん……なるほど、ありそうな話だよなー？」

並んで歩みを続けながら、あっさり妹分は受け流してくれる。だから少年も気楽に、困り笑いを浮かべ続ける。

「……いいのかな。そんなんでずっと、ここにいて」

何故ここで今、そうした疑問が浮かぶのかも思い出せずに。

今日は一旦、伊勢の何処かで宿をとると決めた養父に続き、人里に続く閑静な山道を歩きながら、少年は俯いた。

妹分はそんな少年に——穏やかに微笑んだまま、

「ユーオンは……ろくでもない奴じゃないヒトになりたいの？」

曖昧なままの少年に無理に形を与えるように、厳しさを返す。

「……………」

それが例え、ヒトにとどめを刺しかねない鋭さであっても……

この妹分は真摯に、その深い青の目でいつも核心を探す。

その毒をこそ求めて、この話を始めた少年を知るように。

「いいや……そうなるなんて、思った事はないと思う」

少年は苦笑いながら、あくまで気楽な口調のまま、

「でも、あんまりろくでもないなら、いない方がいいとは思う」

微笑み続けてくれる妹分に応えるように、自然にそう笑った。

「そっかあ。ユーオンは厳しいねえ、本当に」

妹分はそこで初めて、軽く考えるような目で両腕を組んでいた。

「厳しい……のか？」

「だって、ろくでもなかったら生きてちゃダメって言ってるよ？」

そうなるのか？ とポカンとする少年に、妹分は明るく笑う。

「自分の事限定なんだろうけど。それ、おかしな話だよねえ。

世の中、ろくでもないヒトなんて腐る程いるのに」

けらけら楽しそうな妹分に、今度は少年が軽く考え込んだ。

「……ろくでもなさにも、程度があるだろ？」

そして何とか、それだけ言い返した少年に、

「うん。ユーオンは私より、軽症だと思うよ」

これまたあっさりとして、しかし妹分は半ば本気で——そんな事を

笑って口にしていた。

「……………」

その深い青の目の危うさは確かに、妹分が少年より差し迫って

いる事を……かなり前から気付いていた少年は息を飲み、

「どの道どっちも重症だったら、ホント傍迷惑だね♪」

しかしすぐ普段通りに戻った妹分に、咄嗟に二の句が告げず。

「ま、その辺りはおとーさん達の教育に、今後を期待しようよ」

そうして、それは養父母の責任と丸投げした妹分は、

「自分で自分を何とかするって。まだ私達、思わなくていいよ」

「……………」

ポカンとしたままの少年に、その時だけは心から穏やかに——

前に行く養父の後ろ姿を見ながら、幸せそうに笑ったのだった。

それがかつて、瑠璃色の髪の幼い少女を救った……それでも、

叶わない希みだったとしても。

待ち続けていた者達が、一人でも帰ってきてくれたためか。

そうしていくらか落ち着いた様子の妹分は、茜色の髪の少女を

抱えながら前に行く養父を捕まえ、少女と二人で体験してきた

道中について楽しげに語り始めていた。

「……………」

最早、有り得なかった幻の世界で会った赤い天使が、実際に

現れた衝撃など何処吹く風といった様子の妹分に。

その姿に少年は……オヤって凄いなと何となく思い。

「……………」

そして自身も、未だに大きな混乱の中にあるわりには。大きな

荷物が一つ下ろせたような安堵感を隠す事が出来なかった。

「レイアスがいるなら……大丈夫、かな」

少なくとも今——薄氷に乗ったような平穏であっても、それが

続いていくのなら……それも一つの答えであるのだと。

少なくともそれを、この六年は続けてきたはずの誰か達に、

素直にそう安堵した金色の髪の少年だった。

伊勢の地で風流な宿を見つけ、広い部屋に案内された頃に。

ようやく茜色の髪の少女が目を覚ますと、少女には想定外の人物の存在に、寝起きから奇声をあげる事になった。

「何で、何でレイアス！？ あたし絶対帰らないからね！？」

「相変わらず元気だな、水華……大事無さそうで何よりだ」

本当にただ眠っていただけらしい少女にも、養父は安心したようであり。占い師の事は既に飛竜単体で京都に送ったため、三人もの子供を一人で連れる若い父といった感じで、心なしか宿の女将の眼差しも何処か温かいのだった。

「へえ……じゃあ『地』に行くには世界の何処かの聖地から、聖地の力を借りて飛べばいいってこと？」

和室の座卓を囲み、妹分が入れてくれたお茶を飲みながら、一行は浴衣姿で妙にまったりと、今後について話を進める。

「水華の羽なら、一度位置感覚を覚えれば何処の聖地からでも行けるだろうな。でも最初は、一番近い聖地から飛び立つのにこした事はない」

元々聖地とは、神もしくは天上の鳥に強い力を与える場であり。飛行能力を持つ化け物より、単体では飛ぶ力は弱い天の民が、地上と天を行き来するために必要な地という事だった。

『火の島』から飛竜を使えば、ラピスとユーオンも二人とも連れていける。しばらくはそうして揃って動いた方がいい」

「火の島って何、おとーさん？ そんなの世界地図にあった？」  
世界中を回った経験があるにも関わらず、首を傾げる妹分に、少年も何となくうんうんと頷く。

「ああ。これは天の民か、ディアルス王家しか知らない事だし、なるべく口外しないように気を付けてくれ」

「何々？ 何その美味しそうな秘密って？」

興味津々で身を乗り出す茜色の髪の少女に、少しだけ不安げに養父は苦笑する。

「ディアルス上空には、かつて南の島に存在していたはずの、南の聖地が常に漂っているんだ。ちようど『地』がこの世界で、ジパングを中心に、天を回りながら漂っているように」

「聖地が……空を漂うのか？」

「ディアルスではそれは、元々は凍土だった国の太陽として、しばらく国を温めてくれた天空の島として伝説が残るらしい。陽の下の凍土ディアルス……ディアルスの前身である国の名前もそこから来てるというからな」

今ではそこは、かつて灼熱の大地と言われた熱も冷めやり、ただ時空要塞のような神殿が、無人で漂うだけというが。

「ディアルスから火の島までは、ワープゲートで繋がってる。他の聖地は、ここジパングの伊勢と北の島の遺跡以外は、もう地の底か湖の底というから……まずはディアルスに向かって、そこから火の島に行くのが無難だろう」

それが最も確実な道筋と、世界を飛び回る男の言に、この場で異論を差し挟む子供はいなかった。

一通りそうして行動の方針が決まった後で。

何やら養父は、少年が持っていた沢山のお札を見せてくれと、物珍しそうに一つ一つを眺め、妙に感心しているのだった。

「こっちの赤っぽいのは、五行を三枚ずつ書いてくれたのか。紫っぽいのは——『来るな』『見るな』『黙れ』の念が物凄く強いな……結界、隠術、力封じが基本かな。使い方によっても応用が利きそうだ」

「……………」

少年もおぼろげに感じてはいたものの、養父は実に具体的に、一つ一つのお札の力を見極めていく。

「この暗い青は、純粋な地の力だな。固体の震動、粉碎、色々使えそうだが……もしや青の守護者の直筆じゃないか？」

「……多分。レイアスはヨリヤの事、知ってるのか？」

「直接会った事はないが、今代の守護者の事は一応把握してる。

黒の守護者なんかは、俺の仲間が可愛がってたけど……」

よりによつてその守護者が魔王側に与するとはと、養父も苦い顔をするのだった。

「それにしてもこの黒い札……一枚しかないが、物凄い力だな」

「あ。多分それ、ユウヤのだ」

守護者の子供だと説明する少年に、納得したように養父は頷く。

「まさにブラックホールと言ったところか……何でも潰したり無効に出来そうな力だけど、使い所に注意しろよ」

「うん。一枚しかないから大切にしろよ」

そしてと。残った最後の、一番沢山の枚数を占めているお札に、養父は微笑ましそうにする。

「凄いな。一つ一つに闘気がこもる札なんて初めて見たよ」

「……ジュンまで何で、書いてくれたんだろう？」

ただ「闘志」とだけ書かれた素朴なそれは、術師が書いたものではないため、大した力は無いと言うが。ある剣士の少年——花の御所の公家の長男が書いた札は、同じく剣士である少年にとって、自身の力を非常に乗せやすい仕様になっていた。

「ユーオンの役に立つならって奮起してくれたんじゃないか？一番多く書いてあるし、凄く負けず嫌いな子の気がするけどな」

「……………」

「まあでも、ヒトの力とはいえ、使うことだけでもユーオンはいくらか体力を消耗するはずだ。見た所せいぜいどのお札でも、合わせて一日五枚以内には抑えた方がいい」

「……最高でどれくらい？」

「七枚は絶対超えるな。唯一例外は、この赤の『水』の札かな」

残り二枚の『水』の札だが、少年にはそれが命綱であろうと、養父は硬く念を押す。

「そうやって一通り、少年の持つお札に助言をくれた養父に、

「レイアスって……凄かったんだな」

しみじみと言った少年に、何だそれと苦笑う養父もしみじみと、

「今度帰ったら、花の御所にお札に行かないとな」

申し訳なさそうでありながらも、何処か嬉しげにそう口にして。お札の束をしばらく見つめていたのだった。

\*

その宿に泊まる前夜、寝不足だったという茜色の髪の少女が。夜中に起き出した少年を不審に思い、しばらくしてから後を追っていた事を、金色の髪の少年は知らなかった。

「アンタさ。普段は何処まで、アンタの時の記憶残ってるわけ？」  
「……………」

小さな庭の一角の岩に座った銀色の髪の少年に、縁側から顔を出した少女は淡々と尋ねる。

「大体の時はアイツは、事実だけ覚えてて、理由や途中経過がわからないって言うけど。何かそれ——アンタに都合良過ぎる気がするのよね」

その上事実そのものも、金色の髪の少年は覚えていない事があると、翌朝に少女は目の当たりにする事になる。

何も答えない少年に、少女は呆れたように息をつくとき、  
「何でアンタは……あたしにあの吸血姫と戦うなってアイツに言わせたわけ？」  
「……………」

この銀色の髪の少年を追ってきた一番の理由を口にして。後は少年の答えを待つように、黙り込んだ茜色の髪の少女だった。

金色の髪の少年は、実際のところ——

こうして夜間、意識のない時に変わった時の事は覚えにくく、様々な夢についても印象の強いシーンしか思い出せずにいた。

日中、意識がある時に銀色の髪に変わると、基本的に自身の言動と行動だけ覚えており、外界の事や自身の思考はわからず。

茜色の髪の少女と白銀の髪の神父の事は、御所の偵察者から聞いた話を合わせ、ある程度わかっている部分があったが。

赤い天使の人形が自身と強い関わりを持っている事、しかしそれを自身が思い出せない事……現在の大きな混乱の中では、それを辛うじて把握している形だった。

そうして把握出来る事は、銀色の髪の少年が言葉にする程に強く思った事に限られ、その意味で調整可能ではあった。

そして銀色の髪の少年は、言葉にするのは苦手な方であり。翌日のように神父と少女の関わりや、赤い天使が少年の妹と、はつきり告げられた事以外は曖昧なイメージのままだった。

銀色の髪の少年は無表情で躊躇いつつ、それでも答えた方が  
良い事には、なるべく誠実な答えを探して少女へと返す。

「……………あんたとあの女は、間違いなく……同じ血を持ってる」  
「……………」

「何でなのかは、俺にはわからない。でもそれだけじゃなくて……あの女の持つてる武器とは、あんたは相性が悪い」

それ以上具体的には言えずに、それだけ口にした少年だった。



「ねーねー。ユーオンはもう、温泉行った？」

「……………へ？」

突然浴衣姿の妹分から声をかけられ、前日と同じように夜風に当たりに外に出ていた少年は、驚いたように振り返った。

「おとーさんと水華も行ってきたみたいだよ？ こんないい宿、

滅多に泊まれる事ないんだから、行ってこないの？」

にこにこご機嫌な妹分は、白い生地に川のような波打模様の散在する浴衣を身に着け。宿の庭の背もたれの無い木の椅子に座った、金色の髪の少年の隣にちょこんと座る。

「……………オレは別に、温泉とかそんなに興味ないし」

「そーなの？ つまんないのー。人生楽しんだ者勝ちなのに」

「……………」

ただ啞然と、目を丸くして妹分を見る少年に関わらず、妹分はご機嫌に話を続ける。

「あーあー、残念。これで後おかーさんがいれば、凄く楽しい思い出になっただろうになあ」

「……………」

「でもおとーさんは帰ってきたし。それなら後は水華が無事に、黄の守護者とかになっちゃえば、もう心配事はないのかな？」

「……………」

そこで何故か少年はじーっと……………危うげに明るい妹分の姿を、真面目な顔付きで見つめ続ける。

少年の頭をふと、そこで過ぎっていたのは、

—ラピ、何か様子が変な事とかはない？—

術師の家系であり、鋭い霊的な感覚を持った赤い髪の少女の、更に天才的と言われた従弟の言葉で。

—ラピのね……………お母さんの霊がうろついてたって言うの—

「……………」

今この瑠璃色の髪の少女になれば……………それを訊けると。

混乱しつつも冷静に見定めた少年は、これまで躊躇い続けたある問いを口にした。

「……………なあ」

「——？ 何、ユーオン？」

「アフィじゃなくて、ラピスの本当のお母さんって……………どんなヒトだったんだ？」

「私の——本当のお母さん？」

キョトンと少女は、不思議そうな目で少年を見つめながらも。

自ら命を絶ったというその女性について——あまりに明るく、屈託のない調子で少年に答えていた。

「何だろーねえ……………私も六歳までのことだから、もうほとんど

覚えてないけど……………良く言えば可愛い、悪く言えば子供っぽい感じのヒトだった気がするなあ」

「……………？」

真摯にいつも核心を探す深い青の目は、少女自らについても例外ではないと……………その嘆きをあつさり少女は晒す。

「もうお父さんの事が大好き過ぎて、お父さんが可愛がつてる私にまで焼き餅焼く程、子供っぽいお母さんだったよ。多分、お母さんには娘じゃなくて、お父さん似の息子がいた方が幸せだったんじゃないかな？」

「……………」

「でも別に、私のことちゃんと育ててくれてたし、体術だって教えてくれたし。とにかく悪気のないヒトだったから、きつと……私のも、大切に思ってくれてたんだと思うよ」

それは紛れもなく、瑠璃色の髪の少女の嘆きと諦めであり……連れ合いをなくした後に、正気を失い自ら命を絶った、純粹と言えば純粹な女性への少女の答えだった。

あつげらかとそんな話をした少女は、少年に笑いかける。

「でもそんな事きいて、ユーオンはどーするの？」

「……………」

「ユーオンだって何だか一杯一杯なのに。私のことそんなに、心配してる場合じゃないんじゃないの？」

まるで少女は、少年が何故そんな事を尋ねたかわかっているように……逆に少年を心配するように綺麗に微笑んでおり。

少年はそんな少女に対し、一度だけ小さく溜息をつく。

「それで……あんたはいつたい、誰なんだ？」

少女の様子がおかしいというよりも。

少女でないのに少女の姿をした、おかしな誰かの存在に――

少年は怪訝な顔をしつつ、淡々とそう尋ねたのだった。

いやだなあと。瑠璃色の髪の少女は少年に明るく笑いかける。

「私はユーオンの『妹』だよ――ユーオンには多分そうとしか、見えないはずだけどな？」

「……………？」

「でもそうだね。ホントの妹さんの記憶はもらっちゃったから、もうその姿には見えないだろうし。悪い事したかなと思うけど……でもユーオンの妹は、私だけで充分だと思うしなあ」

あくまで悪意の無いその少女は、瑠璃色の髪の少女の声と姿をしながら。何故か金色の髪の少年の目にはもう一つ、うつすら重なつて観える誰かの姿があつた。

「……………え……………？」

誰かはそつと、今そこにいる少女を少しだけ上書きすると。

少年からその混乱を奪うために、白く綺麗な微笑みを見せる。

「わたしのことはもういいから……ラピスを守ってあげて？」

そう語りかけてきた、黒い髪で青い目の少女は――つい最近、

少年が目にしたはずの誰かとよく似ているのに。

目の前の誰かを観ようとするとするそばから、少年からその誰かの情報はぼろぼろと零れ落ちていく。

「何処にも行ったらやだよ――……………ユーオン」

嘩然としたまま白い少女を見つめる少年の顔に、少女は拙く両手をかけて——自身の深く青い目をまっすぐに見させる。

その姿は最早、黒い髪の少女の影を消し去り、ただ白く笑う瑠璃色の髪の少女だけを映して。

「ずっとここにいる。ラピスのそばにいるって、約束したよね？」

「……………」

「ラピスの敵をユーオンが殺す——そうしてくればラピスもずっと、ここにいられるんだよ」

その少女には少なくとも一人。

少女の存在を脅かす誰かがいると、白い少女は訴えかける。

「そのために邪魔な心があるなら……」

ふっと少女は、白金に光る青い目で悪意の欠片もなく微笑む。

「私が全部……忘れさせてあげるから」

既にその敵を知っている少年の、迷いも知る白い少女は——

少女の目から目を離せない少年に、その光を写すように……。

「何なんだ、いったいあんたは」

ひょいっと。

あまりにあっさり、『力』を見る眼を持ったその男は軽々と、白い少女を片手で持ち上げていた——何と少女の襟首を掴んで。

「……へ？」

金色の髪の少年は、ようやくそこで我に返り、

「あれれえー。おとーさん、どうしてここに？」

首根っこを掴まれ宙ぶらりんという、ともすれば虐待な扱いを受けながら、瑠璃色の髪の少女は丸まって明るく笑う。

「誰がおとーさんだ。俺は神獣を子供に持った覚えはない」

対する灰色の目の養父は、至って無愛想に少女に応対する。

「ヒドいなあ、少なくとも私、獣じゃないんだけどなー？」

「違うのか。どう見てもラピスの神獣が呼んだ幻だろ、あんた」

「やだなあ、ホントにイイ眼してるんだから、おとーさんてば」

「へ……？」

呆気にとられる少年の前で、少女はふふと明るく笑うと、

「私が誰かヒントはあげられないけど……せめて『白夜』って

呼んでほしいな？」

そうして唐突にその白い姿は薄まっていき。茫然としたままの

少年の前で、完全に消えていった白い少女だった。

「……あれ……何？」

「さあな？ 確かなのは、本物のラピスはもうとっくに部屋で

寝てる事くらいだ。寝る前に気休めに笛を吹いてたが……」

ぼんぼんと養父は、至って平静な様子で少年の頭を撫で叩き、

「昔からたまにあるんだ。あまり深く考えないでいい」

さらりと聞き捨てならない事を残し、場を後にした灰色の目の養父に。金色の髪の少年はひたすらポカンとし続けるのだった。

そうした感じで、些細な異状には見舞われつつも。

伊勢を出た後は至ってスムーズに、西の大陸の北東端の大国、ディアルスに一行は辿り着いていた。

「飛竜があると、洒落にならないくらい早いな……」

「そーだよー。港までひとつ飛び！ 後は船に乗るだけだもん」

「前はこんなに、レイアスが実体のままで使えなかったでしょ？」

何だかんだでまだ進歩してんのねー、やるなあレイアスも」

わいわいと賑やかな子供達を連れ、しかしその年齢の子供がいるように見えない若い養父は、よく使う宿に子供達を押入れ、一人王城へ向かう旨を告げる。

「火の島は極秘扱いだから、立ち入るにも許可がある方がいい。

少し日数があると思うから、くれぐれも単独行動しない事と、あまりひと気の無い所には行くなよ」

魔の者は天使の管轄、人間の多い所の戦いは避ける事が多く、

「お出かけはしてもいいの？ おとーさん」

「ああ。毎日夜には帰るし、何かあればPHSに連絡してくれ」

この国程度の広さ、王城程度の距離であれば、駆けつけるのは造作も無いと。飛竜を駆るようになった男は穏やかに笑った。

「相変わらず……ここも独特な雰囲気だよな、本当に」

近代的な鉄筋構造物中心の、商業都市が多い西の大陸にしては、石造りの建物が多く、古き面影を残す国がディアルスであり。「さすがにジパング程じゃないけどねえ。別の意味で神秘的？」

「実際神秘でしょ。神暦の頃から保たれてる構造物があるって南で習ったじゃない？」

「水華ってば本当に、どんな状態の時も、世界学の授業だけはしっかり聞いてたもんねえ」

そうして王都で、ひと気の多い場所を気ままに散策していた子供陣だが。しばらくして、瑠璃色の髪の少女が不思議そうに

金色の髪の少年を見つめ、ふと口にした。

「そう言えばユーオン、普通に外出てるけど……最近あんまり引きこもりじゃなくなった？」

「そりゃ……単独行動禁止なんだろう？」

「そうだけど、それなら宿にしようって言いそうだよね、前のユーオンだったら」

やはり首を傾げる妹分に、少しだけ少年は困ったように笑い、「……会いたくない奴はもういないから。外に出てもいいんだ」

「？」

懐からこの国内の住所の書かれたメモを取り出して見ながら、今回は寄るのは難しそうだと、あっさり諦めて懐にしまう。

そしてそのメモをくれた誰かを思い出しながら、少年は、「なあ、ミズカ。万能の宝珠がもしも手に入ったらさ」

「——ん？」

「万能ならその力で……オレの羽、くっつけてよ」

は？ と怪訝な顔の少女に、少年は平和に笑いながら。腰元の剣の柄——そこに巻付けてある、メモの主から預かった蝶型のペンダントをちらりと見て、再び困ったように笑った。

それは初めから……この、誰も自分のことを知らない世界で目を覚ました少年にとって、強く優先すべき事柄であり。

そのために昨秋に家が無人となった後、誰も知らない少年の名前を引き出した占い師を探し、一人家を出て……その後に、花の御所へしばらく身をよせる事になった少年だった。

花の御所で生活する間に、少年はある女と偶然出会う。

—あんたがもし、アイツを殺した事を、後悔してるなら……—  
少年の体の持ち主を殺し、その羽を奪った女がメモの主で。女はただ、形見が欲しくてそうした事を少年は知っていた。  
—アイツの羽をオレに渡してくれ。それがあればもしかしたら……まだアイツは、目を覚ます事が出来るかもしれない—

本当にそれが出来るかどうかはわからないが——

出来る事があるなら、それを見過ごす事は少年には出来ず。それこそ少年が、長い時を待ち続けた理由に他ならなかった。

—俺……—を助きたい……!—

同じように少年が、この世界で約束したいいくつかの事も。

全てはその前提に基づいた……言葉足らずの拙い約束だった。「オレは多分……出来る事がある内は、ずっとここにいますよ」

その占い師の元を訪れた理由。最後の問いを口にする前に。金色の髪の少年は己の実情を、わかっている範囲で説明する。

「オレは……わかりやすく言えば、剣の精霊だと思う」  
「……ほう？」

それは、少年を『花の御所』に引き受けた者——呪術師でまた、『宝珠』の守り手である公家から伝えられた見立てだった。

勘の良い少年には確かに、一番納得出来た解釈であり。

「何でそうなったかはわからない。何も覚えてない」

でも、と。少年は深く深い紫の目に、明らかな憂いを浮かべる。

「この身体は元は妖精だ。それをオレが……オレの本体のこの剣が、剣の精霊にしたんだと思う」

『花の御所』に居候後、着用を始めた袴に下げる——黒い柄に透明の玉を填めた剣を少年は取出し。その剣が仄かに醸し出す青白い光に、占い師は成る程と難しい顔で頷く。

「妖精たる羽も無しに、自我を保っていられるのはそのためか」それが少年が、妖精でない理由とみなしていた彼女は、

「今やお主は……その自我を剣に依存した、『剣の精霊』」しかしと、それでも納得がいかないように首を傾げる。

「その躰自体がそもそも、『刃の妖精』であったようだがね？」  
「……そうなんだ。だからかな——オレが勝手に動かせるのは」

淡々と少年は、その身の呪われた真実を、躊躇いなく口にする。

「オレは、この妖精が死んだ時から、勝手に身体を動かしてる……この剣の中にいる誰かなんだけど」

その正体は、全く覚えていないとしても。

それが呪われた沙汰である事は初めから少年は知っており、だから少年は——そこに来た目的の問いを笑って口にする。

「アンタならわかるか？ この妖精は——」  
「……………」

「もう一度この身体で。コイツが目を覚ます事、出来るのかな？」  
もしもそれが、可能であるなら。『剣の中の誰か』は躊躇なく、『刃の妖精』にその身を返すと——

穏やか過ぎる微笑みで言う少年に、占い師は眉をひそめた。

「それは……今のお主の死を意味するぞ？」

「そうかな？ オレは元々、ただの剣だし」

それが元の状態に戻るだけだと、惜しげもなく少年は微笑む。

「戻りたいわけじゃないけど。それなら、戻らなきゃダメだろ」

誰かの生を犠牲にしてまで、自らの活動を続ける選択肢はない。

少年にとつて、それはわかりきった答えだった。

「……………」

自らの身を『妖』としてまで、その生を繋いできた占い師は、潔良過ぎる少年の答えにやはり不服そうであり。

「その妖精が消えたところで——惜しむ者は、あまりおらぬが」  
妖精という種族はそうした、基本的に情の薄い生態である事を、知っているからというだけではなく。

「お主が消えれば……多くの者を、哀しみが襲うぞ」

今の少年の周囲にいる者を、かなりの部分見知っている彼女は、半ば以上私情でそれを少年に伝える。

「……………」

少年はその占い師の厳しい目線に、ただ不思議そうに首を傾げ。

「……………」

これ以上は無駄と知った占い師は、黙ってそのカードを切り、現れた予想通りの結果に溜息をついた。

「答えを言うなら。その妖精から失われた『羽』さえ取戻し、何らかの方法で再び繋ぐことが出来るなら……それは可能じゃ」  
ふーんと、淡々とした表情のまま、頷く少年にしかし。

「しかし『羽』が、何処にあるかはわからぬし——どうすれば繋げられるか。それは今のわしには言えん」

あれまと。少年は紫の目を丸くして占い師に尋ねる。

「そっちは、わかってるのに？」

何で隠すの？ と、勘の良さでまた不思議そうにする少年を、しつと占い師は追い出しにかかる。

「これ以上は追加料金を請求するぞ。さ、もう帰った帰った」

そうして具体的な事は教えてくれなかった占い師だが。

しかし少年にとつては、その『羽』がまだ消えていない事がわかっただけで、現状把握としては及第点であり。

「そっか。じゃ、頑張って自分で探すよ」

その答えを当たり前のように告げて笑い。占い小屋を後にした『剣の中の誰か』だった。

「ユーオン……どーしたの？」

「——え？」

ふと我に返ると、瑠璃色の髪の毛の妹分が少年をじつと見ていた。

「最近何か、様子変だよ？ 前より更に小食になっちゃったし

……夜もずっと、あんまり眠れてないんじゃないの？」

珍しく笑顔でない妹分は、深刻な顔でもないが。そんな時こそ

この少女は、本来の姿に近いと少年は無意識に知っていた。

「何でもないよ。ちよつと考え事してただけだ」

「……でも、あんまり無理に、私達に付き合わなくていいよ？」

妹分は深い青の目に、まっすぐに少年を映して口にする。

「何か私……ずっとユーオンに、無理させてる気がして」

「何で？ 付き合わされてるのはラピスだろ？ 狙われたのは

オレとミズカなんだからさ」

茜色の髪の毛の少女は、少し離れた武器屋を物色しており、妹分と

少年はそれを遠目に見守った状態であり。

「オレもちよつと、武器屋に行こうか悩んでたんだ。剣の事で、

ずっと気になってた事があるから」

「……そーなの？」

「うん。でも普通の武器屋じゃわかりそうにないし、今はまだ

いいかなって」

少年が気になっていたのはただ一つ——

この宝たる剣の、黒い柄に填まる透明な玉が取り外せるのか。

取り外した時に宝剣の機能はどうなるのか、それだけだった。

「何でここにいるんだろって……何となく、そう思ってた」

石で舗装された道と塀、石造りの民家と市場が、程良い密度で立ち並ぶ周囲を見回し。少年は穏やかに苦笑って言う。

いつか遠い何処かで——この石ばかりの町に似た灰色の町で。

——あの赤き鎧には未だ、あの娘が宿っている——

その町のように物憂げな誰かの声を聴いた時、確かに少年は。

自身に出来る事があると、その時はわかっていたはずだった。

——方途はわからぬ——が。あの娘の事も……私は救いたい——

最早自らにそれは叶わぬと、銀色の髪の毛の少年に望みを託した

……そして少年に生き行く願いを与えた声が、確かに響くのに。

「大切な理由があったはずなのに……それを思い出せなくて。

でもそれなら、オレがここにいる意味はもうないんだ」

「……………」

それが今悩んでいた、透明な玉に関わる事だと……それだけを待ち続けたはずの少年は——まるで全てを失ったかのように。

私も——と。

不意に瑠璃色の髪の毛の少女は、何処か遠い目をして呟いていた。

「大切な事を忘れてること……前は、覚えてたはずなのに……」

「…………？」

振り返った不思議そうな目の少年に、妹分はううんと、珍しく

苦笑う顔で。何でもないよ、少年と同じように返したのだった。

＊

「いいか？ くれぐれも今回は、潜入だけが目的だからな」

ディアルス王城で『火の島』へ立ち入り許可の手続きをとり、これまでの仕事の報告もしてきたらしい灰色の目の養父は。

『火の島』——ひいては『地』へ行く目的について、同行の子供達に何度も同じ事を言い聞かせる。

「おそらく宝珠を失ってからの『地』は魔の縄張りを見ていい。俺も行き方を知ってるだけで、実際に『地』に行った事はないから何とも言えないが……」

特に茜色の髪の少女には、口を酸っぱくして、

「水華がどうすれば守護者として認められるのかも、梅さんが合流してからでないとわからないだろうし。だからあくまで、それまでは『地』の現状を知るための潜入に止める」

「ええー。レイアス何でそんな弱気なのよー」

ともすればそのまま勢いで行動しかねない少女に、頑強な顔ではつきり駄目だと言い付けるのだった。

「敵の目的が全くわからないんだ。梅さんは黄の宝珠狙いだと言うが……それなら何故、水華はともかく、黒の守護者や北の四天王まで必要なかわからないだろう」

「……………」

何らかの『資格者』として狙われていると、金色の髪の少年が灰色の目の男に伝えたのはその三人だったが、

「共通点は全員が魔の気と、『水』の力を持つ事くらいだがな。実際姿を見れば、違う事もわかるかもしれないが……」

「……レイアスはミズカ以外、直接には会ってないしな」

宝珠とは基本的に、地水火風空の五大要素を司るものであり、ただしその色は他に司る五行の気に左右され、

「黄の宝珠は五行では『土』、五大要素では『空』だ。水華は確かに守護者になれるが、他の『水』の奴は何で関わるんだ？」  
様々な力の一つの身に持った茜色の髪の少女が、『水』と『火』寄りの強い力を持ち、更に黄の守護者たり得る『空』の因子を持つ事を……義理の兄である養父は、以前から知っていたが。金色の髪の少年は、何故か複雑そうな紫の目を向ける。

金色の髪の少年が覚えているのは、限られた事柄であり。

自身は『水』の家系と口にした白銀の髪の神父も、後一人の『資格者』——茜色の髪の少女の兄だと、その言葉を思い出す事は出来なかった少年であっても。

「わたくしの主は、悪しき『魔』へ変貌してしまつたのです——花の御所にいた頃に、偵察者の女から聞いた話は覚えており、——主は天に悪魔を呼び込み、自らの妹を手にかけて、この二百年、行方が知れない状態となりました——」

それが黄の守護者の家系で、自身の前に現れた神父である事はわかっており。その事変で死んだ悪魔の妹が、占い師が話した少女の羽の持ち主であるとも既に関連付けていたが。

しかしそれを口にする気には、どうしてもなれずにいた。



ところで現在、一行がそうして話をしている場所と言えば。

「それにしても、『地』が一番近づく時間って、いつ頃なの？」

既に『火の島』入りをしていた一行は、その一角で携帯用のテントを張って、一夜が明けかかったところだった。

「まだもう少しかかるな。今の時期だと夜が明けてから後少しらしいから、完全に陽が出たら飛んでみよう」

『火の島』というその時空聖地——正方形の平らな地表の、辺縁に太く長い石の円柱が数メートルおきに立つ、大きな石の建造物が空に浮かんだような、ごく小さな天空の島は。

島の中央には同じように正方形で石柱に囲まれ、外壁もある神殿が存在する……しかし神殿以外は石床と、島に来るためのワープゲートの泉しかない、風通しの良い寂しい場所だった。「それなら退屈だし、神殿探索しない？ そんなに広くないし」「いや、仮にも聖地だからな。何があるかわからない」

探索はまだ今度と、養父は真面目くさって言う。

「そうだよ、水華。北の島に行った時も、大変だったじゃない？」年の暮れに北の島——そこにある四天王の城と、聖地に足を踏み入れていたらしい妹分は、聖地内に閉じ込められるというトラブルがあったと語った。

「その頃は、怖いヒト達はいなかったけど……」

今は敵の根城と、占い師が言う場所を思う妹分の顔は浮かず。その北の聖地から敵が来る可能性を、少年も思っていた。

三人の子供に気を配りながら行動する養父も、あまり余裕は無い様子であり。一行の中では唯一、

「それにしても本当、聖地って凄いー。伊勢の時も思ったけど、これなら何でも出来そう♪」

最早妹分の目にも見える程、少女の羽は光を持っていきいきとその背にあり。茜色の髪の少女は絶対好調という様子だった。

「本当にここは聖の気しかないからな」

自然の力をメインとする、霊気が基本の霊獣族らしい養父は、後ろ盾が全く無いと憂い気であり、

「水華も黒の杖は、威力が落ちて力の消耗も早いはずだから、注意しろよ」

「わかってるってー。逆に白のが絶対好調なんだから、こつちを使わない手はないでしょ」

魔の気と聖の気を分けて制御する魔法杖は、魔の気の方は特に弱まるはずと言う事で、少女もお蔵入りにするつもりらしい。

「……」

きよろきよろ辺りを見回す少年は——何故かどちらかと言えば好調であり。その少年の様子に養父も不思議そうにする。

「ユーオンも精霊か妖精だから、霊気か妖気持ちのはずなのに……神気も持つてるんだな、ユーオンは」

「へ？」

聖地が強めるのはそうして、メインが聖の気、いくらか神の気という事であり。極珍しいと言われる気を持つ少年を、養父は灰色の目でじっと見つめるのだった。

私はホントに足手まといだろうなー、と。

その時空聖地を飛び立つ前、人間である瑠璃色の髪の少女は、  
憂い気に口にした。

「夜になれば、一回は笛も使う事も出来るけど……使った時に  
何が起るかは、私もいつもわからないんだよね」

最近はその中でも、悪い事から守ってくれるようにと、毎晩笛を  
吹いていたという妹分は、

「でも何でだろう。そうするようにしてから、私、忘れっぽく  
なった気がする」

「……………」

首を傾げて憂い気にする姿は、普段と違い心許なげで。

そう言えば自分も忘れっぽくなった気がする、同じように  
首を傾げた少年に、妹分は苦笑いを見せた。

「ユーオンも何か不調だし。早く心配事、無くなるといいよね」

伊勢の宿に泊まった時に、養父曰く幻という、謎の瑠璃色の  
髪の少女に出会っていた少年は。養父が物憂げに、

「あれの正体は俺も気になってるんだが、見えてるはずなのに  
……いつもそれを思い出せないんだ」

その養女を引き取った頃は度々現れたという謎の幻は、近年は  
少なくなっていたのが。ここ最近また見かけるようになったと、  
溜息をついて言った事は覚えていた。

「多分——そういう性質を持った何かなんだろうな」

その謎の幻の出現はおそらく——瑠璃色の髪の少女の不調を  
表すのだと、少年もすぐわかりはしたのだが。

「ユーオンも昔の事とか大事なこと、早く思い出せるといいね」  
「……ラピス？」

そうやって困ったように微笑む妹分の深い青の目は……確かに  
澁みなく、まっすぐに少年の事を見つめており、

「もしもそれが辛い事でも……ずっとそれから逃げる事が、  
私はしんどいと思うよ」

それが本来、この瑠璃色の髪の少女が望む在り方であるのだと。

養父が帰って以来、こうした表情を見せるようになってきた  
妹分は、ただ少年が心配というように肩を竦める。

「私も迷ってばかりだから、ヒトの事は言えないと思うけど。  
でも——この先笛が使えなくなったら、さすがにみんなと……  
おとーさん達と一緒にいるのは、諦めようと思ってるんだ」

「……………」

「普段は考えないようにしてたけど、ずっと迷ってた。自分が  
足手まといって事から逃げてきた。だって……そうしないと、  
私は独りになっちゃうから」

けれどと、妹分は穏やかな顔で笑うと、

「それでユーオンに無理させたって、最近わかったよ。それは  
嫌だから……誰かに無理をさせるなら、私はいなくならないと」  
無意識にPHSの入る腰元の袋を触りながら、そう口にし。

その時の少女の顔が——あまりに何処か儂げだったせいかな。

「そんなの……ラピスが気に病む事じゃないだろ」

淡々と少年は、しかし痛ましげに、その妹分を見つめ返した。

「それはラピスのせいじゃない。オレが勝手に自分で決めて、そうしたいって思った事なんだから」

少年の脳裏にはただ、少し前の白い少女の微笑みが浮かぶ。

「ラピスのそばにいるって、約束したよね？」

「レイアスだってアフィだって……ツグミやクヌギ達だって。

ラピスにそうしてほしいなんて、誰も思っていない」

弱小な人間である身を足手まといと呼び、いつか彼らの前から消えるという少女を——少年はただ、引き止めるように。

「ラピスの敵を殺してくれれば、ここにいられるんだよ——」

「ラピスがそうしたいなら、誰も止める事は出来ないけど……」

独りが嫌だって、思っちゃいけないのか？」

「……………」

少女の深い青の目に映る、誰も知らない少年への罰——

少年が本来在った場所へは二度と戻れず。大切なはずだった

誰かに近い誰かはいても……それは最早、少年の知るものでも、

少年を知るものでもない永遠のすれ違い。

「出来る事がもしもあるなら……オレはラピスの力になりたい」

「ユーオン……」

「でも……ラピスが迷ってる気持ちも、オレはわかる気がする」  
それは結局——どちらを選ぼうと辛い道であると、少年はただ、

目を伏せて言う事しか出来なかった。

「独りも嫌だけど、ここにいても辛いなら……ラピスの敵は……多分ラピスなんだ」

少女には少なくとも一人、少女の存在を脅かす者がいて——

その迷いをもしも断ちたいのなら……少女がそれを望むのなら。

その時少年は、ある者を殺さなければいけないと知っていた。

「……そうだね、本当に」

瑠璃色の髪の少女は少年から目を逸らし、目の空を見上げる。

「水華なら多分、一緒にいても大丈夫な気がするけど。水華は嫌がるだろうなあ」

少し安らいだ顔で笑う少女に、少年もそこで少しほっとする。

「そーだよな。何かあればすぐにも見捨てて逃げそうだしな」

あの茜色の髪の少女については、何故か妹分も、少年のように背中を預けるどころか寄りかかる事が出来るのだろうか。

同じ思いを持った彼らは、互いに困ったように笑った。

「それがいいんだろーね、私もユーオンも」

その迷いは続いていくとしても。瑠璃色の髪の少女は確かに、そこでは平和に——幸せそうな顔で、空を見ていたのだった。

\*

最近、『銀色』が全然現れないと。

飛竜の背に乗り、辿り着いた天空の聖地——『地』の上空を回りながら、思い出したように妹分は口にした。

「おとーさんが帰って、危ない事が減ったからかもだけど……ユーオンが強くなったなら、もう『銀色』さんは出てこなくなるのかな？」

「そりゃないんじゃない？ コイツ当分、銀には勝てないわよ」飛竜の隣で滞空する茜色の髪の少女は、ヒト一人は運べそうなくらい余裕があるらしく、無意味にくるくると空中を回る。

「水華。気配封じの調子はどうだ？」

「上々。ちよつとあたしの気が強くて隠し難いけど、それは自分の事だから何とかなるし」

白い杖を片手に、魔法で一行の存在を少女に隠してもらおうのが、この潜入作戦の基本だった。

「ユーオンの方はどうだ？」

「……うん。多分使えてると思う」

更には少年にも、養父曰く『見るな』という念のこもった札を隠行の術として使わせ、一行はその島……古より五つの宝珠を収める祭壇の『地』へ降り立った。

全体面積はディアルスと大きく変わらない、真円のその島は。

「……何か何処となく、ディアルスと似てない？」

茜色の髪の少女が呟く通り、その白い島は石の構造物が基本で、小さな四角い家々が散在する他には森が多く。

「これも聖地の神殿と同じで、古代の遺物なのかもしれない。だからここまで形が残ってるのか」

戦禍の痕か崩れ落ちた家も多く、荒廃した空気は漂うもの……それでもこのまま、すぐにもヒトが住めそうな街並みに、灰色の目の養父も知らず嘆息していたようだった。

一行が降り立った場所は、『火の島』から一番近い島の西側であり、『黄輝の宝珠』はおそらく島の中央にあるはずだと、養父は悩ましげに言った。

「陸路では多分、片道半日といったところだ。飛竜は目立つし力も無駄遣い出来ない。それでもどうしても行ってみたいか？」  
「当たり前じゃない！ あわよくばそのまま宝珠ゲットだし！」  
「却下。潜入だってあれだけ言っただろ」

ポカリと少女をこづく男に、少女は不満そうにする。

「俺達以外の、気配を隠した敵もいるかもしれないしな」

「おとーさん、今はここは誰もいないの？」

一度ぐるりと『地』上空を回った養父は、その確認が目的でもあるようだった。

「完全に無人だったが、それでも誰かいた場合、相手も気配を隠してるって事だ。出会ってもいい事は少ないだろうな」

それはほぼ敵と、警戒する目で言う養父に少年も賛成であり。

「万一はぐれたりした時は、合流地点はここにしておく。絶対すぐにここまで戻るんだぞ」

島の西端、『火の島』に一番近いだろう場所で、『火の島』の物より背が低く間隙も広いが、島の周囲を縁どる円柱の一つに、養父は短刀で×印を付けた。

「えー。この間みたいに変な空間に飛ばされた時は？」

「飛ばされる前に、僅かな時間はあるはずだ。何でもいいから派手に力を使って合図してくれ」

そしたらまた自分が見つけて壊すと、淡々と言う。

「ラピスは銃だな。何かあれば躊躇わずに使っていいから」

「うん。今まで通りだよ、おとーさん」

そうした養父の諸注意を一通り見て、少年はつくづく。守るというのは大変な事だと、しみじみ感じたのだった。

本当のところ、彼らはそれだけ——危険かもしれない場所にあって足を踏み入れなければいけない程、差し迫っている。

宝珠の守護者の一人が敵で、魔王の残党を名乗る者に養子と義妹を狙われている……灰色の目の男は当たり前のようにその危機管理を請け負っているが。化け物としての男は、千族では最上級だが、今代の四天王——人間の血を持つ故に特別な力を持った『混血』には及ばず……それを超える、宝珠という力を持った守護者には敵うべくもなく。

「黄の宝珠がないと……ホントにオレ達、まずいんだろな」  
今はただ、黒の守護者の甘さに見逃されている状態だった。

その守護者に対峙したのは、ほとんど『銀色』だったため、金色の髪の少年には相手の思惑はわからなかったが。

——ソール曰く、俺かアラス君が本命らしいですけどね——

守護者の事をお人好しだと称した神父も、守護者自身も——人形使いである幼子の傀儡というなら。その幼子の目的は何か……それだけは今も、金色の髪の時に幼子を観ていない少年はわからないでいた。

「銀は……いつたい、どうしたいんだろ」

相手が誰かわからないまま、確かに銀色の髪の少年は、幼子の操る赤い天使の手をとろうとした事と……その後全く、伊勢の夜のような不審な幻が出た時も、姿を見せなかった事。

少年と『銀色』のずれがそうして段々大きくなっている事は、少年は気が付いていたものの、

「オレは……どうしたいんだろ……」

怖いのはただ——それが決して『ずれ』ではなく。今の少年に、現状が観えていないだけではないかという、その恐れであり。

そんな少年に、現実の厳しさをつきつけるかのように。

森の道を島の中央に向かい、慎重に歩いてきた一行へと……  
無人の島に有り得ないはずの人影が、唐突に襲いかかっていた。

「——!!!」

咄嗟に動いたのは、現状把握に優れた少年——ではなく。  
とにかく飛び込んできた大きな鎌を持つ影が、その黒い刃を  
誰かに届かせる前に、跳び上がった灰色の目の男が鎌ごと影を、  
長剣を振り抜き弾き返した。

「——え！？」

少年はただ驚愕する——その奇襲に気付かなかった自分自身に。

「つてあいつ、何でここが！？」

茜色の髪の少女も驚く声を上げ、空へ弾かれた影の正体を悟る。

「あの人形、魔法だけじゃなく、気配封じもきかないわけ！？」

少女と少年の視線の先、そこには確かに大きな黒い鎌を持つ  
処刑人……赤く幼げな天使の人形が黒い翼で宙に留まり。

赤い天使の攻撃を防ぎ、地に降り立った男は、瑠璃色の髪の  
養女をかばいながら警鐘を発する。

「全員動くな！ 来るぞ！」

森の中という、空からの攻撃には遮蔽物も多い場にも関わらず。  
赤い天使は重力を味方にした力と速さで、黒い刃を力の限りに  
落下しながら振り下ろす。

「ちよつとこいつー！ 反則——！！」

その刃をまたも男が長剣で受け、刃がぶつかった瞬間には剣と  
鎌から飛ぶ力の余波が周囲を襲い、茜色の髪の少女が辛うじて  
それを中和していた。

「生きてないくせに、どっから出てんのこの力！？」

それが生き物であれば、気配で自身も奇襲に気付けたはずと、  
少女は悔しげに赤い天使を見上げる。

魔法が無駄と知っているため、防戦の構えをとる少女の横で  
剣を構える男は、

「あれは『力』の塊だ——媒介は鎧だが核はここに無いな」

だからこそ、『力』に敏感な男は奇襲に気付けたものの、

「それじゃ弱点無しじゃない！ こーいうのつて動く力の源を  
壊さなきゃどーしよーもないでしょ！？」

その人形を止めるには、それなら完膚なきまでに破壊するしか  
ないと——それなのに武器の攻撃も力も通じない赤い天使に、  
男にも少女にも緊張が走った。

「……………」

少年と妹分の前、赤い天使とそんな攻防を交わす男と少女に、  
少年も妹分も立ち尽くすしか出来ず。

「あの速さじゃ……銃も当てられそうにないよ——」

特別、射撃が得意なわけではない妹分はぎゅつと手を握り締め、  
悔しげであり。高速飛行から攻撃に移る事が得意らしき、赤い  
天使の姿に少年は……それでもその天使の事が全くわからず。

「何で……………何も……………」

「——ユーオン？」

——何も観えない。それだけを少年は呪うような声で口にし。  
「なんて……………つかえないヤツ……………」

いつかと同じ……………ただ強い吐き気と痛みをひたすら噛み殺した。

ここに至るまで気が付けなかった——自身の現状把握の不調。その勘の良さは迷いなき時に強く働く事を、迷いだらけの今の少年は、思い至る事すら出来ていなかった。

「このままじゃ埒あかないし！ 人形使いを直接叩かなきゃ、こいつどーにも出来ないわよ、レイアス！」

度々襲い来る疲れ知らずの敵に、少女は当然の結論を告げ、  
「違う。あの鎧を破壊する方法はそれくらいだろう」

そして更には——赤い天使に躊躇なく刃を向ける養父にも、理由のわからない衝撃を受けた少年であり。

——誰かには大切だった事も……次のそいつには関係ない——  
その上何か因縁があるのか、赤い鎧の天使に憎悪すら湛える  
眼の男は、これまでの理性を少し飛ばしたようだった。

「見つかった以上、隠密行動は不要だ——飛竜を預けるから、水華は人形使いを探して叩け」

「おっ♪ そー来なきや！」

気配封じを解除した少女は、枷が一つ減ったと不敵に微笑む。

「深追いするな、無理そうならすぐ合流地点に戻れ。ラピスとユーオンは任せたからな」

「はいはい——ってそれ任せ過ぎ！ 飛竜こっち来るとはいえ、後何人、敵いるかなのに!？」

強力とはいえ義理の妹の当然の抗議に、男は遊びの無い顔で、  
「飛竜の目は俺の目だ。何かあればすぐ合流する、それに——」  
ここにきて男は一つ、確信のあつた事を口にする。

「敵の大半は弱体化してるはずだ。人形が一体しか来ないのはここでは動けないからだろう」

「確かに——あの人形達、魔の気が強い感じだったし」

「黒の宝珠も『黒魔石』と言うくらいだ、この場所では真価は、祭壇の『地』と言えど発揮できない。人形使いに狙いを絞れば敵にダメージを与える事は出来る」

ただしと男は、目前の赤い天使という脅威に、至ってあつさり、

「俺が死んだら飛竜は消える。その時は何が何でも水華の羽で全員逃げてくれ」

「無理だし！ せいぜい一人運べるかどうかだし！」

その可能性は無くは無いと、囷となる事を決めた男は言うが、少女はあくまで不敵さを崩す事はなかった。

「義手だからってナマ言ってるんじゃないわよ。最悪『地』ごとぶっ壊しても人形使いは叩いてやるから、待ってなさい！」

そうして再び現れた飛竜に、茜色の髪の少女は少年と妹分を引つ張るようにして乗り込んでいき。

飛竜の方に斬りかかろうとした赤い天使を、灰色の目の男は当然の如く受け止めて弾く。

「頼んだぞ、水華——！」

そして男と赤い天使を残し、飛び立った少女達と少年だった。

「ユーオン！ 人形使い、何処にいるかわかる！？」

「——え？」

妹分の事だけとにかくかばい、しかし当惑な少年に、飛竜の背で茜色の髪の少女は真面目に少年を見る。

「あいつらも気配隠してて、あたしは見つけられない。アンタそーいうの探すの、得意なんじゃない？」

「……わからない。今は何も——オレにも観えない」

ちつと少女は、舌打ちしながらも何故か嬉しそうに笑うと、

「それなら仕方ないわね……何処行つていーかわからないから、

『黄輝の宝珠』、拌みに行くわよ！」

「——え！？」

「水華、それってもしかして……」

少女はぺしつと背から飛竜の首を叩くと、島の中央へと進路を無理に向けさせる。

「あいつらがそれを止めにくるなら、一石二鳥ってもんでしょ！」

敵を探すのではなく、敵に自らを探させると……実益を決して忘れない少女に、少年は唾然と、妹分は慣れたように緊迫した状況下でも笑った。

「あたしは思う存分暴れるから、ラピはアンタが守つてよ」

「……ああ。そのつもりだけど……」

それでも本当に、敵がもし揃っていた場合は対抗出来るのか。少年の浮かぬ顔付きとは真逆に、少女は理解出来ない程に、楽しげな顔付きをする。

「よーやく一矢報いてやれるチャンスなんだから！ 仕返しは出来る時にするのが鉄則よ！」

これまであまり、少女は思うような戦績をあげられなかったらしく、密かに鬱憤がたまっていたようだった。

「あの無敵人形がなければ、飛竜もいるし、人形使いを叩いてバカ守護者を無力化出来たら他も全員たためる自信あるし」

「……——」

少女が描く勝利の構図は、少女一人ではさすがに有り得ない展開だったが。

それは確かに可能かもしれないと——その構図の一番障害となる相手の、弱味を既に観知っていた少年は声を呑む。

「ユーオン、どーしたの？ 大丈夫？」

黙り込んだ少年を斜め後ろから心配げに、妹分が覗き込み。妹分は少しだけはつとしたように、その姿を見直していた。

「ユーオン……『銀色』さんみたいな顔してるよ？」

「……——」

心なしか、少年の紫の目は何処か色合いが薄まっており。

色はあくまで紫のままでも、今までと違う澱みを持った……無機質で無表情な何かが、目を覚ましたような顔の少年は。

懐から一枚、暗い青に観える札を手に。迷いなく少年はその彼らの……優しさと甘さを利用する事を、そこで決意していた。



『地』の中央と思しき、他より大きな建物の立った場所に、飛竜がやがて着いたその時。

「——げっ、アイツ！」

「——！」

やばい、と茜色の髪の毛の少女は咄嗟に瑠璃色の髪の毛の少女を抱え、飛竜の背から地上に飛び降り。少年も事態には気付いたものの、すぐに飛び降りるには、高度があつたために躊躇し。

地上ではまるで弓をひくように、三日月型の長い得物を——その持ち主たる青銀の髪の毛の誰かが、にこやかに飛竜に向かって構えていた。

「敵機——撃墜ってヤツ？」

その三日月の中心に填まった双角錐型の黒い石から、黒い矢のような暗い光を引出し。まさに矢を放つように、飛竜目がけて誰かはその力を一瞬で撃ち。

「……………！」

飛竜を貫通した黒い光は、それが本来の力であれば、その場で全て飛竜を消し去つただろう——黒の守護者として宝珠の力を使った一撃であり。

貫かれた飛竜は、ヒトを乗せられる存在密度を失い、少年と共に地上に撃ち落とされる事になったが。

「こないだの仕返しだよん。飛竜のにーちゃん？」

少し前に、精魂込めて創つた空間を壊されていた……しかし金色の髪の毛の少年よりもやや幼い、その青銀の髪の毛の吸血鬼は。

——吸血鬼は化けられるんだよ。オレがこの姿であるように——尖った耳と、コウモリのような七つの羽を隠さず、おそらく本来の姿……十三歳程の外見でそこに立っていたのだった。

「……………！」

姿が薄くなった飛竜と共に、何とか大過なく地上に降り立った金色の髪の毛の少年は。既に手にしていた一枚の札を、無言のまま剣先に刺し付け、降り立った白い地面の上に突き立てた。

「——え？」

そこで確かに、年若く見える青銀の髪の毛の吸血鬼は——

あどけない蒼い目を丸くして、現れた懐かしい力の気配に、「何で——……頼也兄ちゃんの、気配？」

金色の髪の毛の少年を中心に、激しく揺れ出した地表の真上、力の主を探すようにそちらに気を取られ。

その一瞬の隙を作るためだけに。青銀の吸血鬼の旧い仲間が書いた札を選択し、容赦なく利用すると決めた少年——

初見から相手の弱点を看破し貫く、天性の死神は。

奇襲たる初撃こそが、最も重要な殺し時とわかっていた……あくまで相手の必殺を目論むのなら。

「——え？」

「——は？」

揃って少し離れた場所に降り立っていた、茜色の髪の少女と、瑠璃色の髪の妹分は。

突然地面が揺れ出したため、手近な木に掴まりながら、その一瞬の早過ぎる決着を茫然と見守る事になった。

「——」

青銀の髪の吸血鬼は、ただその——自身の胸を背から貫いた、刃のように鋭くなった蒼白の紙の札を、不思議そうに見つめた。

「……………なるほど——」

地表を揺らす札を囿に、それとは別に放たれた、もう一つの札——……………それも見知った誰かの気が載せられた、しかしそれ以上書きされた力にもそこで気が付く。

『『刃の妖精』……………その力、オマエは手に入れてたんだ——』

その『剣の精霊』は、精霊の使えない精霊族ではなかった事を……………初めからそうであったと、それすら知るように。

そうして、青銀の吸血鬼が抵抗する力を大部分奪った後で。

その甘さと仲間への思いだけではない、青銀の吸血鬼本来の弱味に、金色の髪の少年は冷徹にとどめを加えた。

「——!」

瑠璃色の髪の妹分が思わず口元を押え、驚きの声を抑えた前で。

三日月型の得物を持っていた青銀の吸血鬼の腕が、剣を抜いた少年によって斬り飛ばされていた。

「——うわ。まじで鬼ね、あの金ピカ目」

何やら紫の目に、普段と違う眼光を伴っていた少年が、何故そうしたかはわからずとも。それは普段の金色の髪の少年……省エネモードと少し違う事には少女は気が付いていた。

「あの色ならひとまず、体は動かせるわけ？ まどろっこしい……………銀が出てくりや早いじゃないの、それ」

「でも——アラス君、倒れちゃったね……………？」

妹分が確認していた通りに、腕を失った瞬間、その吸血鬼は糸が切れたように意識と体の自由を失い倒れ込んでおり。

「信じられない。アイツ、守護者を殺せちゃったわけ？」

それは胸を貫かれ、腕を斬られたためではなく。腕が持った三日月——宝珠を填めた武器を失ったからであったが。

紫金の目の少年は、光を伴いながら激んだ目線で。倒れ込み、全ての身体活動を止めた吸血鬼を無機質に見下ろす。

「アンタはオレが——剣が無いとダメだって、知ってたよな」それを知った吸血鬼も、宝珠無しでは生き物として成立しない、旧い弱味を持っていた事を……………初見から少年は気が付いていた。

「アンタは何で……………ここまで来たんだ——……………」

この聖地では、魔の者である吸血鬼は全力が出せない事……………そのため、青年から少年の姿へ戻っていたのだらう事も。

——おやおや、と。

一瞬のその攻落後、場に元からいた者の嘆息の音が響いた。

「可哀相に。やはり心を残した人形は哀れですね」

あまりに容赦なき速断だったため、助けに入る暇も無かったと、白銀の髪の神父が楽しげに笑う。

「——出たわね、エセ神父！」

「久しぶりですね、水華さん。その節はお世話になりました」

神父の後方、この島で一番大きな建物の入り口付近に、黒髪の幼子と銀色の髪の吸血姫が立ち、遠目で表情はわかりにくいのが、倒れた吸血鬼を見つめているようだった。

幼子は元々無表情だが、それでも顔をしかめたようで、

「ひどいな……優しい兄さんなのに」

猫のぬいぐるみを持つ幼子が空いた手を軽くあげると、人形が一体場に舞い降り、斬り飛ばされた吸血鬼の腕と武器を拾って幼子の元に帰り、

「……持ってたね」

建物の内にいるらしい者に、その腕と武器を渡したのだった。

その幼子の姿をはっきりと、元の紫に戻った目に映し。

幼子に付き添う吸血姫にも、少年は強い動揺を隠せず。

しかし少年が、そんな内心の嵐を味わう間も無く、

「ここで会ったが百年目！ 覚悟しなさいアンタら！」

白の魔法杖を振り上げた少女の周囲から強い風が巻き起こり、見えない巨大な爪となって神父に襲いかかった。

「——！」

四方から逃げ場なく襲い来る風刃に、防御の力を張るしかない神父は顔を歪めて笑う。

「ああ——そう、この風ですね」

輪杖を取り出し力を集中するが、防ぎ切れない強い風に、長い着衣は切り裂かれ、眼鏡も飛んで素顔を露わにした神父は、

「君は相変わらず、風を使うのが好きですね」

「は？ 何言ってるのよアンタ？」

更に追撃を行う少女の風を、致命傷を避けてやり過ぎすだけの神父の姿に。まだまだ余力のある少女は圧倒的な余裕で佇む。

「東でちよつとやり合っただけじゃない。あの時は風なんて、ちよつとしか使っていないし」

「それで充分ですよ。水と火は、君の今の力の方が濃いですが……風は元々、君のその躰には有り得ない力ですから」

今この場には、大きな建物の入り口にいる幼子と吸血姫と、そこからかなり離れた所に少年と妹分が飛竜に守られるように並び立ち。その間で少女と神父が、数メートルの間合いと共に睨み合っただけの状態だったが。

聖地で力が弱っていると観える、魔の気を持ったその神父は……しかし天使のように、清らかな顔で少女に微笑んだ。

「ミラはホントに——風を読むのがいつも巧いな」

「——は？」

突然何故か口調の変わった相手は、その姿までも一瞬、大人の男から大人びた少年のような真影が重なり、

「——!?!」

「え？ 何だろ今の？」

そう観えたのは少年だけでなく、人間の妹分もそれに気が付き。それなら確実に茜色の髪の少女も、その変貌を間近で目にしたはずだった。

顔形まで穏やかな目鼻立ちに変わった、神父の変貌は一瞬であり。にこりと神父は、いつも通り鋭い顔で再び笑うと、

「ユオン君はまだ——君達に何も話していないんですね」

強く顔を顰める少年に気付きながら、少女だけを見つめて……

神父は彼が待ち続けた、古い物語をそこで話し出した。

「君はずっと、ソールの誘いを断り続けていますが……」

風の刃がまだ吹き止まぬ中、心なしか神父の防御の力が強まり、余裕が出来たのか黒髪の幼子の方をちらりと見て言う。

「……何。やっぱりコレ、あいつのストーリーカードだったわけ」

少女は誰にもそれを言っていないが。最近何故か寝不足が続き、特にこうした戦闘中に頭痛が起こるようになった少女は、今も襲い来る痛みにも、納得したように神父を見返す。

「どーせあのバカ守護者も、この『契約』で落としたんでしょ。生憎だけどあたしはそんな、ヤワなメンタルしてないのよね」

「どうでしょうね？ この中では君が一番、生粋の人形適性を持っていますよ」

「——は？」

「己が誰かの人形である事も気付いていない——誰よりヒトに似せて造られた、生きた人形が君ですからね」

白銀の髪の神父の姿をとる魔の者は。少女の力を今までより強く弾くために、少女と同じ光の羽を……おそらく少年にだけ観える程の存在の薄さで、人知れず展開していた。

「君は君の羽に動かされる、ただの人形ですよ。竜牙水華」

「………?」

それは少年も、初めてその少女を観た時に既に得ていた——世に有り得ない生き物への違和感だった。

「……何だ……あれ……?」

本来はどちらも魔性の紅の髪と目が。その背に刻まれた羽に侵され、赤い光を放つ目になった……赤と紅の歪な少女は。

「水華さん。何故君は、ここに来たんですか？」

「はい？」

「何故君は、『黄輝の宝珠』を求める。君のその体はただ——南と北の四天王の、情報を基に造られた人形に過ぎないのに」

ヒトに限りなく近い人形。ヒトでありながらヒトならぬ道で世に現れた、誰かによく似た誰かだと神父は冷然と告げた。

「人形に本来自身の心はありません。宝珠を失えば人形に戻る、あの黒の守護者のように」

地面を赤く染めながら横たわる吸血鬼は、呼吸も心臓の鼓動も、全てを忘れたような静かさに包まれており。

「君はミラティシア・ゲールの羽に動かされ、その末練である『黄輝の宝珠』を求める人形です。人形であるからいくらでも、その身に違う心……違う系統の力を宿す事が出来る。このままた別に吸血鬼の羽を加える事すら、君には可能でしょうね」

「……」

「思えば既に人形だからこそ、望みを尋ねるソールの誘いも、君は撥ねのけられるのかもしれませんが」

人形には本当の意味で望みなどないと。悪魔の血を持ちながら悪魔使いの人間に屈しない少女に、神父は素直に、賞賛の目を向けているようだった。

様々な衝撃を伴う事実の暴露に、少年の後ろで瑠璃色の髪の毛が何も言えなくなってしまう中で。

「——で。だから……それが何なのよ？」

茜色の髪の毛の少女はあくまで、目前の敵へ風刃を緩める事はなく、「あたしが何であれ、あたしは気にしてないし。誰である——と、あたしはあたしの好きにするのよ」

それは全く虚勢ではなく。淡々と少女は、まるで呆れるような顔付きで魔の神父を見返していた。

「アンタこそ——あのませガキの人形なんじゃない？」

神父を貫く視線の先に、黒髪の幼子も捉えて少女は息をつく。「お姉ちゃんとお兄ちゃんがほしい。あのガキの目的は、確かそんなんだった気がするし」

「そうですね。全くその通りです」

東の大陸にいた頃、幼子は一時少女を操り姉として扱い……そして今は目の前の神父、更には黒の守護者を兄として求めている事を、少女は知っていたわけではないが。

「ソール曰く、俺はユオン君と似てるらしいんです」

「……——へ？」

ここを出た思わぬ名前に、ふっと少女は意表をつかれ、「でも俺には既に妹がいますからね。仕方ないので……」その幼子の兄にはなれないと、神父は笑うように。

「ソールはユオン君を、俺は君を——……この呪われた死者の、実の兄妹として求めているんですよ」

少年が決して、自ら口にする事が出来ず。

しかしその話を止める気にもなれない、古い夢の呪いに……少女は確かに動揺を受けたように、赤い瞳を大きく見開いた。

「……それ……まじで言ってるわけ？」

当然ながら、まじまじと神父を見返した少女でもあったが、「あのガキが——……ユオンの兄妹？」

僅かな時を共に過ごした者達の事情に、より驚いた風であり。

そうした冷静な少女とは裏腹に、少年のすぐ斜め後ろで——瑠璃色の髪の少女がぎゅっと、少年のケープを掴んでいた。

「ユーオン……あのヒトの言った事、本当なの？」

「……………」

「水華はあのヒトの妹で——……ザイさん達には娘になるの？ ユーオンは、あそこにいる子のお兄さんなの？」

真摯な目で尋ねる妹分に、少年はそれをまっすぐに見られず、

「水華の羽と躰は多分そうだ……でもオレは、正直わからない」

黒髪の幼子に、確かに少年は何かの繋がりを感じていたが。

しかしそれは先刻の赤い天使と同じ、中身の全くわからない大きな迷いばかりであり、

「でもそんな事より、今はアイツらを何とかしないと」

「ユーオン——」

それより今は、この場でとるべき行動について少年はひたすら悩んでいた——……いつまで自身は、こうしているのかと。

自らの正体を告げた神父は、そこに強く動じていない少女に楽しげに笑いかける。

「——驚かないんですね？ 君は大して」

「……………だから言ったでしょ。あたしが誰だろうが、あたしには関係ないって」

少女はぶんと白の魔法杖を振ると、風の刃だけでなく渦を巻く強い風をよび出し、攻撃の手を強める。

「どーせまた、前世のお兄さんとか言うんでしょ」

「ご名答。確かにそれは、普通はぴんときないでしょうね」

「てかアンタ、さっきあたしが人形って言ったばかりじゃない。

それなら兄もクソもないっつーの」

なるほどと神父は、意を得たように頷き、

「それなら人形な君の、母たるヒトに来てもらいましょか」

渦巻く風の中、身動きのとれない自身の代りとはばかり、新たな攻撃手をそこに呼び出していた。

「——！」

黒髪の幼子の傍にいた、銀色の髪の吸血姫が空から襲いかかる。

「ミズカ——……！」

華奢な体に合わない無骨な爪の武器を右手に、大まかな斬撃を少女は難無く避けたものの、

「もー！ あたしはあのガキ叩きたいっつーの！」

魔法は神父の牽制に必要であり、その吸血姫相手は近接戦だと早々に見切り、魔法杖を短い剣のように構える。

その姿を見て少年は更に迷いを強める。

「……………前に、出ないと……」

「——ユーオン？」

少女にはまだ余裕があり、元々剣士として鍛えられた少女は、近接戦で後れはとらない。それを知らながら少年は、

「ミズカはあいつと戦わせちゃいけない——」

そう思うにも関わらず……足が動かない迷いに支配されていた。

既に少年は、ここに来るまで力の札を三枚使っている。

養父の言では一日五枚以内に抑えるべきなら、この後の事を考えれば、今は体力を温存すべき事もわかったのだが。

「でも——……………」

殺さなければいけない……あの吸血姫は確実に敵であると。

「あいつはオレが……………殺す、べきなんだ——……………」

「……………ユーオン……………?」

少女に再び襲いかかる、銀色の髪で赤い目の吸血姫に、まるでその目を奪われたように少年の視線は固定してしまい。

それでも結局、全く動けない少年の前で、

「あーもー！ 腕力だけはあるんだから、こいつら！」

俊敏な動きで怪力じみた爪を避けながら、少女は白い魔法杖に、剣並みの切れ味を持たせるための力を込める。

「たとえあんたが、あたしの起源の一人だろーと——そんなの知ったこっちゃないし！」

既にその可能性は思い至っていた、頭の回転が速く敏い少女は、  
「あたしの邪魔をするなら、誰だろうと容赦しない！」

今度は少女から攻撃に転じ、銀色の髪の吸血姫に白い魔法杖で大きく斬りかかった。

「——！！」

少年はその当然の流れに、しかし瞬時に緊迫した顔で、

「駄目だ、ミズカ——！！」

「ユーオン!?!」

駆け出した少年に続き、妹分も飛竜を連れて追いかけたものの。その先で展開した思わぬ光景に、どちらもすぐに、立ち止まる事になった。

「つて——な——っ!?!」

「——……………」

少女の白い魔法杖を、吸血姫は爪を防具に受け止めていたが、  
「クレストがつ……………クレストを折るなんて——!?!」

そこで鏢迫り合いの状態となった、爪と魔法杖は——魔法杖が突然折れるという結末となり、少女は場から反転して離脱した。

「——そう言えば言い忘れていましたが」

魔法杖が折れた事で、風の渦から解放された神父はにこりと笑い、代打の吸血姫にも離脱を指示する。

「彼女の躰は北方四天王ですが……………中身の吸血姫は、元々東の四天王の弟子なんですよ」

「——!?!?」

少年と妹分がいる所まで退いた少女は、悔しげに顔を上げる。

「魔物としてのレベルは君に遠く及びませんが、彼女が持ったその爪は、東の四天王の『地の力』を賜った強力な武器です。固体なら何でも破壊可能な、彼曰く斬鉄剣らしいですよ?」

初めからそれが目的というかのように、神父は折れた魔法杖を、歪んだ微笑みで見つめた。

「君のように複数系統の力を持つ者は、身の内で常にそれらが闘ぎ合う状態です。君はおそらく、その杖無しには力を使うな——そう言われてはいませんでしたか？」

「っ——……！」

「道具の力で境界を定め、力の拮抗を保つのは良い方法ですが。その杖が無ければつまり……君は戦えないわけでもありません」

ぎり、と心底悔しげに歯を食い縛る少女だけではなく。

少女が剣でなく、二本の杖を与えられた事は救命処置だと、知っていたながら動けなかった自身に少年は齒嚙みする。

「……生憎だけど！ 戦えないなんて事、あたしにはないし！」

「水華！？」

隣で驚く妹分をもともせず、少女は最大限に——その背の光の羽を大きく広げた。

「クレセント使って、手加減しよーなんてあたしがバカだった。もー頭来た、アンタまじで死刑確定！」

「ミズカ——待……！」

少年や妹分が止める間もなく、まるで流星のように光に包まれ空へと駆け上がった少女は……そのまま全身に風と炎を纏い、

「……おやおや？」  
そこで神父はすぐに——己の次瞬の運命を悟り、軽く微笑んだ。

まさに人間隕石となった少女が、神父のいた場所に突撃し。直後に場には、衝撃波と熱波が大きく吹き荒れる事になった。

「——！！」

「うわあっ」

しかし少年と少女は、実体でなくとも力なら相殺出来る霊獣という障壁にかばわれ、妹分が多少の驚きの声をあげる程度の被害で済み。

「あいたた……もー、加減間違えたー、ったくー！」

煙がこうこうと舞っている中、服のあちこちが裂け焦げている、しかし大きな怪我はなさそうな少女が座り込んでおり。

「……あーあ……二人共、やられちゃった……」

つまらなさげに呑気な声が、黒髪の幼子から小さく発され。

幼子の足下には、人形の手で回収したらしい意識の全く無い青銀の吸血鬼と、白銀の神父が横たわっていた。

「——！！」

その姿に気付いた少女は、再び羽を広げて力を使おうとしたが。

「——え？」

「——は？」

場に突然響いた、無機質な銃声に。

銃声の発信源を、少年も少女も驚きの顔をして振り返った。

「……………」



いつの間にか——黒髪の幼子とその傍の吸血姫を射程範囲に捉える位置に立った、瑠璃色の髪の少女がそこにおり。

「……………」

「こんにちは——人間のお姉ちゃん」

自身と吸血姫にまとめて銃を向けている相手に、黒髪の幼子は変わらず呑気に……無表情のまま淡々と言って、瑠璃色の髪の少女をじつと見つめる。

「ちよつとラピス!？」

「ラピス……………」

その意外過ぎる展開に驚く少年達を、瑠璃色の髪の少女は全く振り返りもせず、少女がそこにいる理由を告げた。

「……………やつと、見つけた——」

瑠璃色の髪の少女は、声をかけてきた幼子の事も全く見ずに。

ただその標的……少年は既に知っていた、ある孤児の仇である銀色の髪の女だけを見つめ、銃口を向ける。

「お父さんの仇の吸血鬼——……水華と一緒にいれば、いつか会えると信じてた……水華にそっくりのあの時のヒト……」

少女にはその心を脅かす者がいて。少女がそれを望むなら、

少年は……その女を殺さなければいけないと知っていた。

「……………びっくりしたよ、初めて水華に会った時は。だって……物凄く、あなたにそっくりなんだもん」

「……………」

無表情に瑠璃色の髪の少女を見つめる吸血姫に、少女も淡々と先を続ける。

「水華が親探しの旅に出るって聞いて……だから私も、一緒に行きたいって無理を言ったけど」

その吸血姫の自身は違うという言葉も、少女は覚えていたが。

人間である少女に、そんなよくわからない事は関係が無く……ただ探し求めた親の仇に、深い憎悪を向ける。

——水華なら多分、一緒にいても大丈夫な気がするけど——

少女の言葉には様々な意味があった事を——少年は知っていた。

——水華は嫌がるだろうなあ——

何かの目的のためであるなら、たとえ誰かの負担になろうと、少年も少女もその目的を遂げる……同じ性質を持つがために。

——私はホントに、足手まといだろうなあ——

代りに願っても役目もない所では、自身の存在を異端に感じ——そこにいる事を疑問に思う所も、全く似通った彼らであり。

いったいどうした因縁があったのかはわからないが。

瑠璃色の髪の少女の実父は、確かにこの女のため命を落とす……そして幼い少女が全てを失ったことは。

それだけは最早、誰にも変えようのない事実だった。

無表情のまま瑠璃色の髪の少女が、女に向けた銃の引き金をひこうとした時——

少女にそれをさせたくないのに、止めに入れなかった少年や。力の反動で座り込み、動けなかった茜色の髪の少女の前で。

「……………おとー、さん？」

「……………」

未だ密度が薄いままの、霊体たる飛竜が不意に——瑠璃色の髪の少女の前に首を伸ばし。少女の深い青の目を、縦に瞳孔が鋭く走る、彩の無い目でまっすぐ見据えていた。

飛竜の目は自身の目であると、ここに来る前に口にした男は。その獣の目は本来、決して優しい印象を与えるものではなく……しかし確かにもう一つの体である灰色の獣を通し、少女の今の父たる男は、ただ真摯に娘を見つめる。

「……………嘔吐き……………」

少女はそのまま——飛竜の前で、ぺたんと座り込んでしまい。

「銃は……………いつでも使っていていいって、言ったのに……………」

少女がここまで旅を続けてきた理由。茜色の髪の少女の傍に、この少女がいる必然性……そこに少女がいて良かった理由を。俯きながら黙って手放した、瑠璃色の髪の孤児だった。

あらまあ——と。

場に突然、そうした一部始終を見ていたらしいある女の……無力が故に、誰にも気付かれにくい偵察者の声が響いた。

「怖いコ達ね、本当に……………ねえ、ソール？ ミカラン？」

「……………」

座り込んだ妹分の横に立った少年は、女の姿を一目見て表情を強張らせる。

「私達はまだ、貴方達を全然傷付けてないのに。私達の方は、もうぼろぼろだわ……………いったいどちらが悪魔なのかしらね？」  
三日月型の武器を、黒の守護者が倒された後から預かっていた女は、建物の内でずっと様子を窺っていたらしく。

少年が花の御所にいた頃にはばらく御所に滞在していた——陽炎と名乗った、肩までの癖の強い土色の髪の、着物姿の女が入り口に現れていた。

黒髪の幼子は、出て来た女を不思議そうに見つめる。

「……………死んじゃうよ？ 隠れてたらしいのに……………」

「あらまあ。ソール、『ピアス』はどうしたのよ？」

「帰ってこない。まだあのヒトが気になるし、捕まってる」

「そう。それなら確かに、私達の命運も尽きたかしらね？」

女は最初、緊迫した顔の少年を見てそう口にしたが。

それは誤りであると——次の瞬間、目にする事になる。

……え？ と。

しばらく俯いていた瑠璃色の髪の少女は、しかし一番早くにその異変に気が付いた。

「水……華？」

正確には少年も、女がここに現れた時点で、その展開になる事は元々わかっていた。

しかし実際に——その少女がそこまでなりふりかまわずに。

これまでの自らを投げ打ったような行動に出るとは、少年も予想出来ず。

そんなあまりに様々な事が、立て続けに一行を襲うのは——

一度崩れた薄氷の下には、いくつもの呪いが眠っていたこと。

それが観えながら何も出来なかった少年を責め立てるように、昏く赤い夢は目を醒まし始める。

「……ふうん……？」

場に響いたその涼やかな声は。

あまりにこれまでと違う様相であるため、誰の声であるのか咄嗟に誰にもわからず。

「わたしにそれをさせるの——……ミラ？」

くすくすと——限りなく淑やかな微笑みをたたえ。

その紅い目の少女は、黒い三日月を詠えた杖を取り出し。

プライドがないわね……と。

少年は確かに、その紅い少女の内なる声を耳にしていた。

身動き出来なかった誰かの代りに、その黒の魔法杖をとれと叩き起こされた紅い少女は、虚ろ故に端整な微笑みをたたえる。

「言っておくけど……皆殺しになるけど？」

「水華——……またあの時の、学校の……——」

少し前に南の地で、瑠璃色の髪の少女が目にした誰かの変貌

——紅の天使と異名をとる者の再来に、息を呑む妹分の横で、

「……——あ……」

場に起きつつあった惨劇の予兆を、確かに少年は感じ取った。

くすくすと紅の天使が立ち上がり、黒い三日月を掲げた上で。

数え切れない程の白い刃が、無数に空に形を成していく。

「水の——魔刃……？」

魔の気を削がれる聖地にありながら、あまりにその発生源が強い力を持ったため、一つ一つが致命傷たり得る飛剣の群れが。

数も威力も制御出来ず、ただ解き放たれただけの力は、主に黒髪の子供のいる方を向くが——この場の全ての者を巻き込む規模で展開されていると少年は悟る。

そしてそれは——少年達に完全な勝利を意味する事態だった。

「きやつ——!?!」

「——!」

事態に気付いていた飛竜が、実体に近い力を再び与えられ、少年と妹分を抱き込むように無数の氷剣の飛来に備える。

飛竜は紅い少女を止める気はなく、流れ弾を全て相殺せんと、少年達だけを守る構えでそこに在った。

「っ——!?!」

このまま行けば、この場に在る者は全員——発生源の少女と飛竜に守られた者達以外、確実に滅びる。飛竜の本体の養父と戦っている人形も、それは無力化する王手であり。

全ての憂い事がここで消えると、全員がわかっていた。

少年や妹分は元の生活に戻り、少女は宝珠を手中に収める。

何一つ問題のない、望ましいその展開に——

そのためにここまで来たはずの少年は………しかし。

「やめてくれ——」

飛竜の懐でもがきながら、有り得ない叫びを口にする。

「やめてくれ、水華——!?!?!」

在ってはいけないその衝動が、何処から来るかもわからずに

……少年は、放たれた氷剣の嵐の中へ飛び出していった。

研ぎ澄まされた短剣のように。その氷の刃はただ美しかった。

まるで彼らがそれまで在った薄氷を削り出したような軽さで……紅い少女は事も無げに、虐殺の黒い力をその敵へ向ける。

五行でも五大要素でもない、氷という複合属性の力——

それは紅く造られた人形が、その起源となる強い魔の者……水と氷を操ることに長けた北の四天王、銀色の髪の吸血鬼から、確かに受け継いでいた力だった。

「……え……?」

「……」

一しきり氷剣の嵐が降り注いだ後、飛竜に匿われて難を逃れた

瑠璃色の髪の少女と、飛竜の元に戻ってきた紅い少女が。

共に目の前の光景を、信じ難いという目付きで眺める事になる。

「ユーオン……?」

何で——……と。妹分が思わず、茫然と呟いてしまった前では。

「……………」

『火』と『土』と『木』の札を咄嗟にまとめて使い、その上に

術封じの札まで加えて……青白い光を放つ剣を真正面に構え、

「……………ごめん、ミズカ——……………」

襲い来る氷から敵を守り切った、金色の髪の少年がそこにいた。

誰もが一瞬茫然とした中で。

唯一冷静に、最初に言葉を発したのは土色の髪の子だった。

「ありがとう。アナタならきつと——そうすると信じてたわ」

「……………」

女は穏やかに笑って少年を背後から見つめる。

「アナタは『ピアス』の——いえ、ソールのお兄さんなんですよ？」

私達と一緒に来ましょう……『ピアス』に囚われたソールを、助けてあげて？」

決して嘘をつくつもりはない女は、変わらずそうして少年に重要な事的一端を伝え。背後から響くそうした女の声に、剣を構えたままで、硬直してしまった少年の元へ——

「それはそいつらには無理だから、こっちは来なさい、ユーオン！」  
びくっと思わず震えた少年に、迷いなき茜色の髪の少女の声が強く届いた。

いつの間にか紅の天使は、影も形もなくなっていた少女は、  
「今回はこれで退却！ アンタはラピの兄貴でしょーが！？」  
悪魔の囁きに惑わされてんじゃないわよ！」

力の反動で座り込んでいた不調も微塵もなくなり、力強く光の羽を広げて少年の前に降り立つと。呆気にとられる少年の手を取り、半ば無理やり引つ張り走り出した。

「……………」

つい今まで少年の背で守られていた黒髪の幼子は、同じように守られた吸血姫の腕にかばわれながら、

「ユオン……兄さん」

幼子から離れていく少年の姿を見つめ——……表情は無のまま、ただ声だけは今までの無機質さと違う感情がのせられていた。

「また……『ピアス』を置いてくの……？」

その黒髪の幼子の——確かに痛みを噛み殺す声を背にして、それでも幼子が誰か思い出せない——……それが妹であると、

どうしても自らに符合させられない、異常な程に大きな欠損に。

あまりに大き過ぎる痛みが、誰のものかもわかる事なく……逃げるように少年は、場を後にするしかなかった。

——わたしのことはもういいから……ラピスを守ってあげて——

その心を少年が取り戻せない理由。

それは最早……その必要が無いからだ、誰かは囁く。

妹という誰かを助ける事が、少年が今ここにいる理由で……

助けが必要なのは、既に自らを取り戻している者ではないと。

白い誰かは無邪気に残酷に、それを捨てたのは少年自身……

昏く赤い夢に心を奪われた者のせいだと、現実を口にした。

最初に来た天空の島の西端を目指して。氷剣を防ぐため力を  
使い切り、ヒトを乗せる事が出来ない飛竜を連れて、少年達は  
ただ無我夢中に森を走った。

「全く、レイアスつてばずーつとあの人形と戦ってるわけ！？  
あたし達が合流地点に着くぎりぎりまで戦う気！？」

飛竜に文句を言う少女に、全く異論なさそうな飛竜は、つまり  
少女の言を完全に認めているようだった。

「何がそんなに気になってんの！？　つてそっか、ユーオンの  
前世。パパなら、あの人形にも前世。パパなわけ！？」

自分で言っただけで納得と、頭の回転の速い少女は一人忙しく、

「おとーさんは多分、飛竜の耳で……ユーオンの妹ってきいて、  
足止めだけじゃ気が済まなくなっただと思うよ」

途中から何と少女に担がれていた妹分は、淡々と口を挟むが。

ヒト一人を背負っても少年と同じ化け物の速度で走れる茜色の  
髪の少女に、少年共々つくづく感心していた。

「ユーオンのためにあのヒト、何とかしたいんじゃないかな。  
私達が着いたら諦めるだろうけど……おとーさん本当、いつも  
一生懸命だから」

「……………」

あーもー、と呆れながら走り続ける少女の横で。少年はずっと  
何も言えずに、ただ足を止めない事しか出来なかった。

札の使用は七枚を超えるな。養父のその見立ては実に的確で、  
ちようど七枚使った少年の体力は確実に限界だった。

さらには剣もいくらか使っていたため、聖地で少しでも気が  
強められていなければ、こうして走る事は出来なかっただろう。

それでも少年には——たとえ限界が来てもこのまま走り続け、  
行かなければいけない場所があった。

「……………」

その道の果てを思い……少年はふつと顔を曇らせる。

「オレ……思ってた以上にろくでもないっぽい——」

『銀色』がずっと隠していた事——それが青白い剣の夢だった。

何故ならそれはある終着を招く逆光を伴い……その度少年は、  
激しい吐き気に襲われ続ける。

「殺さず勝てる程強くなれば、好きだけ剣を使いなさい——」

剣はヒトを殺すためのもの。だからそれはおかしいことだと。  
それでもその言葉の意味を、今なら少年はわかる気がした。

もう夢も何も観えないのに、吐き気は止まらず。それだけが  
今、少年の走りを支える力で…………——

「……………かってなヤツ……………」

少年がここにいる意味を根こそぎ奪う、少年自身の答えだった。

人間の足では半日かかる所を、化け物の走り、夕方前には島の端に少年達は辿り着いた。

後は合流地点の目印をと、少女達は探し始めようとしたが、「大丈夫——ここから動かなくても、レイアスだけならすぐ、きりのいい所で帰ってこれるはずだ」

既にかなり疲れた少女達に、飛竜がここにいればこれ以上動く必要は無いと、不思議な程に穏やかな顔で少年は言い。

「そっか。そう言えばそうよね」

「うん。誰かが追って来たらすぐに逃げる事になるだろうし、今は休んでいいんじゃないかな」

頷き合う少女達を横目に——少年は心から安堵したように笑い。島と空を隔てる周縁の円柱の間に立ち、沈みかかった夕陽を見つめ——……まだ薄明るい蒼い空と、その空に馴染む銀色の夕陽を背に、不意に少女達に振り返った。

「——あれ？ 『銀色』……さん？」

夕陽の逆光のためか、妹分にはそう見えたようであり。

帯剣には便利と勧められて、着用していた袴から剣を外し。柄に巻付けていた蝶型のペンダントも外し、自身の首にかけた少年を、少し離れた場所から妹分は不思議そうに見つめる。

そんな妹分に、少年はあつさり——その結論を告げた。

「ごめん、ラピス……俺には、無理だったみたいだ」

「——え？」

きよとんと少年を見る妹分に、少年はただ、穏やかに微笑む。

「俺は——……これから先も、さつきみたいに邪魔をしそうだ」  
彼らの心配事を解決出来るはずの王手を、自ら不意にした……

明らかな裏切りを止められなかった自身を、一人嗤うように。「俺は……あいつを、殺せないんだ——……」

その時の思いはたった一つで。それが青白い剣の逆光であり。「それなら——……俺の役目は、終わったと思う」

殺したくない。そう望むなら、少年のすべき事は簡単だった。

「殺せないなら……剣なんて持ってちゃいけないんだ」

「……ユーオン？」

誰かが言う程強くなれそうにない少年には、その道しかない。

天空の島と空の境目に立つ少年は、空に剣を突き立てるよう、下向きに掲げると。心から安らいだような顔で微笑み——

「悪いけど。後、よろしくな、水華」

『剣の精霊』は、自らを生かしていた剣を躊躇なく手放し……宝珠を失った吸血鬼と同じように、少年は力を失い崩れ落ちた。

「ウソ……ユーオン——……!？」

あまりに唐突過ぎる結末を、瑠璃色の髪の毛の妹は理解出来ず、

「……ちよつと。洒落にならないわよ、これ」

眼下の空に剣が消えた直後に、息を絶っていた少年を前に……それだけ凜と、茜色の髪の毛の人は断言した。

C r y    p e r    B / D R .

—dead relative—

C 2 ・ 中 盤      了

あれねえ——？ と。ある日の昼下がりのこと。

月が出ていない時間でも、前夜から残っている事もあるその幻は、心から不思議そうな白い顔付きで首を傾げた。

「おかしいなあ。鶯ちゃん達の心は、貰えそうにないなあ？」

白い何かは、現在の居場所をとっても気に入っていた。

「もしやスカイちゃんに先越された？ もう——あの子も本当、過保護なんだから。やつぱり追い出すべきじゃなかったかなあ」

本来は住処でなかった所へ、あるキツカケで移る事が出来た何かは。いつもなら、元の住人を追い出すか、消し化えるのが

定石だったが——居候であれば共存出来る状態にあった。

「キラ君ばかり使っちゃ可哀相なのにな。まあキラ君、私とは相性抜群だし、とても美味しいから私はいいんだけど？」

さらにはこの住処には、引きこもりを定められた何かも外に出られる奇跡があり、まさに新生活を謳歌している何かだった。

「あのコはどうしたいのかな。私を追い出したいか、それとも私に助けてほしいのか」

元の住人、もしくは目前の相手の求める何かになり切る事を性とするそれは、全ては相手次第だと白く微笑む。

「せっかくだから……この住処はしつかり、守らなきゃなあ」  
そのためであれば、多少の詐欺も構わないとそれは笑った。

「あのコの敵を……君の妹の敵を、殺してね？ キラ君」  
そしてそれは、誰かの大切な何かを——白く塗り替え続ける。